R E H K

第 7 号

目　次

《論　文》

《社会と人と人物と》
—アル・アンダルスを理解する一助に—……上　間　篤（1）

¿Quiénes son mexicanos?……牛　島　万（13）

ホセ・ファン・タブラーダの日記を読む
—スペイン語圏への俳句導入者の自然描写—……太　田　靖　子（25）

ボデゴンから《ラス・メニーナス》へ
—絵画をめぐるまなざし—……岡　田　裕　成（39）

Expresiones populares en *La tierra pródiga* de Agustín Yáñez……Cecilia Gómez Bobadilla（59）

《研究ノート》

迂言法（tener＋過去分詞，llevar＋過去分詞）について……橋　本　和　美（71）

《翻　訳》

「芝居」フアン・デ・サバレタ『祝日の午後』より……高　橋　博　幸（訳）（77）

《書　評》

Angel Gómez-Hortigüela Amillo: *El pensamiento filosófico de Juan Luis Vives* Institució Alfons el Magnànim, Valencia, 1998.……安　藤　真次郎（89）

ソフィー・D・コウ/マイケル・D・コウ著『チョコレートの歴史』
樋口幸子訳 河出書房新社 1999年……立　岩　礼　子（93）

《資　料》

スペイン関係文献目録（1998～1999年）……坂　東　省　次（97）

1999

京都外国語大学イスパニア語学科修士会

《社会と人と物と》

アル・アンダルスを理解する一助に

上間 篤

はじめに

> Hay que recalcar que cuando se tiene un ligero conocimiento de lo que es España y de lo que es Europa, resulta que el simple hecho de pertenecer a un grupo étnico tan escaso como el vasco da una cierta sensación de extrañeza.[1]
> (Pío Baroja)

栽培植物にかかわる農耕の形態は世界に様々な固有の田園風景を作り出している。ピオ・バロッハの三部作の作品群にはバスク地方の風土や田園風景が独特の印象派的手法で描き込まれている。バロッハは、小説の創作にあたり、風土と素材の整合性を綿密に追求した作家の一人である。彼の感性は朝霧のようなはかなくて一過性のものに強い愛着を示す。バロッハは飾り気を排除した端正な文体でバスク地方の清楚な風土を丹念に描写した。朝もやが立ち込める情景の描写には随所に牛の鳴き声が響き渡る。その手法には原始ヨーロッパ的風土の本質に迫ろうとしたバロッハの真剣な創作態度が窺える。インド・ヨーロッパ語族以前のヨーロッパの原風景には牛の姿がよく似合うのである。それは動物学が証明することでもある。牛は湿潤な気候に順応するように進化した動物であるらしい。牛の蹄は湿気に強く、ひび割れもまれであるという。ところが古来インド・ヨーロッパ語族の信仰を集めた馬は湿気に弱く、湿潤な気候帯では蹄にひび割れが生じるといわれる。ヨーロッパの風土的原風景を牛の鳴き声に託したバロッハ流の手法には風土の本質的性格が映し出されていて味わい深い。冒頭の引用でも明らかなように、バロッハは自分の身の上を思うとき、バスクのような希少民族集団に属する自分の出自にえもいわれぬ小気味よさを覚えるといっている。バロッハの作風はヨーロッパの性格をインド・ヨーロッパ語族以前の辺境性に求める視座に根差しており、彼の作品には随所にその観点が作者自身の美意識や心象風景といったものと心地よいハーモニーを奏でる。

一方、中世において、イスラム世界の圧倒的な洗礼を受けたエブロ川以南の農耕地帯やそれに連なる地中海周辺部の農耕地の景観は、北方の主穀・牧畜主体の農耕地帯の風景とは明らかに趣を異にする、とその道の研究者は指摘する。その一人樺山紘一は『中世の風景(下)』の中で南方の農耕地の景観の特徴に触れ「南に行くと、もちろん穀物は不可欠ですから作っているけれども、それと同時に園芸作物体系というものが、非常に広い範囲にわたってある。これは南ヨーロッパばかりではなくて、対岸の北アフリカに渡っても東地中海に行っても、ほぼ同じ事情です。」[2]と述べている。氏が指摘する園芸作物にはイスラム時代に東方から導入されたものが主流を占める。それらは今日ヨーロッパの食文化を

豊かにしている要因の一つであるが、イスラム時代の多大な貢献は他にも様々な領域において指摘されよう。本稿は中世スペインに華開いたイスラム王朝の官僚組織、教育・文化活動、風俗・習慣、産業などを考察し、西欧とアジアの懸け橋となったアル・アンダルスの文化史的意義を考える。

コルドバ

コルドバはかつて哲人セネカを輩出した場所として知られ、ローマ帝国の帝政期にはラテン文化圏の主要都市として重要な役割を果たした。中世に至りコルドバはその国際的地位を益々強固なものにする。それは西オメイヤ王朝の再興がこの地でなされたことに起因する。草創期のアル・アンダルスの活力は西欧の地で再興を成し遂げたオメイヤ王朝の様々な開放政策に負うものである。コルドバに新たにオメイヤ朝を樹立したのは、ダマスクスの旧オメイヤ朝九代目カリフ、ヒシャム(724年~743年)、の孫ムアイア(Muawiya)である。ムアイアの実母はマグレブ出身のコンクビーナ(宮廷娼婦)であった。アッパース朝の殺戮から逃れるためにムアイアは地中海東岸のアレッポを脱出し、北アフリカの地中海沿岸部を西に向かって逃避行を重ねた末、実母の縁故者の援助を得てグラナダ近郊のアルムネカル(Almuñecar)に上陸を果たす。756年、ムアイアはオメイヤ王朝の再興を果たし、アブデラマン一世として即位する。王朝の都はコルドバに定められた。その結果、中世イスラム世界は東西の二大勢力に分裂し、東方にはアッパース朝、西方には新興オメイヤ朝が君臨することとなる。両者はそれぞれが自らの域内で一大文明を開花させたことで歴史にその名をとどめる。西方の都となったコルドバは回教圏屈指の中核都市に成長し、「世界の宝石」と讃えられたその隆盛時には人口が30万人を数えとある。ちなみに同時代のセヴィリアの人口は8万3千、トレドは3万7千、グラナダは2万6千人であったと推定されている。市街区には下水施設が整えられ、市内のいたる所に設置された噴水は800を数え、ローマ風の公衆浴場は600余を数えた。

官僚組織

アブデラマン二世(822年~852年)の時代に至ると官僚組織が整備され、官僚たちにはコルドバの市街区に居住区が与えられた。当時官僚たちは4万人に達したといわれる。その主な内訳は大臣、高級官僚秘書、司法官、財務官、検閲官、検察官、諸種の書記官などであった。あまたの高級官僚の役職のなかでも名誉大臣の地位は異色で、それには当代屈指の詩人や音楽家が推挙された。彼らは王室の庇護と寵愛を一身に受けて一世を風靡した。後に触れることになる楽士シルヤブ(Ziryab)はその好例である。

司法権は、コーランの律法の精神に基づき、王権に対してもかなりの抑止力を行使することができた模様である。最高位の裁判官はカディー・デ・ラ・アルハーマ(cadí de

la Aljama)と呼ばれ、代々人徳はもとより博学の律法学者がその役職に就いた。地方の町や村にはカーキム(kákim)と呼ばれた下級裁判官が配置され、この役職には、コーランの律法に通じ、人徳・人望の厚い人物が登用された。司法権は王権からの介入を排除し、その独立性が保たれた。司法権が王に対しても歯に衣を着せぬ姿勢を貫き通した一例が次のように報告されている。

«¡Cuán vil es aquél que tiene que sufrir que la pluma del juez le pegue en el rostro!»[3]

裁判官のペンの鞭には抗し得ないと嘆いているのはおオメイヤ朝のエミール、アル・ハカム一世(796年~822年)、である。また裁判官は様々な司法・裁判業務のかたわら、孤児や障害者をいたわり見守る精神的指導者でもあった。

軍隊組織の中枢部はオメイヤ王朝再興に貢献のあったシリア系アラブ人が占め、彼らは有事の際には軍務に就くことが義務づけられていた。戦場には常に詩人が同行し、民族の英雄談を鼓舞する詩を吟じて兵士の士気を高めた。職業軍人や傭兵には戦闘後に給金が支払われた。兵士が死亡した場合は、その家族が給金を請求することができた。ちなみにオメイヤ朝の軍旗の色は「白」、アッパース朝のそれは「黒」であった。

大臣職を除く官僚の役職人事も異色で、かなり国際色豊であった。先に触れたアル・ハカム一世はラビと名乗るモサラベを近衛部隊の総隊長に引き立て、同時に徴税官の役職をも兼務させた。一方アブデラマン三世(912年~929年、中央集権制度を確立しカリファットを創設)はユダヤ人医師ハスダイ・イブン・サプルを宮廷の侍医に抜擢した。ハスダイはカリファットの歴史に様々な色合いを添える人物として知られ、彼の貢献は多岐にわたる。医学ではトゥリアッカ(古代ギリシャの解毒剤)の製法に新たな活路を開き、当時翻訳書としては未完成であったディオスコリデスの『薬物書』のアラビア語への翻訳を完遂し、キリスト教徒でレオン国の王サンチョ・エル・クラッソ(クラッソは肥満の意)には適切なダイエット治療を施したことで知られる。ハスダイの卓越した語学力(ヘブライ語、ラテン語、アラビア語、誕生間もないロマンス語に堪能)は時宜を得て彼の頭角をうながした。北方のキリスト教徒との外交交渉ではハスダイの語学力が不可欠とされた。ハスダイは、カリファットと神聖ローマ帝国がサラセン人の奪略行為をめぐって険悪な仲になったとき、巧みな外交努力を展開して両者を和解に導いた立役者でもある。ハスダイは外交官の職務のかたわら関税局長(巨額の貿易収入を扱う)やユダヤ人社会の精神的・政治的統率者(Visir)の役職をも兼務した。ハスダイの貢献と働きによりカリファットではユダヤ人社会に特段の配慮が払われ、彼らには商業活動や居住権はもとより信教の自由などが保証された。カリファットで前例のない厚遇を受けたユダヤ人にも際限なく社会進出が認められたわけではない。アブデラマン三世の寵愛をわがものにしたハスダイにも大臣の地位を望むことは許されなかった。アラブ貴族の名誉と権威の象徴は死守されなければならなかった。かといってカリファットの異民族に対する施策が総じて過小に評価されてはならない。コルドバ政庁は、中世という時代に血族意識や血の純血性を尊ぶ心理構造のいまわしさ(西ゴー

ト王朝のユダヤ人に対する非差別意識を参照)を排除しようと努めた点において歴史上特異な存在であり、人事行政に反映されたこれらの特性には時代を先取りした近代精神の到来を予感させるものがある。

教育と文化活動

アル・アンダルスでは人々は極めて洗練された社会生活を営んでいた。それは社会全般における文化と教養を尊ぶ進取的風土に支えられていた。この社会風土の特徴は東方伝来のものであった。中東におけるアラブ人の歴代の王朝はギリシャ、インド、中国伝来の学問を継承し、それらをより高度の学問へと昇華させたことで知られる。中世のアラビア文化圏で他の文化圏に先がけて最も発達をみた学問は医学であった。中東世界におけるこれらの学問の動向に触発されて、アル・アンダルスのオメイヤ王朝は、初期の頃から様々なアラビアの学問を積極的に導入した。アル・ハカム二世(822年~852年)の私設の図書館には実に40万冊にもおよぶ書籍が集められたという。それには書籍を扱う商人の介在も不可欠であった。書籍の流通は商人にとって富の源泉でもあった。アラブ貴族がこぞって書籍の収集家であったことは文化史的にみて特筆に値しよう。貴重な学術書や医学書はときには国家権力の外交政策にも利用された。ハスダイがアラビア語に完訳したディオスコリデスの『薬物書』の原本がその一例である。ビサンチン帝国がギリシャ語版のこの書物をカリファットのアブデラマン三世に献上したそもそもの狙いは、カリファットと絆を深めて同盟関係を結び、当時エジプトで権勢を振るいつつあったファーティマ朝を両者の力で牽制し封じ込めることにあった。様々な経緯を経てアル・アンダルスに蓄積された東方の知の世界はやがて西欧に伝わり、それを契機にヨーロッパは覚醒を迫られ、ルネッサンスを経て近代への道筋を整える。十一世紀から十二世紀にかけて産声を上げた新たなヨーロッパを語るとき、中世アル・アンダルスのイスラム世界をも視野に入れたヨーロッパ像が求められる所以はそこにある。

東方のイスラム社会でひときわ発達を見た医学は早くにアル・アンダルスにも伝わり、そこでは十一世紀に病院が設立され集団医療体制が確立される。病院は診療活動のほかに薬局を設立し、新薬の開発や薬草園の管理運営なども行った。また社会活動の一環として一般民衆の衛生教育にも力を注いだ。王族は私的に医療施設を設け、独自に製品化した薬を無料で貧民に施した。コルドバの市街区だけでも600余を数えたとされる公衆浴場の存在は、回教の清めの思想とも絡んで、衛生教育には特段の配慮がなされた反映とみなされよう。当時北方のヨーロッパには習慣化された入浴の風習などというものはなかった。阿部謹也が紹介する「一日楽しく過ごしたければ風呂へ行け」[4]というドイツの諺などは入浴の習慣に無頓着であった北方の風俗を彷彿させるものである。アル・アンダルスでは浴場は社交の場でもあった。また既婚の女性たちにとっては浴場は唯一家庭の束縛から自らを解き放つ場所であった。コルドバの女性たちは午後には毎日浴場に通うのを日課とした。この入浴習慣については再度取り上げる。時は移りフェリッペ二世の時代になるとかつて

の公衆浴場はイスラム時代の不穏な遺物として敵視され、破壊の対象につるし上げられた。この破壊行為にはフェリッペ二世の宗教的心情と政治的意図が絡んでいた。スペインのもう一つの光と影である。

早くに東方の優れた諸学問を積極的に導入したアル・アンダルスにはコルドバやセヴィリアといった学際都市が出現し、そこには国境を越え、民族を越えて学問を志す人々が寄り集まった。アル・アンダルスにおける教育の高い普及率はこのような学際的な雰囲気と無関係ではない。西方のイスラム社会は、他のイスラム圏と同様に、早くから聖典コーランの読み書きを可能にする義務教育の普及に努め、そこでは聖典の学習が徹底的にしかも半ば強制的に行われた。その結果一般庶民の識字率は飛躍的に伸び、その高い識字率はキリスト教世界のそれをはるかに凌駕するものであった。当時北方では識字率は大変に低く、文字に慣れ親しみ読み書きができたのは聖職者か特定の王侯貴族に限られていた。アル・アンダルスの義務教育は女子の教育にも役だった。彼女らには教習所に通う義務はなかったが、かといってそこへの出入りが禁じられたわけでもなかった。ただし思春期を迎える頃には女子はおのずとそこから遠のいた。アルモラビデ(イスラムの原理主義を唱えたベルベル人の新興信徒集団)の進攻を受けてオメイヤ朝の中央集権体制が崩壊すると、アル・アンダルスにはタイファと呼ばれる小国家群が出現する。23にのぼる小国家群が群雄割拠した時代に、独立心に芽生えた王侯貴族出身の女性や都市の中産階級の女性たちが数多く歴史の表舞台に登場する。彼女たちの中には、伝統的な価値観を嫌い、顔を覆い隠すベールを脱ぎすてる者、身分の壁を乗り越えて平民の男性と結婚する者がなどが現れ、芸術や知的な活動においては、音楽・舞踊・文学といった領域にとどまらず、高度な専門知識が要求された司法や医学といった分野に進出する者も現れた。これらの事実は女性史の一ページを飾るものであろう。この時代の女性たちの社会進出めぐる要因に関しては、一部には、北アフリカのベルベル人社会における女性を崇める精神風土の影響を指摘する声もある。

コルドバはイスラム世界の中軸都市であったにもかかわらず、その国際性を帯びた学際都市としての性格は、学問の交流を通して北方のキリスト教世界とも深い絆で結ばれていた。オットー三世(皇帝在位983年~1002年)と組んでキリスト教世界を精神的に統率した法王シルヴェストレ二世の学問の履歴はコルドバと深いかかわりを示す。学僧の頃の彼はゲルベルトの名で親しまれ、フランス南部のアキタニアの出身であった。彼はフランスで学問を修めた後にコルドバに留学し、モサラベの学僧と寝食を共にしながら東方から伝えられたギリシャの古典哲学の学問体系を学んだ。後に彼はキリスト教界の法王に推挙されるわけだが、それには彼がコルドバで造詣を深めた哲学の知識が幸いしたといわれる。

学問や教育をめぐる種々の展開に加えて、イベリア半島の南部に土着化したイスラム教徒たちは、一般に、学芸や芸能を庇護してやまない文化的土壌を生み出した。しかしそれは、一方において、宗教指導者には頭の痛い問題であった。なぜならば音楽や舞踊などといったものは、聖典の教えに従えば、信仰心を歪めるものだと考えられていたからである。宗教指導者は、一面、深刻なジレンマに立たされていたといえよう。ただしそういった実態がアル・アンダルスを真にアル・アンダルスたらしめた所以でもあろう。貴族た

ちは一芸一道に秀でた者を賛美し、自らも詩を詠み音楽を嗜むのを美徳とした。夏季にはあまたの貴族の館で園遊会が開かれ、それはまさしく当時の貴族趣味を彩るものであった。趣向を凝らした招待状は優雅な韻文でしたためられて発送された。舞踊と音楽は貴族の園遊会には欠かせないものであった。宴もたけなわになると、哲学者や科学者が討論するシンポジューム、詩人たちが即興詩を競う歌会などが開かれた。それらは園遊会の一大行事として式次第にはかならず組み込まれる習わしであった。宴の席で卓越した演奏や詩を披露した楽人や詩人には時に破格の報奨金が授与された。アブデラマン二世の宮廷で一世を風靡したシルヤブはその恩恵にあずかった一人である。ヘスス・グレウスによると、アブデラマン二世はある時シルヤブの一曲だけの演奏に金貨で2万ディナールを授けたといわれる。[5] かつて回教圏にはエル・ドラゴン(*el dragón*)[『千一夜物語』とのかかわりが指摘される]と呼ばれた高価な首飾りが存在した。それをアブデラマン二世は1万ディナールで購入したといわれる。そのことからも王のシルヤブに対する計らいがいかに破格のものであったかがわかる。アル・アンダルスの隆盛時には莫大な量の金がコルドバに集積され、それは後にキリスト教徒の時代になってヨーロッパの経済を潤し、教会堂建設の資金にも運用された。小国が群雄割拠した十一世紀以降には王侯貴族はグッダルキヴィル川河畔に宴の席を設け、川面には舟を浮かべて音楽と詩の共演を堪能した。当時一世を風靡した歌人にロマイキアがいる。女流歌人であった。同じく歌人として名をはせたセヴィリアの王モタミドはロマイキアを溺愛してやまなかったという。コルドバの王宮で繰り広げられた華やかな宴の席では、居並ぶ外国の要人や客人らを前にして後宮のコンクビーナたちが集団舞踊を披露するのが習わしであった。その一つに女性たちが各々腰に彩色を施した木馬をくくりつけて舞う集団舞踊があった。それは騎馬の合戦を舞踊化したものであったといわれる。この群舞はおそらくシルヤブが紹介したバグダッドの宮廷舞踊の一つであったろうが、面白いことに昔時の琉球王朝にもいずこからか類似の舞踊が伝わり、今日にほそぼそと継承されている。沖縄で「ジュリ馬踊り」と呼ばれるものがそれである。専門家はこの舞踊が外来のものであることを指摘するが、その起源や伝来ルートについては何ら明らかにされていない。沖縄に残るこの独特の舞踊についてはいずれ若干の資料をもとに仮説の一筆でも記したいと思っている。

風俗と習慣

回教の聖職者の懸念とは裏腹に音楽は王侯貴族の権威や壮麗さを象徴するものとして尊ばれた。西オメイヤ朝の風俗習慣はすでに触れた楽士シルヤブの来朝によって一大変化を遂げることになる。改革は音楽のジャンルにとどまらず、エチケット、四季折々の服装、ヘアースタイル、娯楽など様々な領域におよんだ。当時バグダッドで絶大な名声を博したシルヤブは師匠の妬みを買い、北アフリカのカイルワン(現在世界遺産)に身を寄せるはめになった。それを知ったアル・ハカム一世(西オメイヤ朝四代目エミール、822年~852年)はシルヤブの獲得に乗り出す。試みは成功し、シルヤブはアルヘシーラスに到着す

るが、王はシルヤブの到着を待たずに他界する。後継者アブデラマン二世(852年~886年)は前王の施策を継承しシルヤブの来朝を歓迎した。楽士には給金が気前よく与えられ、生産力に秀でた肥沃な土地が資産として提供された。楽士にアル・アンダルスに留まる決意をうながすためであった。アル・アンダルスに活動の拠点を構えたシルヤブはコルドバの宮廷社会に華々しくデビューする。シルヤブはコルドバに音楽学院を創設するや、音楽の改革に乗り出す。それは東方の古典様式にイベリア土着のさまざまな音楽様式を取り入れるかたちで進められた。シルヤブの音楽改革は大成功をおさめる。現在モロッコ周辺の北アフリカ沿岸地域で古典音楽として行われている音楽はこの様式の流れを汲むものだといわれる。アンダルシー(andalusí)と呼び親しまれているこの様式は、十六世紀にスペインを強制排除されたモリスコたちによってかの地に伝えられた。当時さかんに行われた楽器にはアラビア・リュート、ラベル(古い型のバイオリン)、小型の竪琴、種々の太鼓やタンバリンなどがあった。シルヤブは楽器にもこだわりを見せ、リュートの改良型を生み出した。当時コルドバの王侯貴族にはそれぞれにお抱えの歌姫や舞姫たちがいた。彼女らの中にはシルヤブの特訓を受けて歌唱力や舞の技術を高めた者もいたことであろう。中世には時に南のイスラム圏からピレネー北方のプロヴァンス地方の王侯たちに歌姫や舞姫たちが献上されることがあった。後にプロヴァンスに出現する抒情詩(畳句を欠いたセヘルの形式を示す)はこのような交流の中から生まれたのであろうとメネンデス・ピダルは見ている。イスラムの歌姫たちが伝えたセヘル(その形式は十世紀のアル・アンダルスの盲目の詩人ムカダムによって確立されたといわれる)はイタリアにも伝播し、アッシジの聖フランシスコを讃える詩の数々は、その大半が、セヘルの形式に則って詠まれているという。

シルヤブの来朝後は人々の日常生活にも様々な変化が現れる。彼が来朝する以前は男性も女性と同様に髪を肩まで伸ばすのが習わしであった。しかしこのヘアースタイルもシルヤブが来てからは消滅し、新たにイラク風に短く円く刈り上げたスタイルがはやり出す。シルヤブのヘアースタイルを真似たものであった。貴族の男性が「いぼた」(alheña)と呼ばれる樹木から作った染料で髭や頭髪を橙色に染めたのもイラク風の流行を取り入れたものであった。女性たちの間では同じ染料で指の爪を染めるのが流行した。そのほか四季折々に服装の色を使い分けることも行われた。それは、春には種々の色、夏には白、秋や冬にはくすんだ茶系統の色合いといった具合であった。このような身だしなみに関する流行やファションはシルヤブが創設したファション学院で上流階級の女性たちに伝授されて広められた。シルヤブはターバンの愛用者ではなかったようである。西オメイヤ朝の頃のアル・アンダルスではターバンの使用は聖職者か司法関係者に限られた。それが民衆の間ではやり出すのはタイファの時代を迎える頃からで、それは明らかにアルモラビデやアルモアーデの影響を示すものであろう。グラナダにおけるイスラム勢力最後のナスリー朝ではターバンの使用がことさら流行し、王朝消滅後もイベリア半島に残留したモリスコはそれの使用を継続した。しばらくしてこのファションにも禁止令がでる。イスラムを象徴する遺影と見なされたのである。

娯楽で特筆に値するものといえば、その頃インド伝来のチェスがアラビア経由でアル・アンダルスに伝わったことであろう。これもおそらくシルヤブが広めたのであろう

といわれている。チェスは瞬時に貴族の間に広まりやがてキリスト教世界にも伝播する。賢王アルフォンソ十世が著した書物にはチェスについて記したものもある。十一世紀のセヴィリアの貴族アベナーマルとキリスト教徒王アルフォンソ六世との間で繰り広げられたチェスの対局試合は、当時のイスラム教徒とキリスト教徒の勢力版図に直接影響を及ぼしたチェス対決として名高い。

回教には飲酒を戒める厳格な教えがある。酒はアラビア語でハムルと呼ばれ、回教世界の伝統的な解釈では、葡萄、ナツメヤシ、蜂蜜、大麦、小麦などを原料とした発酵酒がそれに相当する。そのどれかを飲んで酔った者は、禁断の掟を犯した罪により、80回の鞭打ちの刑(40回とする法解釈もある)に服さなければならない。しかしこの掟はかならずしも厳格に守られて来たとはいえない。アッバース朝では酒を賛美する詩が数多く詠まれたとある。アル・アンダルスではおしなべて葡萄酒が人気を博し、人々は身分の上下に関係なくそれを愛飲した。元来西ヨーロッパには、酒をめぐり、異なる文化圏が併存して来た。バスク地方のリンゴ酒などを除けば、西ヨーロッパの酒文化は北方のビール文化と南方のワイン文化に大別されよう。ビールとワインではそのいずれをとっても回教徒にしてみれば禁断の酒であることには変わりないが、アル・アンダルスでは過去の地理的・歴史的経緯やキリスト教徒からの影響も手伝って、ワインはことのほかもてはやされた。一方ワインが愛飲されたことによって回教徒の裁判官は窮地に立たされた。当時裁判官は酒場のある界隈を避けて外出した。酔っ払いとの予期せぬ遭遇を回避せんがためであった。厄介なことには巻き込まれたくないのが世の人情である。不運にも酒に酔った者にでくわした場合には、酒臭さと食物の発酵による臭いとは判別が困難だとして、その者を放免してやるのが通常の習わしであった。また放免は、時として、地域の指導者か有力者の名前でなされることがあった。裁判官は様々な方策を用いて自分に災いの火の粉がふりかからないようにしたのである。裁判官も時には人の子であった。[8]

アル・アンダルスのイスラム教徒は、身分の上下にかかわりなく、おしなべて大の風呂好きであった。身体を清潔に保ち、端正で身奇麗な服装に心くばりを怠らなかった彼らの生活態度は回教の清めの教えに起因するものだといわれる。かつてイスラム教徒は「貧乏でもパンより先に石鹸を買うものだ」と皮肉を交えて風評されたという。風聞はキリスト教徒の間でささやかれたのであろうが、その内実は逆に当時のキリスト教徒の公衆衛生意識の低さを示すもので興味深い。中世スペインのイスラム教徒の浴場はローマ時代のサウナ風呂を模したものであった。外光を巧みに取り入れた建築様式はローマ時代のそれをはるかに凌ぎ、浴場内の一角には盲目の楽士たちが音楽を奏でるコーナーも設けられた。浴場は男女共有の場所であったが混浴の風習はなかった。慣例として男性は午前に、女性は午後に入浴した。浴場の入り口には番台と水洗トイレが水路の上に設置され、番台では洗髪用の髪洗い粉(特殊な粘土で製造)の販売やタオルの無料貸し出しなども行われた。番台を抜けると着替えの部屋があり、そこには衣服の整理に従事する使用人やマッサージ師などが詰めていた。浴室は熱室・暖室・冷室に別れていた。サウナ室には水路が張り巡らされ、蒸気たきの番人が水路を循環する熱水を床に撒き散らして蒸気をたいた。女性の入浴時には女性の使用人が仕事に従事した。上流階級の女性たちには女性のお供が付き添った。

当時脱毛は女性には欠かせない身だしなみの一つとされ、それは脱毛用の練り粉を用いて念入りに行われた。脱毛用の練り粉に加えて歯磨き粉の存在も知られている。歯の手入れや口臭の予防にも気配りがなされたのである。湯上がりには香料入りのオイルで髪をほぐし、身体には皮膚を艶やかにする特殊なオイルが塗られた。喉が渇くとかぐわしい芳香を放つ飲料水(バラ水などがその例)が愛飲された。身だしなみには香水も必需品であった。この時代王侯貴族の間では香水の使用は特殊な意味をもち、前述のアル・ハカム一世などは、高貴な身分の証しとして、特製の香水を体に染み込ませて戦場に赴いたと伝えられる。かつて日本でも中世には武将たちがお家伝来の香を焚いて出陣に備えた。両者の風習には類似の心理構造が指摘されておもしろい。

産業

農業を主体とした産業の分野でもイベリア半島の南部一帯は新たな時代を迎える。イスラム教徒の入植後に新たに発見された豊かな地下水脈とその有効利用は東方から導入された様々な栽培植物(稲、綿花、柑橘類、砂糖きび、ナツメヤシ、薬草、香木)の栽培に威力を発揮する。ハエン周辺の3000の集落では東方から桑の木と蚕を導入して養蚕業を興し、当時ヨーロッパで高値で取引された絹の生産を始める。イスラム勢力進出後のアル・アンダルスでは肥沃な農耕地はアラブ系イスラム教徒が占有するところとなり、北アフリカ出身のベルベル系住民は辺境の不毛な土地に追いやられた。草創期の西オメイヤ朝の社会不安は、入植地をめぐり、様々な民族が利権を主張して対立したからだといわれる。イベリア半島における移動牧畜は辺境に入植を余儀なくされたこれらベルベル系遊牧民によって始められた。水牛の乳や山羊の乳で作るチーズなどもその起源は彼らに負うものである。今日イタリアのナポリ近郊は英国の王室の食卓を飾るモッツアレラ(mozzarella、純白のチーズ)の生産地として知られるが、その原料は水牛の乳である。イスラム時代にベルベル人によって伝えられた食文化が今日イタリアの経済を潤しているのである。回教の戒律では豚肉の消費は禁じられているが、アル・アンダルスのイスラム教徒の中にはキリスト教徒(モサラベ)に販売する目的で豚を飼育する者もいたようである。肥料の確保を目的としたハトの飼育、蜜の採取を目的とした蜜蜂の飼育は産業の一形態であった。ナツメヤシは砂漠のオアシス農業には欠かせない栽培植物の一つとされるが、今日ヴァレンシア地方のエルチェに残されたナツメヤシのヤシ林は中世イスラム時代の農耕文化の面影を今日に伝えるものである。

製造業では十世紀に羊皮紙に代わる中国伝来の紙漉きの技術がアラビア経由でアル・アンダルスに伝えられ、ハビタは製紙業の中心地となる。東方の熱処理を伴う製造技術(ガラス、刀剣、七宝焼、冶金、陶器、製糖、その他)が伝えられたのもこの時代である。熱処理技術の一例について付言すれば、中世の初期にヨーロッパで取引された砂糖はイタリア商人によって地中海東岸のシリア近辺から運び込まれたものであった。当時地中海東岸一帯は砂糖の一大生産地として名高い地位にあった。後にアル・アンダルスで始まった

製糖業はその後の中世ヨーロッパにおける砂糖の販売や流通システムにも影響を及ぼしたと考えられる。ちなみにスペイン語で砂糖を意味する言葉はアスカル(azúcar)で、それはアラビア語からの借用語である。

おわりに

冒頭に紹介したバロッハはイベリア半島北部の自然風土をこよなく愛した作家である。この地方は、巨視的に見れば、ヨーロッパのブナ林帯の南限に位置し、その湿潤な気候が育んだ自然景観や人間を取り巻く風土は明らかに南方に連なる硬葉樹林帯のそれとは一線を画す。バロッハと同世代の作家たちはそれぞれに辺境の視点からスペインの本質を見極めようとした。多様性の中にスペインのスペインたる本質を追求した98年代の作家たちの思考と考察態度はこの国に関心を寄せる者に深い感銘と示唆を与える。

わが国では中尾佐助氏が栽培植物の観点から地中海地域の硬葉樹林帯に着目し、その植生の特徴を学問的に明らかにしようと努めた。氏によると、地中海地域にはもはや硬葉樹林の原生林と呼ばれるものは存在せず、わずかにその面影をとどめるのはイタリア中部の山岳地帯の林の景観だという。地中海地域における原生林の消失は数千年に渡りこの地域で行われてきた山羊の放牧に起因するという。この観点ではイベリア半島の硬葉樹林の森も例外ではなく、中世にイベリア半島に到達したイスラム教徒はこのような自然環境に東方の農耕文化を伝え、今日ある大規模なプランテーション園芸農業の礎を築いた。人間が生命維持のために営々と続けてきた食料調達の営みは周辺の自然に働きかけて独特の景観を創りだしてきた。スペイン南部一帯に広がる農耕地の景観と風物もそのことの証しである。

中世アル・アンダルスの洗練された生活風景はその多くが現代の生活風景にも直結する。土を原料とした髪洗い粉を例に上げれば、それは昭和40年代頃まで日本で広く愛用されていた土を加工した髪洗い粉を彷彿させ、ユダヤ人医師ハスダイに言及したおりに紹介した解毒剤・トゥリアッカ(テリアカとも呼ぶ)のごときは中国の唐王朝を経由して奈良時代後期にわが国の医療従事者にもその存在が知られることとなったいわくつきの代物である。ヨーロッパではこの薬物は近代医学の進展にともなって十九世紀末には姿を消すが、驚くべきことに日本ではその系統の薬物が昭和の20年代初期にいたるまで滋賀県や鳥取県で製造されていたことが前嶋信次氏の研究で判明している。中世のアル・アンダルスは東洋最東端の世界とも無縁ではなかった。

注

1. Baroja, Pío. *Familia Infancia y Juventud* en *Obras Completas, Tomo VII*. p. 499

2. 阿部謹也・網野善彦・石井進・樺山紘一:『中世の風景（下)』中公新書 44ページ。
3. Greus, Jesús. *Así vivían en Al-Andalus*. p.67.
4. 阿部謹也:『中世の星の下で』ちくま文庫 81ページ。
5. Greus, Jesús. *Así vivían en Al-Andalus*. p.81
6. Sánchez-Albornoz, Claudio. *España Musulmana Tomo I*. p.357.

参考文献

阿部謹也:『中世の星の下で』ちくま文庫、1992。

阿部謹也・網野善彦・石井進・樺山紘一:『中世の風景（下)』中公新書、1993。

Baroja, Pío. *Familia Infancia y Juventud* en *Obras Completas, Tomo VII*.
Madrid: Biblioteca Nueva, 1978, 2.ª ed.

Cuñat, Daniel. *Al-Andalus Los Omeyas*.
Madrid: Anaya, 1991, 1.ª ed.

Greus, Jesús. *Así vivían en Al-Andalus*.
Madrid: Grupo Anaya, S.A., 1991, 4.ª ed.

前嶋信次:『東西文化交流の諸相』誠文堂新光社、1971。

Menéndez Pidal, Ramón. *El Cid Campeador*.
Madrid: Espasa Calpe, S.A., 1989, 10.ª ed.

Menéndez Pidal, Ramón. *Poesía Árabe y Poesía Europea*.
Madrid: Espasa Calpe, S.A., 1973, 6.ª ed.

中尾佐助:『現代文明ふたつの源流』朝日新聞社、1986。

Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*.
Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, 3.ª ed.

Sánchez-Albornoz, Claudio. *LA ESPAÑA MUSULMANA TOMO I*.
Madrid: Espasa Calpe, S.A., 1986, 7.ª ed.

¿Quiénes son mexicanos?

Takashi USHIJIMA

Introducción

Generalmente los humanos tienen muchas oportunidades de pensar en las siguientes preguntas: *¿quién soy yo? o ¿qué soy yo?* Podemos notarlo cuando leemos algo acerca de la historia de la filosofía y el pensamiento. Recientemente los investigadores han comenzado a mostrar interés por las características de la actual sociedad globalizada. Por ejemplo, como ser, la sociedad transnacional, la cultura híbrida, la heterogeneidad, etc., las cuales pueden llegar a romper *las paredes* del sistema social en todas partes del mundo. No es solo uno el camino para la transformación de la sociedad. La fuerza que reacciona contra este cambio siempre se mantiene firmemente, y en la actualidad está en aumento. Ha llegado el momento de pensar acerca de quiénes somos, y al mismo tiempo, tenemos que considerar cómo debemos defender nuestra persona y cómo debemos mantener nuestro espacio dentro de una sociedad. Está aumentando el número de personas que consideran necesario el reestablecimiento de una socieded pacífica y segura. Estando en un período de transformación, constantemente hay muchos factores inestables dentro de una sociedad. Creemos que defender nuestro propio espacio personal es un trabajo que debe ser tratado inmediatamente, y es también un tema que nos interesa a todos.

Para defenderse y defender nuestro espacio, nosotros tratamos de aclarar nuestra identidad y manifestamos nuestra fidelidad hacia la comunidad. Siendo miembro de una comunidad, estaremos siempre protegidos por ella. Conocerse a sí mismo es al mismo tiempo conocer al otro. En este proceso, nosotros enfatizamos las diferencias y diferenciamos a unos de otros, esto significa que excluímos a ciertas personas. Para defenderse a sí mismo y defender el espacio personal, uno puede entablar una acción judicial, o puede esforzarse por convencer a numerosos terceros, justificando sus

razones de diferenciación. Diferenciar a las personas es un instinto humano,[1]y en el proceso siempre interviene la subjetividad, la cual deforma la manera de ver la realidad. En el proceso de diferenciación, está incluída la subjetividad parcial y la cultura ha sido creada históricamente mediante la diferención con el otro. Esta cultura ha dominado a la sociedad. Si una persona que posee poder escribe un texto en el cual diferencia a alguien, sus palabras serán aceptadas por todos y su forma de pensar dominará sobre las personas.

Este artículo tiene por objeto considerar cómo funciona el proceso de diferenciación para excluir a las personas. Aquí expondré el ejemplo de diferenciación de *mexicanos* y *no mexicanos* en la sociedad norteamericana multicultural. Generalmente no se debe incluir en el grupo de *mexicanos* a los méxico-norteamericanos, pero en la actualidad se los incluye en el grupo de ellos. Se incluye en el grupo de *no mexicanos* a los blancos de la clase superior y a las personas que controlan el poder nacional. La situación actual del proceso de diferenciación en los EE.UU. nos hace recordar también algunos problemas semejantes presentes en la sociedad japonesa.[2]

1. ¿Quiénes son mexicanos?

¿Quiénes son mexicanos? Generalmente se dice que son mexicanos aquellas personas que poseen la nacionalidad mexicana y la identidad nacional como mexicanos. Diferenciar a los *mexicanos* de los *no mexicanos* con estas condiciones es un trabajo fácil, pero no es considerado un método preciso para conocer el proceso y la realidad

---

[1] El simposio titulado "El Presente de la Violencia", fue celebrado el día 5 de octubre de 1999, en la Universidad Internacional de Josai (Togane, Chiba). La presentación realizada por Hitoshi Imamura (Universidad de Economía de Tokio) en este simposio apoya nuestra opinión básica.

[2] Este tema fue tratado en una presentación que realicé en japonés sobre "Críticas acerca del multiculturalismo norteamericano y el 'espacio': Los medios de comunicación y los viajes," en la séptima Sociedad Japonesa de Relaciones Humanas, el día 17 de octubre de 1999, en la Universidad Edogawa.

del funcionamiento de la diferenciación. El código *mexicanos* es un código de diferenciación. Éste incluye varios significados, como ser, "hablantes de español," "morenos," "hombres con bigote, de cabello negro, y con apellidos españoles." Además, el código incluye significados negativos como "pobreza," "gente sin educación," "criminalidad," etc. Los países ubicados al *sur* de los EE.UU., o toda América Latina, son los espacios geográficos que estos significados señalan. Teniendo en cuenta estas imágenes negativas del código *mexicanos*, podemos decir que el número de personas que están identificadas con él es mayor al de las que poseen dicha nacionalidad.

Después de los años 70, en los EE.UU., el cual es un país de inmigrantes, se ha realizado una política de multiculturalismo. El gobierno ha permitido que las minorías conserven sus costumbres culturales, sin embargo, los ha obligado a convertirse en habitantes de esta nación para que estén bajo el dominio del estado. El término *méxico-norteamericano* representa la identidad de un grupo minoritario. Al contrario, éste refleja una realidad: ellos son siempre diferenciados como una minoría. La razón de esto es que el código *mexicanos* tiene dos significados opuestos como las caras de una moneda. Uno es el significado positivo con el que los mismos mexicanos manifestan su subjetividad. Y el otro, es el significado negativo con el que los blancos utilizan para diferenciarse de los mexicanos. Este último significado, el negativo, ejerce más infuencia sobre la sociedad en general.

2. "La diferenciación" y "el diferenciar a las personas"

Históricamente la diferenciación se ha repetido muchas veces bajo la estructura social y cultural. Los códigos con significados negativos han sido usados dentro de los discursos negativos realizados por personas con poder. Las personas sin poder pueden ser sujeto de diferenciación, pero no ejercen mucha influencia sobre la sociedad y no podrán cambiar la estructura social y cultural porque ésta está firmemente establecida. En el proceso de diferenciar a las personas, uno trata de buscar las diferencias entre *uno mismo* y *los otros*. Las

características con las que uno diferencia a otras personas son básicamente aspectos superficiales: el *cuerpo* (el color de cabello, el color de piel, etc.), la *lengua* y las *costumbres*. La comparación entre blancos y negros es un ejemplo típico, y generalmente los mexicanos han sido considerados como negros en el momento de ser diferenciados. Algunos norteamericanos llaman a los mexicanos *greasers*.[3] Esto significa que los blancos tienen la impresión de que los mexicanos se parecen a los negros por la piel castaña que poseen. La lengua que los mexicanos hablan, el *español*, tiene sólo cinco vocales (a, e, i, o, u) , y es más fácil de escribir que el inglés. Muchos blancos no comprenden el español de México, incluyendo sus jergas y dialectos. Una lengua desconocida contribuye al acto de discriminación y crea un cierto prejuicio hacia los mexicanos.

Generalmente los mexicanos comen *tacos* todos los días. Viendo a los mexicanos comer tacos en los puestos callejeros, los blancos no pueden aceptar fisiológicamente esta costumbre porque consideran que es poco higiénico y de mala educación comer en las calles. Los blancos han considerado a esta diferenciación como un acto correcto. Ellos piensan que es justo que los *Hispanics* en los EE.UU.[4] (incluyendo a los mexicanos) sean objetos de discriminación porque provienen de tierras salvajes y primitivas.

Las diferencias en las costumbres no son un problema si las

---

[3] La palabra *Greasers* significa "personas con la piel grasienta," y generalmente señala a los mexicanos de la clase obrera en forma irónica. Hay una palabra semejante a ésta; *Wet back*, la cual se utiliza para indicar a los mexicanos que cruzaron el Río del Norte (Río Grande) ilegalmente. En español, se los llama "los mojados."

[4] *Hispanics* son las personas que hablan español, de origen español o latinoamericano, y en general tienen el mismo significado que la palabra *latinos*. En este artículo, utilizamos la palabra *Hispanics* por las siguientes dos razones. En primer lugar, en la palabra *Hispanics* están incluídas la discriminación y el prejuicio de los blancos, y hay tendencia de usar este término en forma negativa. Las personas que son diferenciadas por los blancos son los *Hispanics*, por eso, en este artículo decidimos utilizar esta palabra. En segundo lugar, lingüísticamente, se puede traducir la palabra *Hispanics* como hispanos, pero esta palabra tiene otro significado en los EE.UU., en especial, en Nuevo México; los *hispanos* son los decendientes de españoles y no incluyen a las personas de los países latinoamericanos.

personas de diferentes culturas no comparten un espacio personal en común. Sin embargo, las oportunidades de compartir un espacio entre blancos y no blancos están aumentando gradualmente a causa del crecimiento de la población de los no blancos y la equivalente oportunidad de obtener trabajo bajo el sistema del programa *Acción Afirmativa*.[5] Una investigadora del proceso de asimilación de las minorías a la sociedad norteamericana multicultural, dice que en el pasado los mexicanos y méxico-norteamericanos eran considerados como blancos.[6] Durante el período 1920-1930, los mexicanos fueron aceptados en lugar de los chinos y los japoneses como fuerza laboral barata. Desde 1946 el Programa Bracero empezó a aceptarlos como trabajadores temporales en las fincas de California. Durante el período en el que se llevó a cabo este programa, los trabajadores mexicanos fueron mano de obra necesaria para el sistema económico norteamericano. Los blancos también trataron de acceptarlos sin ninguna discriminación o prejuicio, y se esforzaron por buscar puntos en común con ellos. Por ejemplo, la cultura mexicana recibió influencia de la cultura española, la cual es un país europeo; por lo tanto, los blancos consideraron esta característica como un punto en común con ellos quienes eran generalmente de origen anglosajón.

En la historia universal las minorías y las mujeres se vieron obligadas a participar en las guerras del país. Entendemos que la diferenciación puede ser controlada por medio de la política del gobierno. Sin embargo, la diferenciación nunca desaparecerá porque los humanos tenemos como instinto diferenciar a las personas, y este instinto está siempre presente en el interior de cada uno. Cuando

---

[5] El programa *Acción Afirmativa* fue establecido en los años 60 para elevar el movimiento cívil. Además, ésta es una ley para apoyar a las minorías, sin embargo, es un problema, pues, discrimina a los blancos. Existieron casos en los cuales personas pertenecientes a una minoría, sin demasiada habilidad para un trabajo determinado, fueron elegidas para este puesto impidiendo que los blancos trabajen en él.

[6] Véase Yuko Matsumoto, "Amerikajin de arukoto/amerikajin ni surukoto; 20seiki-shotô no 'amerika-ka' undô ni okeru jenda, kaikyû, jinshu" (Ser norteamericano/ lo que se le hace a un norteamericano; El género, la clase y la raza en el movimiento de "americanización" en los primeros años del siglo XX) en *Shisô* (el pensamiento) no.884 (febrero de 1998), pp.56-57.

alguien invade nuestro espacio personal, uno trata de excluir a la persona que lo invadió y trata de expulsarlo de su espacio. La diferenciación de los blancos hacia los mexicanos volvió a empezar cuando los mexicanos comenzaron a causar muchos problemas sociales en los EE.UU. invadiendo los espacios personales de los blancos. El Programa Bracero terminó en 1964 y el gobierno norteamericano limitó la entrada de los mexicanos a los EE.UU. La política multiculturalista que comenzó durante los años 70, reforzó la diferenciación y la exclusión de los mexicanos. El multiculturalismo fue una solución tomada por los blancos para defender su espacio personal.

3. Los medios de comunicación como mecanismo cultural para reproducir la diferenciación

En los EE.UU. las culturas minoritarias fueron consideradas como culturas nacionales durante la política multiculturalista. La exclusión de las minorías disminuyó pero la diferenciación nunca desapareció. Admitir a las diferentes culturas étnicas es mantener y elevar la conciencia de las personas con respecto a la diferenciación hacia las minorías.

Los medios de comunicación son un mecanismo cultural para reproducir la diferenciación. La información que suministran los medios controla la manera de pensar de los humanos.[7] La *memoria* de los humanos también es controlada por los medios. Cuando los blancos elaboran programas, la discriminación y el prejuicio hacia las minorías están siempre incluídos. En un artículo escrito anteriormente hice mención acerca de la imagen con la que los *Hispanics* son representados dentro de las películas norteamericanas. Los hombres son amables pero también impacientes y violentos. Las mujeres son apasionadas, maternales y virginales pero son también impacientes, rudas y dependientes. Estas imágenes son estereotipos

[7] Existen numerosos estudios recientes acerca de los medios de comunicación y la cultura.

de los *Hispanics* y de los latinoamericanos. Existen también *Hispanics* que no se adecúan a estos estereotipos. Ellos superaron o están superando las imágenes establecidas por los estereotipos, pero sufrieron o están sufriendo muchos sacrificios para poder cambiar dicha imagen.[8]

Por otra parte, ¿no han existido productores *Hispanics* de programas televisivos? Antes de los años 80, ya existían emisoras que transmitían programas en español, y también ya se publicaban muchos periódicos en esta lengua, los cuales eran básicamente locales. En los años 80, fueron fundados por accionistas no *Hispanics* los dos canales de televisión en español más grandes de los EE.UU., *Univisión* y *Telemundo*. Actualmente estos canales poseen un red de cadenas de televisión en todo el país. El poder de los medios masivos en español se extendió en este período por las siguientes dos razones. En primer lugar, se produjo en los EE.UU un aumento repentino del número de inmigrantes procedentes de países latinoamericanos. Durante los años 80, muchos inmigrantes no sólo fueron a los EE.UU. como trabajadores, sino que las revoluciones y los conflictos políticos en América Latina hicieron que elijan a este país como lugar de exilio. En segundo lugar, el gobierno norteamericano promulgó la nueva Acta de Inmigración en 1986 y limitó la entrada de los latinoamericanos. Al mismo tiempo, los movimientos en contra del gobierno norteamericano aumentaron entre los *Hispanics*. Muchos *Hispanics* reclamaron sus derechos haciendo uso de los medios masivos en español. Estas emisoras fueron consideradas medios antigubernamentales. Por esta razón, los blancos comenzaron a considerar a estos medios como la representación del *Hispanic Power*, y promovieron la exclusión de los *Hispanics* de los EE.UU. Sin embargo, los medios masivos en español tenían como objetivo el

---

[8] Takashi Ushijima, "Beikoku eiga ni okeru hisupanikku/ratino no ekkyôteki seikaku ni kansuru oboegaki" (Nota sobre las características trascendentales de los Hispanics/Latinos dentro de las películas norteamericanas) en *Josai International Review* 5 (noviembre de 1999), pp.39-62. Véase también Clara E. Rodríguez, *Latin Looks: Images of Latinas and Latinos in the U.S. Media* (Boulder: Westview Press, 1997).

aumento de sus ganancia más que el ayudarlos.

La crítica contra la política multiculturalista aumentó a mediados de los años 80. La enseñanza obligatoria en lenguas bilingües (inglés y español) fue un tema muy discutido. Como resultado, en 1986 el inglés fue establecido como lengua oficial en el Estado de California. En este mismo lugar, la abolición de la enseñanza obligatoria en lenguas bilingües fue aprobada por el plebiscito llevado a cabo en 1998.[9] Estos resultados obtenidos en California influenciaron al resto de los estados, sobre todo, a los ubicados en el sudeste del país, en los cuales la población de los *Hispanics* es numerosa. En los Estados de Arizona y Florida, el inglés fue aprobado como lengua oficial por medio del plebiscito. En Arizona, una resolución que obligaba a usar sólo el inglés (English Only Movement) en lugares oficiales fue aprobada en 1988. Sin embargo, luego de un tiempo, numerosas personas comenzaron a apelar contra esta acta, la cual no fue finalmente aprobada.[10] En el Estado de Nuevo México, ambas lenguas, el inglés y el español, son oficiales. En Texas, no hay ninguna acta que diga que el inglés es la única lengua oficial.

Los medios masivos en español producen un espacio imaginario en el cual los *Hispanics* son los que tienen el poder. De esta manera, los *Hispanics* tratan de invadir el espacio personal de los blancos, haciendo que éstos se sientan inseguros. Los recuerdos de estas experiencias almacenados en la *memoria* de los blancos hace que confirmen el *Hispanic* Power dentro de la sociedad.[11]

---

[9] Takashi Machimura, *Ekkyôshatachi no rosanjerusu* (Las personas que cruzaron la frontera para poder vivir en Los Angeles), (Heibon-sha, 1999), pp.201-203.

[10] http://www.fac.org/legal/supcourt/96-97/Ariz.sum.htm

[11] Geoffrey Fox, *Hispanic Nation: Culture, Politics, and the Constructing of Identity* (Secaucus, N.J.: Carol Publishing Group, 1996), pp.40-66; Machimura, *op.cit.*, pp.204-207.

4. "El diferenciar" y "el excluir"

¿Cuáles son las condiciones para excluir de nuestro espacio personal a las personas que son diferenciadas? Las personas que son excluídas son aquellas que han invadido o tratan de invadir el espacio personal de uno. Si uno no es invadido, nunca existiría una exclusión.

En caso de tratar temas relacionados con la exclusión, tenemos que prestar atención a las relaciones existentes entre la exclusión y el poder nacional. En los espacios personales, el poder nacional puede intervenir a excluir a las personas.

En los EE.UU., el poder nacional interviene en los siguientes lugares: la frontera, el Departamento de Inmigración (la Migra), East L.A.,[12] las fábricas relacionadas con la industria textil,[13] etc. En estos lugares, la división entre los vencedores (los blancos) y los vencidos (los mexicanos) es clara. Siempre son los blancos los que excluyen a los mexicanos.

La película norteamericana *Born in East L.A.* (1987) nos relata una historia interesante. El protagonista Rudy (Cheech Marin) es un méxico-norteamericano de nacionalidad norteamericana. Un día, Rudy fue a buscar a un pariente mexicano suyo a la fábrica en la cual éste iba a comenzar a trabajar desde ese día. Cuando él llegó a la fábrica, la Migra llegó para arrestar a los inmigrantes ilegales. Desfortunadamente Rudy fue arrestado por la Migra porque fue considerado un trabajador mexicano ilegal. Él insistió en su inocencia, pero su explicación no fue aprobada por los oficiales de la Migra porque él tenía las características como las de un mexicano (nombre mexicano, piel castaña, y con bigote). A pesar de que hablaba un perfecto inglés, sin acento español, pues no lo sabía hablar, él también fue arrestado junto con los otros mexicanos ilegales. Ésta es una historia ficticia la cual critica "con cierto humor" al poder

---

[12] El barrio este de Los Angeles es la residencia de los Hispanics más famosa en California.

[13] Muchos mexicanos ilegales, sobre todo, las mujeres están trabajando en las fábricas relacionadas con la industria textil.

nacional. [14]

Esta película satiriza también la imperfección en el proceso de exclusión de los mexicanos por el poder nacional. Hay una escena en la cual los mexicanos ilegales (incluso otras minorías, como ser, latinoamericanos, chinos, indígenas, etc.) pasaron por una ruta clandestina en Tijuana (México) y llegaron a East L.A. En ese mismo día, se estaba celebrando la fiesta del *Cinco de Mayo.*[15] Aunque un policía los vio pasear por las calles, no se dio cuenta de que eran ilegales. Esto indica que la fuerza del poder nacional es varia según el lugar y el espacio. La influencia del poder nacional no es tan igual en todos los lugares y espacios como *la teoría de la cárcel* que menciona Michel Foucault.[16] La exclusión por parte del poder nacional es contradictoria. Ésta excluye a las personas que no deben ser excluídas y no excluye a las personas que deben serlo.

La exclusión en el espacio "personal" es un problema que nos concierne. En los problemas relacionados con el espacio personal, no siempre interviene el poder nacional, y es por eso que los conflictos existentes entre las personas están aumentando y son difíciles de solucionar.

Conclusión

En este trabajo hemos estudiado el proceso de diferenciar y excluir a las personas. Defenderse y defender nuestro propio espacio es una característica y un instinto muy común en los humanos. El conflicto sucede cuando alguien invade este espacio personal. El poder nacional excluye a los mexicanos enviándolos a las cárceles

---

[14] Véase Rosa Linda Fregoso, *The Bronze Screen: Chicanas and Chicanos Film Culture* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1993), pp.49-64.

[15] El 5 de mayo de 1862 fue el día en que el ejército mexicano venció al ejército francés que había invadido México a mediados del siglo XIX, y es un feriado nacional de México.

[16] Sobre *la teoría de la cárcel*, véase Masachi Ohsawa, "Denshi media no kyôdôtai" (La comunidad de los medios electrónicos), en *Denshi media kûkan no henyô to tabunka shakai* (Las sociedades multiculturales y la transformación del espacio de los medios de comunicación), (Seikyû-sha, 1999), pp.74-76.

norteamericanas o haciéndolos regresar nuevamente a México. Es posible coexistir en un espacio en común, pero en este caso, mutuamente es necesario tener "consideración" hacia el otro y abandonar nuestro propio egoísmo.

ホセ・フアン・タブラーダの日記を読む
－ スペイン語圏への俳句導入者の自然描写 －

太田靖子

はじめに

タブラーダ（1871~1945)は、スペイン語詩に俳句形式を導入した日本趣味の詩人として知られている。1919 年には、日本の俳句の影響を受けた３行の短詩型のみで構成されているスペイン語圏初のハイカイ[1]集『ある日...』(*Un día...*)を、1922 年には、第２ハイカイ集『花壷』(*El jarro de flores*)を出版している。

本稿で読み進めていく『作品４日記（1900 - 1944)』(*Obras Completas IV Diario(1900-1944)*)（以降、『日記』と略す）は、現存するタブラーダの手書きの日記をメキシコの評論家 G.シェリダン(Guillermo Sheridan)が編集したものである。メキシコの国立自治大学より 1993 年に出版された。この『日記』は、近代メキシコ人作家の数少ない日記であるという点において重要性が高いことをシェリダンが指摘している。加えて、ごくわずかな日本人によるタブラーダに関する論文や研究書[2]は、この『日記』の出版以前に書かれていることから、本論では『日記』を通してより正確なタブラーダ像に接近することを試み

---

[1] 俳句という呼称に関して、スペイン語圏では、フランスの影響により、"haikai" という呼称が多いので、本稿では、タブラーダのスペイン語で書かれた短詩型のことを＜ハイカイ＞と呼ぶこととする。

[2] 日本人による先行論文および研究書は、次の４つのみである。田辺厚子は、1981 年に、タブラーダについての研究書 *El japonismo de José Juan Tablada* を顕し、1990 年にそれを日本人読者向けに『北斎を愛したメキシコ詩人』として書き下ろしている。大島正には、２本の論文「タブラーダと俳句」(『俳句』12(12) 角川書店 1963)と「メキシコ近代詩における俳句の影響」(『人文学』44 同志社大学 1959)（このなかでタブラーダを取り上げている）がある。

るつもりである。

『日記』は、タブラーダが29才の1900年5月7日から、73才の1944年8月までの期間のものだが、欠落している期間も多々あり、何年か分が紛失している。

この『日記』は、タブラーダの母国語であるスペイン語で書かれているが、英語やフランス語も混じっており、驚くべきことに、日本語がかなり出てくる。

本稿では、『日記』に出てくる自然描写を読むことによって、タブラーダの感受性や自然との関わり方を考察する。それによって、自然界の動植物を詠むハイカイを書くに至った彼の人間像や資質を浮かび上がらせることができるからである。これらの考察は、タブラーダのハイカイ集がどのような背景で生まれたかを知るのに役立ち、彼の自然志向の証左ともなり得る。加えて、タブラーダの2作のハイカイ集についての別稿に繋がるものである。

1.『日記』のなかの俳句世界

タブラーダの『日記』には、自然に関する描写が散見しており、その描写から、われわれは、彼の感受性の豊かさや、自然に対する深い愛情を読み取ることができる。加えて、描写された世界は、日本の俳句世界にも通じている。いくつかの箇所をここに紹介しよう。

> 1905年9月9日(土)
>
> ベッドで本を読む。何か物音がしたので、着物に包まれた体を起こしてのぞいて見る。満月が輝いている静かでほのかに明るい庭には、午後に降った雨のおかげで光っているアビシニア[3]の背の高いバナナの木が見え、月がその広い緑色の葉のすじを照らし出している。

何と繊細な自然描写であろうか。自然に親しんで生活している日本人でさえも見逃してしまいそうな光景を日記に書き留めている。こ

---

[3] エジプトの旧称

のころは、まだタブラーダは、日本の俳句の影響を受けた"poemas sintéticos"(凝縮詩)と自身が呼ぶ3行詩を書き始めていない。しかし、彼が描き出しているこの世界は、「月光に照らし出さるる芭蕉かな」という俳句に仕立てることができる。タブラーダは、まさしく俳句の世界を日記に描いているのである。偶然にも「芭蕉[4]」は、秋の季語であるからタブラーダが日記を書いた9月ともぴったりくる。また、正岡子規(1867～1902)の「隣からともしのうつるはせをかな[5]」や田村木国(1888～1936)の「月光に一枚白き芭蕉かな[6]」の世界にも通じる。このときすでに、タブラーダのなかには日本の俳人のように自然の細やかさを愛でる鑑賞眼が備わっていたようである。

タブラーダは、フランスの19世紀の小説家ゴンクウル兄弟(Les Goncourt)を崇拝していた。兄のエドモン・ド・ゴンクウル(Edmond de Goncourt, 1822～96)が日本の浮世絵を紹介したことは周知のとおりである。兄弟は、タブラーダの愛読書であったその共著『ゴンクウルの日記』(*Journal des Goncourt*, 1887-96)において、日本人の自然に対する関わり方とヨーロッパ人の関わり方を比較している。この比較が非常に当を得ており、しかも、ゴンクウル兄弟の言う日本人の自然を見つめる目は、タブラーダの自然を見つめる目と似通っているので、ここに紹介する。

> 日本人はヨーロッパ人が興味を感じる自然現象よりは、はるかに細かな自然の風物に注目し、それを観察して、愉しんでいる。すなわち、田園がわれわれに語りかけ、その田園をわれわれが描き出すためには、ある雄大な景観、壮大な美をともなって眼前に現れなければならないのに、いいかえれば、嵐とか日没とか日の出とかによって田園が劇的になることが肝要であるのに、日本人はといえば、そんなものは必要としないのだ。先頃わたしは日本刀の鍔を買ったが、それは空の一角に銀の三日月がかかり、雪模様の空から秋の黄

---

4 「芭蕉」とは、中国原産でバナナ類の総称。日本にも古くから渡来していた。

5 『獺祭書屋(だっさいしょおく)俳句帖』所収。

6 『雑詠選集』所収。

ばんだ葉が二枚散りかかっている図柄である。木そのものはそこには見えていない。その二枚の葉こそが、芸術家によって想像された背景のすべてなのだ。かの地の詩の冊子などもまた同じように、この二枚の葉で成り立つのであろう[7]。

タブラーダにとって、庭のなかの、月が照らし出しているバナナの広い葉のすじが、ひとつの詩の世界なのである。それは、確かにゴンクウルの言う万人を感動させるほど劇的なものではない。しかし、そこには自然を愛するもののみが感知できる小さいけれども深淵なる世界がある。ゴンクウルの言う「かの地の詩の冊子」とは俳句の冊子のことであろうが、俳句とは、そういう小さな世界のなかに自然の偉大さや宇宙を見つけ出す文学であり、タブラーダには、生来その感性と能力が備わっていたようである。動植物が人間の下に位置するという構図を持つ人間中心主義の西欧世界では考えられない感性であり能力である。

タブラーダは、この芭蕉の葉を描写した 1905 年以前にも自然界の小宇宙を構成している小動物や植物にすでに目を向けていた。そのことは、来日する直前の 1900 年に書いたエッセイ「東洋のアルバム」にうかがえる。

> ... 強烈な特徴と繊細な示唆に富んだその芸術（日本芸術）の影響は、ヨーロッパの芸術家に小さい植物や動物を研究し、置物や装飾品に新しい要素を取り入れることを促した。その要素とは、柱頭のアカンサス葉飾りのお定まりの葉や、古典的なガーゴイル[8]につけられたライオンの顔や怪獣でもなく、尖塔アーチ時代の錯綜した植物でもない。曲がった茎に花をつけている雛罌粟の上品さや魅力、そのそばには、風に揺れて黒い種を撒き散らしている花弁の落ちてしまったさく果[9]。広い野原では、アーモンドや花盛りの桃の枝の

---

[7] ゴンクウル兄弟　斎藤一郎編訳『ゴンクールの日記』岩波書店 1995、p.290.

[8] 樋につけられた怪獣などの形をした排水口。

[9] 果実の一種。子房が 2 室以上あり、熟すると果皮が乾いて縦に裂け種子を散布する。鳳仙花、朝顔、百合など。

調和、一匹の虫の装飾品のような愛らしさ、巣に止まっている蜘蛛、金属的な鞘羽を半ば閉じている甲虫、関節のある触覚を揺らしながら延ばしている虫などである。日本の自然主義の見本のおかげで、われわれの世界の芸術家たちは、これらのものに目を向けるに至った。...（括弧内は筆者が付す[10]）

たった一輪の曲がった茎に花をつけている雛芥子や巣に止まっている蜘蛛などにまでも、自然の無限の美しさが宿っていることをタブラーダは知っていたのである。

次の『日記』の描写も俳句世界を描いている。

1912年1月27日(火)
すばらしい十五夜。薄暗い虹色の貝の光沢のような雲間で、奇跡的に巨大な真珠のような月。

この描写は、のちの1919年に次のハイカイとなってタブラーダの詩作品に結晶することになる。

LA LUNA	月
Es mar la noche negra;	黒い夜は海、
La nube es una concha;	雲は貝、
La luna es una perla...	月は真珠　（『ある日...』）

タブラーダは、机上で俳句を創作していたのではなく、実際に彼が見た自然を俳句にしていたのである。タブラーダは、このように、自然に囲まれて自然と共に生活していた。日本の俳句という自然界を詠む詩形式を知る以前から、その俳句世界を知っていたのかもしれない。

2．タブラーダの自然との語らい

---

[10] "Álbum del extremo Oriente", en *Revista Moderna*, México, 1ª quin. de mayo de 1900, III (9).

1908 年、タブラーダは、メキシコシティーのコヨアカン地区(Coyoacán)に日本風の屋敷を建て、日本人の召し使いと共に 1914 年まで暮らす。その部屋には、蒐集した数々の日本の品々が飾られており、庭は日本庭園風に造られていた。『日記』にはその庭の描写が何度か登場する。

> 1912 年 12 月 2 日(月)
>
> 庭師とその見習いが例年通り庭の池を浚い始めた。毎年この時期には、柳の葉が落ちて、池は汚く濁っている。池をきれいにしたおかげで、金魚や一番大きい鯉がいないのに気づく。多分誰かが、召し使いのいない日曜日の午後あたりに盗んだのだろう。その誰かというのは、特定することはできない。というのは、こそ泥や盗癖者は、増殖するからだ。今回、一番残念なことは、心ない泥棒のために、折角飼い慣らした魚たちが私を信頼しなくなり、疑い深くなり、臆病になってしまったことだ。もう私をうかがいに寄ってこないし、パンを投げても近づいてこない。驚かされた亀も池の底から上がってこない。盗まれた一番大きな鯉は、日本にいる鯉のように、なついていたのに。日本では、人間はこうしたおとなしい動物の友達で、メキシコのように、犬や鳥や蝶のような最も美しく従順で役に立つ動物を残酷にも捕獲したり、いつも待ち伏せしたりするようなことはないのである。

タブラーダは、日本に滞在中[11]、東京の芝にある「蓮の茶屋」に行き、そこで、よく飼い慣らされている亀を初めて見たらしい。そのときの印象を、『日の国にて』(*En el país del sol*)のなかのエッセイ「<クルマ>で巡る東京」("Tokio al correr del "kuruma"")に綴っている。

> それは亀だった。茶屋のかわいがっている百匹もの亀だった。自然とあらゆる生き物をこよなく愛する日本人は、亀が寄ってきて、お客に蝮のような小さな目を瞬いて餌を求めることに慣れている

[11] 1900 年 7 月初め頃に来日。

のである。何と日本らしい！ゴンクウルの描いた亀と全く同じだ。
「亀とはブロンズの２枚の皿のなかにひっこんでいる蛇である[12]」

われわれ日本人にとって、池で飼われている鯉や亀が人間になついているというごく当たり前のこととも言える事実は、タブラーダにとっては、一種の驚きであり感動であったのだろう。彼の見た茶屋の飼い慣らされている亀は、ゴンクウルの書物を通してすでに読んでいたものと全く同じだった。日本で彼が目にした、小動物と人間との心の通い合いを、タブラーダは自分の庭で味わうべく鯉や亀を飼い、それらを慈しんでいたのだろう。しかし、心ない盗っ人の行為によって、小動物たちは人間を恐れるようになってしまった。そのことが、彼らを愛するタブラーダにとっての嘆きであったのだ。日本にほんの数カ月滞在しただけで、タブラーダは日本人に倣い、日常生活のなかで自然の動植物と共存しようとするにまで至ったのである。

ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850～1904)[13]もこよなく日本庭園を愛した人物である。特に松江の家にあった庭を好み、そこでの生活から「日本の庭」("In the Japanese garden")というエッセイ[14]を書き、日本庭園について述べている。そのなかには亀などの小動物が登場する。ハーンは、俗間の神話によれば、亀は金比羅大明神のお使い姫らしいとしている。このエッセイには、他にも様々な動植物、桜、梅、松、南天、蝶、蝉、蜻蛉、不如帰、鶯などが登場する。しかし、これらはいつも民俗学的な視点から眺められ、日本の神話を探るための対象物であったような気がする。ハーンとタブラーダの両者とも動植物を愛していたことに変わりはないが、ハーンが彼らと少し距離をおいているように感じるのに対し、タブラーダは、彼らにもっと身近に接しているように思える。それは、やはり、タブラーダの生来の生き物好きに起因しているのではないだろうか。彼は、青年時代、陸軍士官学校に入っていたことがあるのだが、その当時のことを彼の親友

---

[12] Tablada, José Juan, *En el país del sol*, D.Appleton y Compañía, Nueva York, 1919, p.29.

[13] 1890 年に来日。

[14] 『日本瞥見記』(Glimpses of Unfamiliar Japan, 1894)所収。

カルロス・ノリエガ・ホープ(Carlos Noriega Hope)が次のように語っている。

> 彼は、驚くほど自然を愛し、ファーブルのように、自分の愛する虫たちのためだけに生きていた。いつも、彼のケピ(ひさしのついた筒形軍帽)は、コガネ虫や、蝶、蝿、毛虫などで飾られており、彼が学校の廊下を通るたびに異常な虫の唸りが聞こえていた[15]。

タブラーダは昆虫好きの少年だったのである。彼の小動物好きは生涯変わることはがなかったようである。彼がどれほど動植物を愛していたかは夫人のニナ・カブレラ(Nina Cabrera)の著した『素顔のタブラーダ』(*José Juan Tablada en la intimidad*, 1954)にもうかがえる。

> 彼は情の深い人でした。動物の痛みや一本の薔薇を切ること、一本の木の火災にも人間の痛みと同じものを感じていました[16]。

次に、1913年の『日記』の描写を読んでみよう。

> 1913年2月11日 10:30A.M.
>
> メキシコシティーでは砲撃が始まった。一分刻みに轟きが鳴り響く。間違いなく大口径のビースもの、それから、乾いた弱い響きのものが。多分、機関銃か小銃の発砲だろう。北向きの私の書斎の戸口に立って、メキシコシティーからの風が届く所から、私は、深い苦悩にぎゅっと胸を締め付けられて、ぞっとするような音を聞いている。それが響くたびに無実の多くの命がなくなり、多くの犠牲者の血が流れているのだ。この野蛮なこととは対照的に、私の目の前の庭は、繊細ではかないもので満ちている。木々の新芽、桃の一番花、ハバナの小さくて白い雌鶏、ふるえている花のまわりで朝の散歩をしている蜂鳥、それからもっとむこうの

---

[15] Cabrera, Nina, *José Juan Tablada en la intimidad*, Imprenta Universitaria, México, 1954, p.42～43.

[16] Cabrera, Nina, 前掲書、p.19.

> 池のなかには太陽が黄金色に染めている緑亀。仏教的な永遠の平穏のなかで静かにゆったりと泳ぐ金魚たち。これが人間の悲惨な野蛮さのなかにいる動物たちの無邪気さであり、植物の神聖さである。

このとき、1913 年 2 月 11 日は、メキシコ革命の「悲劇の十日間」の最中だった。この「悲劇の十日間」とは、1913 年 2 月 9 日から 2 月 18 日のメキシコ革命史上最も暗黒であったと言われている 10 日間のことである。フランシスコ・マデロ(Francisco Madero, 1873-1913)は、1910 年にメキシコ革命を起こし、ディアス[17]政権を倒す。彼が大統領に就任してから 15 ケ月後の 1913 年 2 月 9 日に、連邦軍が反乱を起こし、2 月 18 日にマデロに代わり、彼を裏切ったヴィクトリアノ・ウエルタ(Victoriano Huerta, 1845～1916)が大統領となったこの 10 日間のことである。タブラーダは、この事件について、『日記』に何頁にもわたって詳細に記している。なかには、彼の友人が流れ弾を受けて頭皮と耳を切ったなどという生々しい描写もある。大砲が撃たれ、銃が発砲され、人々が血を流している状況下で、タブラーダは、自分の家の庭にある自然や動植物に目を向け、心を落ち着かせようとしていたのだろう。3 日後の 2 月 14 日には、次のように記されている。

> 大砲の轟きに疲れ果てて、私は『東海道五十三次』の画集を開いて、絵師広重と共に旅に出る。江戸の日本橋から出発して、輝くような風景のなかを私の悲嘆にくれた心はさまよい、その夢のようなひなびた田園の茶屋に休む。ああ、私がこよなく愛する絵師に伴われて、サパータ[18]軍に踏みにじられたこの土地から遠く離れて行けるのだ。

タブラーダにとっては、広重の『東海道五十三次』の世界に入り込むことは一時の心の安らぎだったのだろう。それは、一種呪うべき現実からの刹那的な逃避だったのかもしれない。だが、たとえ一時でも、

---

[17]ポルフィリオ・ディアス (Porfirio Díaz, 1830-1915)

[18]エミリアーノ・サパータ (Emiliano Zapata, 1879-1919)

タブラーダの心は日本の風景によって慰められたのであろう。続いて、2月16日の描写も読んでみよう。

> 不吉な大砲の音を聞くことなく目覚める。窓から庭師のワンダ[19]が棒で柳の木の一本に連なっている芋虫の巣を壊しているのが見える。村の平和のなかで朝が明ける。市電の音さえも乱れず、ただ、木立ちに囲まれている近くのサン・マテオ教会のミサを知らせる鐘の音だけが聞こえる静けさ。もう11時15分だ。私は、庭で耳を澄ませている。絶えず不吉な轟きを聞き分けようとしながら。私にはかすかな野生の音しか聞こえない。蜂鳥のすばやい羽ばたきの音、遠くに聞こえるハバナの鶏のコッコッコッという鳴き声、池の石の上で日なたぼっこをしている亀の音、彼は私が近づくと水のなかに入ってしまう。太陽はもう高く上っている。あの不可解な市街地で大砲が再び轟くことなく。

タブラーダの心に安らぎを与えるのはいつも彼の日本庭園の自然だったのである。ラフカディオ・ハーンも、先に紹介したエッセイ「日本の庭」のなかで、学校の勤めから戻り、ゆったりとした和服に着替えて自分の家の土塀のなかの庭を眺めることが、学校での授業の疲れを癒した[20]と書いている。タブラーダにとっても同様だったのだろう。動乱の緊迫した世にあったタブラーダの心を癒すものは、自然界の動植物だったのである。この動植物は、後に、彼のハイカイのなかに結晶する。彼の家の庭にいた動植物のうち、柳、蜂鳥、鷺、亀、蛙などがハイカイに詠われるのである。詳細については稿を改める。

タブラーダは、この年1913年に、『北師団物語』(*La Historia de la*

---

[19] 田辺厚子によると、この「ワンダ」(Wanda)というのは、1910年ごろ契約移民としてメキシコに渡った高知県出身の和田直道（1887～97?）のことらしい。(「メキシコのモデルニズモと日本」, *Japón vecino país distante y cercano a través de su historia*, El Colegio De La Frontera Norte, México, 1996. p.63)

[20] 中野好夫編『小泉八雲集』(『明治文学全集』48) 筑摩書房　1977　p.109.

campañía de la División del Norte)を出して、メキシコ革命史上「裏切り者」の代名詞を冠せられるウエルタを称えてた。そのため、カランサ[21]革命軍が政権を奪回する 1914 年に異国への亡命を余儀なくされる。祖国を離れる彼は、自らの庭の動植物と別れを告げる。そのときの描写は、回想録である『長い影』(*Las sombras largas*, 1993)に出てくるが、読むものの涙を誘う。

> いつも夕方になると、私の庭の真ん中に建っているあずまやのベランダにすわっている私を、夕焼けが包みました。私はじっと慈しむように庭を眺め、私自身が植えた木や、やっと根付いた異国の花や、私が近づくと寄ってくる魚や亀のたくさんいる湖や、庭の隅々までずっと散歩する私を歓迎するかのように奇妙な鳴き声をたてながら私についてくるハシグロリュウキンガモに別れを告げていたのです。その嘴と足はサンゴ色で毛は栗色でした。
>
> 異国に旅立つ一週間前、温室の蘭が一斉に花を開きました。... あの気まぐれでまちまちに咲く蘭の花が不思議なことに一斉に花開いたことは、別の機会であればうれしい悲鳴となったでしょう。しかし、この状況では、むしろ怖ろしいほど微妙で不吉な前兆のように思えました。そのガラスの暖かい聖なる場所で、いつも私には一徹でこのうえないプライドをもった芸術であるかのようにみえていた珍しい植物が、惜しみない愛情でそれらを育て、永遠にそれらを見捨てようとしているものに、揃って別れを告げているようでした。それらが感謝の気持ちを見事に表すことが急を要することを知っていて、開花を早めたようでした。... [22]

タブラーダが慈しみ育てた動植物を見捨てることは、彼にとってどれほどつらいことだったかは想像にかたくない。一本の薔薇の木が切られることにもその痛みを感じていたタブラーダだからである。

ニナ・カブレラは、自分の夫がメキシコのクエルナバカ(Cuernavaca)

---

[21] ヴェヌスチアーノ・カランサ(Venustiano Carranza, 1859～1920)

[22] Tablada, José Juan, *Las sombras largas*, Dirección General de Publicaciones, 1993, p.460.

で病に倒れたときの思い出を『素顔のタブラーダ』のなかで次のように語っている。それは、タブラーダが亡くなる 1945 年 8 月 2 日の一年ほど前のことだった。そこにもやはり、自然が登場する。

> ... 彼は、満開の薔薇園や芽の出始めてきた芝、枝を垂らしている垂柳のもとで、池の近くに休んでいるハシグロリュウキンガモを見ていました。そのとき横浜[23]の庭の美しさを思い出させるようだと彼が私に言うほどの光景でした[24]。

タブラーダが、病に倒れて気弱になっているときに、眼前の風景から思い浮かべたのは、40 数年前に訪れた日本の風景だったのである。彼の心のなかで、日本の風景は生きつづけていたのである。それほど、タブラーダにとって日本の思い出が印象深く、日本が懐かしかったということでもある。しかし、病床で懐かしく思い出したのがタブラーダの愛する親しい人のことではなく自然の風景であったことは、注目に値する。横浜の庭の風景とは、彼が幼いころに初めて見て以来とり憑かれていた広重の版画のなかの風景であった。つまり、タブラーダにとっての原風景とも言えるものが浮かんだのである。

おわりに

本稿では、タブラーダの『日記』に出てくる自然描写から、彼の自然との関わり方を考察した。タブラーダは、普段から、また何かあるごとにコヨアカンにあった自分の日本庭園を眺め、そのなかの動植物と対話をしていた。彼にとっての自然および自然との対話は、心の安らぎであり心の拠り所であったと言っても過言ではないだろう。

日記の描写から、タブラーダが、自然の微妙な変化を感知できる感受性を持っていたこともわれわれはうかがい知ることができる。四季折々の自然の変化を見なれている日本人でさえも気づかないかもしれない細やかな自然現象に目を向け、日本の俳人に匹敵する資質を持ち

---

[23] タブラーダは、来日した際、横浜に居を構えた。

[24] Cabrera, Nina, 前掲書、p 108.

合わせていたのである。であるからこそ、自然を詠む日本の俳句に興味を持ちそれを彼自身がスペイン語で創作するにまで至ったのである。自然に対する深い愛情や自然を受け入れる研ぎ澄まされた感受性がないと、俳句のような自然を詠む詩は理解し得ないからである。

タブラーダが、晩年床に臥せっていたときに眼前の風景から思い出したのは日本の風景であった。それは、彼にとってあこがれの風景であり原風景につながるものであったからに違いない。

使用テキスト

Tablada, José Juan, *Obras Completas Ⅳ Diario(1900-1944)*, UNAM, México, 1993.

参考引用文献

Cabrera, Nina de Tablada, *Tablada en la intimidad*, Impreso Universitario, México, 1954.

Tablada, José Juan, "Álbum del extremo Oriente", en *Revista Moderna*, México, 1ª quin. de mayo de 1900, Ⅲ(9).

— *En el país del sol*, D.Appleton y Compañía, Nueva York, 1919.

— *Las sombras largas*, Dirección General de Publicaciones, 1993.

— *Obras Completas I Poesía*, UNAM, México, 1971.

小泉八雲　中野好夫編『小泉八雲集』(『明治文学全集』48) 筑摩書房 1977.

ゴンクール兄弟　斎藤一郎編訳『ゴンクールの日記』岩波書店 1995.

田辺厚子「メキシコのモデルニズモと日本」, *Japón vecino país distante y cercano a través de su historia*, El Colegio De La Frontera Norte, México, 1996.

[付記]本稿は、1997 年 10 月に第 43 回イスパニヤ学会において口頭発表したものに修正加筆したものである。

ボデゴンから《ラス・メニーナス》へ

～絵画をめぐるまなざし～

岡田 裕成

画家ディエゴ・ベラスケスは今も、プラド美術館の至宝《ラス・メニーナス》(図1)の中に立ち、絵筆を手に大きなカンヴァスに向かっている。そこは、王宮内の一室「皇太子の間」。仕事中の画家の脇には、王女や女官らが集う。それはいかにもさりげなく切り取られた宮廷生活の日常である。けれども、かつてなされた実におびただしい「解釈」が示すように、そこには、見かけの平明さを裏切る、さまざまの趣向が凝らされている。観者を意識したしぐさや親密な視線の交錯、そして国王フェリペ4世夫妻の姿を映し出す、例の鏡のトリックである。

たほう、ベラスケスの腰には、王宮配室長という彼の地位と権限を誇示するかのように、宮殿各室の鍵の束が描かれる。さらにその胸には、1659年、長年の念願がかなって手に入れた、栄誉ある「サンティアゴの騎士」の地位を示す赤い十字の紋章が、完成していたこの作品にわざわざ加筆された。大作《ラス・メニーナス》は、画家であると同時に廷臣であったベラスケスの人生の、栄達の頂点に生み出されたものでもあった。

ベラスケスは1599年、セビーリャに生まれた。彼が後に申し立てるところによれば、両親はいずれも貴族の血を引く者だったという。洗礼は6月6日、繁栄するこのアンダルシアの商都のほぼ中央に位置するサン・ペドロ教会でおこなわれた。昨1999年は、その生誕から400年に当たる記念の年であった。

画家としてのベラスケスの歩みは、その生地セビーリャで始まった。彼は当地の有力画家フランシスコ・パチェーコを師とし、やがてその娘を娶る。こうして岳父ともなったこのパチェーコこそ、若きベラスケスの成功への道のりを方向づけた人物であった。

ベラスケスは1622年、マドリードに上ったが、その際、「王の画家」として宮廷に召し抱えられるよう、セビーリャ系人脈を動員して手筈を整えたのは、まさにこの岳父であった。またその野心が翌年首尾良く成就してからは、みずからの大著『絵画芸術』(1649年刊)のなかで盛んに娘婿に言及して、その画才と彼に対する国王フェリペ4世の寵愛ぶりを喧伝した。ベラスケスの大作《ラス・メニーナス》も、実は、後で詳しくみるとおり、この国王との親密な関係、そし

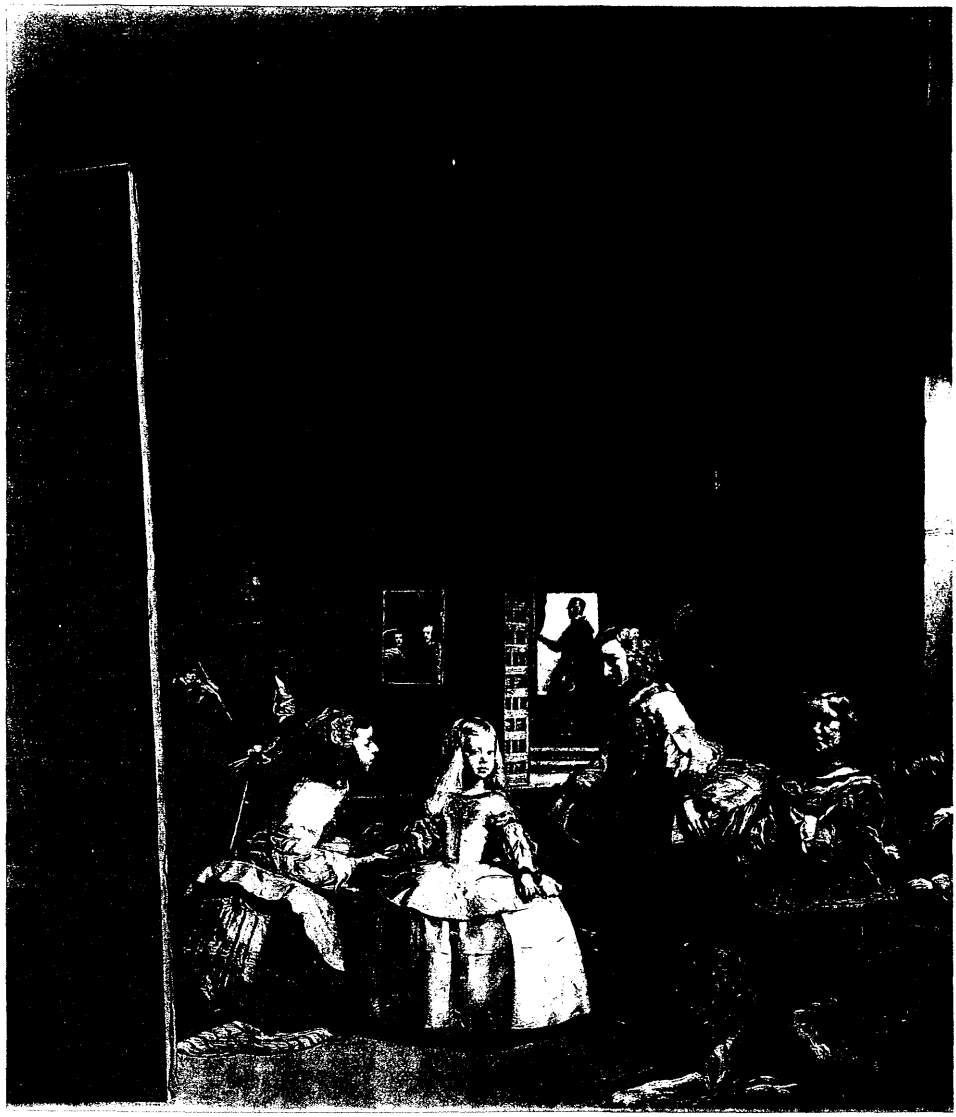


図1　ベラスケス　《ラス・メニーナス》　1656年　プラド美術館

て、王の芸術愛好の趣味を強く意識するなかで制作されたものであった。

宮廷での栄達は、パチェーコ自身の見果てぬ夢でもあった。パチェーコは1610年、ちょうどベラスケスが彼の工房に入門した年、マドリードへの旅行に出かけていたが、その目的はやはり「王の画家」の称号を得ることだったと考えられている。だがその望みはかなえられなかった。ベラスケスの栄達はいうなれば、17世紀スペインの厳しい階級社会の階段を、上ろうとして果たせなかったこの岳父パチェーコから、二代にもわたった挑戦の最終的な帰結点であった。《ラス・メニーナス》は、その意味で、ベラスケスとパチェーコの「合作」といってよいかもしれない。

この小論では以下、いささかの回り道から、長い研究史をもつ《ラス・メニーナス》論に、いくつかの新たな議論を提起したい。回り道とは、セビーリャでのベラスケスの形成期を条件づけたものの再検討である。

《ラス・メニーナス》はもとより、宮廷画家としてベラスケスの生涯の最も終わりの時期に描かれた作品である。だがその構想には、今もふれたように、セビーリャ以来の師パチェーコとの関わりが重要な意味をもっていた。またセビーリャ時代のベラスケスは、「ボデゴン」と呼ばれる新たなジャンルに乗り出していたが、それは彼の芸術的独創の最初の現れであったと同時に、とりわけ作品の受容・享受の場という局面で、《ラス・メニーナス》につながるいくつかの重要な契機が認められるように思う。

それゆえここではまず、パチェーコのもとでのベラスケスの形成期と、それに続く彼の画家としての活動を、従来の理解に対する批評も交えて概観したい。その考察をふまえ、議論の後半において、改めて《ラス・メニーナス》の問題に立ち戻り、平明でありながら確たる理解を拒み続けるこの絵の「からくり」とでもいうべきものを論じることにしよう。

セビーリャのベラスケス　～「芸術の金の檻」？

宮廷画家として大成するベラスケスの原点は、何にあったのか。それを考えるのに、彼を形成したセビーリャの文化的な環境についての理解は重要な意味をもつ。

この点について、われわれの議論の出発点となるのは、ジョナサン・ブラウンの重要な著作 *Images and Ideas in the Seventeenth-Century Spanish Painting*

(Princeton, 1978) である。19世紀以来のスペイン美術研究史を概観する野心的な序文をもつ本書は、従来、文書史料の発掘と収集、それに基づく作品の帰属判定や編年といった、狭い意味での「実証」の領域に概して偏りがちであった研究の動向に対し、明確な方法意識に基づく新しい研究の枠組みを提起しようとする意欲的なものであった。

その議論の核としてブラウンが注目したのは、17世紀のセビーリャで、画家パチェーコが主宰した「アカデミー」である。大著『絵画芸術』を著した学識の人パチェーコは、セビーリャの有力な高位聖職者を血縁にもつ詩人でもあり、幅広い交友関係をもっていた。ブラウンは、『絵画芸術』の詳しい分析から、パチェーコの周りにあった貴族文人のサークルの存在を具体的に指摘し、かつそれをセビーリャにおける芸術文化の中核と位置づけた。(1) こうして彼は、この地の美術を、知識人と芸術家との共同作業の成果として議論する枠組みを提起したのである。

ブラウンはまた、パチェーコのアカデミーに言及する際、アントニオ・パロミーノの『スペイン桂冠画家のパルナッソス』に収められるベラスケス伝のなかの、次の有名な一節を引用する。パロミーノは、ベラスケスの没後間もなく宮廷に出仕した画家で、18世紀の重要な芸術論者であった。

「パチェーコの家は芸術の金の檻、セビーリャの最も才能ある者らのアカデミー、学校であった。そこでディエゴ・ベラスケスは、絵画の基本要素であり、芸術の大切な入口である素描の修練を、日々楽しんで暮らしたのである」。(2)

こうした文脈からなされたベラスケスの形成期についての一般的な理解は、洗練された人文主義的美術教育の場、そしてルネサンス的知識人サークルとの接触という、2点を軸になされることになった。(3) そうした議論はまた、数多くの宗教画家によって彩られるスペイン・バロック美術のなかにあって、世俗・宮廷絵画の希有の巨匠となったベラスケスの際だった位置を、いたって明瞭に説明してくれるものでもあった。

しかしながら、いまなお漠然と信じられるこの前提は、どこまで真実を映し出しているだろうか。たとえば、はるか以前にフリアン・ガリェゴが注意を喚起しているように、ベラスケスのパチェーコ工房への入門の際に作成された現存の契約文書の中身は、当時のごくありふれた徒弟修行の条件をなぞったものに過ぎない。(4) ギルド的な論理に基づくその条件は、「芸術の金の檻」というには、あまりに職人的な意識に沿って書かれている。ならば、ベラスケスが形成期を過ごしたパチェーコ工房が、実際のところどのような場所だったのか、いま少し考え直してみてもよいかもしれない。

パチェーコの著作のひとつ、『絵画芸術の教師たちへ』と題される一点の冊子は、「芸術の金の檻」の主人の、もうひとつの側面を知るのによい手がかりとなる。[5] これが出版されたのは1622年のことで、パチェーコはこの頃、すでに画家ギルドの長も務めるなど、名実ともにセビーリャを代表する画家となっていた。

中身についていえば、この小冊子にとりたてて目新しいものがあるわけではない。その冒頭、パチェーコはまず、プリニウスやフィロストラトスを引用しつつ、まず絵画芸術の起源がいかに古いかを語る。さらに次節では、絵画の「高貴さ」、そして絵画・彫刻の比較、いわゆる「パラゴーネparagone」が議論のテーマとなる。その概要は、大著『絵画芸術』にも引き継がれることになる人文主義的な絵画芸術称揚のごくありふれた論である。

しかし、われわれを驚かせるのは、そのあとに続く冊子の後半部である。パチェーコはそこで、古代の著作に基づく芸術論の調子を一変し、ギルドの規定などを引用しつつ、彫刻家が職業運営上、しばしば画家の領分を侵犯し、余分の利益を得ていることへの非難を展開する。その議論は、当時のセビーリャの代表的彫刻家マルティネス・モンタニェスを引き合いに出すなど極めて具体的で、しかもパチェーコは、セビーリャの「サンタ・クララ修道院の祭壇の仕事の6000ドゥカード」の報酬の内、彫刻家、画家それぞれの取り分がいくらであったというような、金額の問題にまで詳細に言及する。[6]

このいささか下世話とさえいえるパチェーコの主張の背後には、セビーリャにおける美術制作のありようがある。教会による注文制作を中心としたセビーリャの美術市場では、最も大きな仕事は祭壇衝立の装飾であった。祭壇衝立はそれ自体、しばしばかなり大きな木造の構造物であるが、その装飾もまた、木彫像が主体をしめることが多かった。こうした状況の下、パチェーコ自身を含め多くの画家たちは、祭壇衝立本体、あるいはそれを飾る彫刻像の金地装飾や彩色をしばしば手がけ、また、そこから得られる収入は重要な生活の資となった。当時のセビーリャの画家たちの職業的な内実はこのように、いたって中世的、職人的なものであった。

しかも、こうした状況の下では、画家の地位は相対的に、従属的なものになりがちであった。作品の契約においても、画家は、彫刻家が一括して受注した仕事を部分的に請け負い、彫刻家から支払いを受けるという事態もままみられた。いささか唐突に始まるパチェーコの彫刻家批判は、実のところこのような現実を意識したものと思われるのである。[7]

とはいえ、金銭問題に象徴されるその赤裸な現実主義が、プリニウスを引用して絵画芸術の高貴さを語った高尚な人文主義的芸術論と、そのまま並列されると

ころに、パチェーコの議論の奇妙な違和感の原因がある。ただ逆にいえば、その点こそ、セビーリャという都市の現実をみごとにあぶりだすものともいえよう。保守的な教会からの注文を中心とした美術作品制作の現場は、たまたまイタリアから流入しつつあった人文主義的芸術理念などと、まったく無関係に存在し機能していた、というわけである。

ならば、パチェーコの弟子たるベラスケスの、芸術の原点を理解するうえで重要なのは、たんに彼らが、たとえばアカデミーといったもので象徴される高尚な芸術理念に、いかに通じていたかということではないだろう。むしろそうした外来のイデオロギーに親しむがゆえに乖離してゆくセビーリャの現実と、彼がいかに向かい合ったかを見極めることこそ、パチェーコ工房から現れたベラスケスという画家の、背景を理解する鍵となるように思われる。

この点を踏まえ、いま少しセビーリャ時代にこだわり、ベラスケスの初期の画業を、振り返っておくことにしよう。

ボデゴンと絵画をめぐるまなざしの「楽しみ」

ベラスケスは1617年、ギルドの試験を受けて「聖像画家 pintor de imaginería」のマエストロとなった。それは彼に、「工房と店舗」を構え、自由に作品の販売をおこなう権利を認めるものであった。(8) 師の娘フアナとの結婚はその翌年に執り行われる。こうして彼もまた、ギルドの組織とマエストロたちの血縁の網の目に加わり、セビーリャの職業画家として活動を開始する。だが、この若い画家が始めた活動は、当時のセビーリャを代表する画家たちの職業的な実践と、明確に一線を画するものであった。

セビーリャ時代のベラスケスの作品は、およそ20点余りが現存する。彼は1617年にマエストロになってから、1622年、最初のマドリード旅行に出かけるまで、もっぱらこの地に暮らしたので、その作品数はかなり限られたものといわねばならない。近年の財産目録の調査により、失われた作品についての情報はしだいに増えつつあるが、この種の史料の作品帰属についての判断は必ずしも信用できないし、また、たといそうした消失作品の存在を想定しても、ベラスケスの作品数の少なさは注目に値する。極端な事例ではあるが、この時代、新大陸向けを中心に市場売りの作品の制作に携わっていた画家（パチェーコもこれと無縁ではなかった）ならば、年間500点をこえる作品を描くことも珍しくなかったのである。(9)

また、ベラスケスは「絵の画家」であった。これは一見当然のことと思われるが、先に指摘したとおり、当時のセビーリャの画家は、像の金地装飾や彩色を引き受けて安定した収入を確保するのが通例であった。これに対しベラスケスは、現存史料から判断する限り、こうした仕事に手を染めた形跡のない、かなり例外的な存在である。

そしてこのことはまた、教会という顧客とベラスケスとの、関係の薄さを際だたせる。ベラスケスは、像の金地装飾や彩色のみならず、そもそも教会からの注文による制作を、ほとんどおこなっていないのである。セビーリャ時代のベラスケスの作品の内、純粋な宗教画は、一対をなす《聖母無原罪の御宿り》と《パトモスの福音書家ヨハネ》（いずれもロンドン・ナショナル・ギャラリー）、あるいは《東方三博士の礼拝》（プラド美術館）など数点に限られている。これに対し、セビーリャ時代のベラスケスが盛んに手がけたのは、いわゆる「ボデゴン（厨房画）」であった。たとえばその代表作、《卵を料理する老婆》（図2）などに典型的にうかがえるとおり、それは、概して貧しい市井の人びとの日常生活を、種々の静物的モチーフの丹念な描写を通して主題化した絵画である。



図2　ベラスケス　《卵を料理する老婆》　1618年　スコットランド・ナショナル・ギャラリー

こうした絵は、輸入された外国絵画や版画を通して、17世紀のごく初頭より、セビーリャでもしだいに知られるようにはなっていたが、土着の画家たちにとっては、いまだほぼ未開拓の領域であった。教会の顧客を中心とする絵画市場に大きな影響力をもった有力画家パチェーコの娘婿ベラスケスは、もとより大規模な祭壇画の注文を得るのに不自由はなかったはずであり、一定の収入を得るという点からだけみれば、何もまだなじみの薄いこの新領域に、活動の主軸をおく必要はなかった。

しかも、概して小品で明確な主題性に欠けるボデゴンのようなジャンルは、当時の人文主義的な芸術論において、大構図の宗教画をはじめとするいわゆる「物語画 historia」に対し、価値の低いものとみなされていた。つまり、ベラスケスの選択は、セビーリャの職業画家の常識とも、人文主義的アカデミーの規範とも異なる方向を示すものだったのである。

では、彼にこのボデゴンの分野をあえて選ばせたのは、どういう動機だったのだろうか。

パチェーコは、こうしたベラスケスを弁護し、『絵画芸術』のなかで次のように語っている。「ボデゴンは、はたして評価に値しないものだろうか。もとよりそんなことはない。わが娘婿のように、この分野において秀で、並ぶもののないほどに描けば最高の評価に値する。この道と・・・肖像画において、彼は自然の真の模倣を目にみえるものとしたのである」。(10)

ここでパチェーコは、主題の価値に基づくヒエラルキーに対し、「自然の模倣」という描写的価値を上位において、ボデゴンへの評価の正当化をはかる。その際彼は、議論の根拠としてプリニウスが伝える古代画家、「つまらないもの描き riparógrafo」のペイライコスの例を挙げ、その卑近な風俗主題の絵が、いかに大きな「楽しみ deleite を（見る者に）もたらした」かを述べる。(11) いわゆる物語画が、そこに込められた偉大な教訓のゆえに自明の意義をもったとすれば、パチェーコは、娘婿の取り組むボデゴン独自の価値を、享受者の側がそれぞれに探りだしてゆく「楽しみ」に求めたのである。それは奇しくも、彼と同時代を生きたイタリア人で、『絵画論考』の著者ジュリオ・マンチーニが、「ディレッタント uomo di diletto」として、絵画を愛好する趣味人の「diletto = deleite」を語り始めたのに呼応している。医師を本職としたこのイタリアの著述家は、次のように語る。

「絵というものは、どうしても必要であるという類のものではなく、楽しみのためのものであるから、また、絵を売買する当事者の事情や、契約の対象となる当の絵が何を写し、いつどこで描かれたのかという事情によって物差しが揺れる

とするなら、その価値を計る必須の尺度もない以上、これらの事情を飲み込むことができるのは、特別の専門家なのではないし、ましてや画家では毛頭ない。それは、演奏やバレーや声楽のような他の楽しみごとの場合と同様である。そうではなくて、絵を買う人の趣味や財力や必要性を考慮できる分別のある人こそ、事情に通じているのである・・・」。[12]

ここに際だつのは、絵画がいわば嗜好品のごときもので、けっして必要不可欠のものではないという認識、そして絵の「判断」には、絵を見たり買ったりする側の「趣味」が重きをなすという、いたって斬新な思考である。[13] パチェーコがベラスケスのボデゴンに認めた価値も、マンチーニほど決然とした明晰さはないにせよ、実はこうした17世紀的認識を示したものに他ならない。

では、ベラスケスのボデゴンは、観者にどのような「楽しみ」をあたえたのだろう。パチェーコも絶賛するベラスケスの描写力は、もとよりいうまでもない。またそれと同時に、ベラスケスのボデゴンにしばしばうかがわれるある種の文学的含意もまた、観者の想像力を刺激したようだ。たとえば先の卵を料理する老婆と少年の取り合わせが、セビーリャで出版された有名なピカレスク小説『グスマン・デ・アルファラーチェ』の一場面を連想させることは、よく知られている。この絵に関していえばさらに、左の少年の謎めいたまなざし、あるいは彼が手にするガラス壷とメロンといういささか取ってつけたようなモチーフの組み合わせも、観者の謎解きを待っているかのようだ。



図3　ベラスケス　《マルタとマリアの家のキリスト》　1618年　ロンドン・ナショナル・ギャラリー

ベラスケスはまた、《マルタとマリアの家のキリスト》(図3)のように、宗教的なモチーフを巧みに引用したボデゴンを数多く描いている。北方系の版画などに想を得たとされるそうしたダブル・イメージの手法も、その聖俗の対比の意味をみてとる素養をもつ、洗練された観者には快い趣向だっただろう。

事実、ベラスケスのボデゴンの所有者となったのは、セビーリャの富裕な貴族や教養ある絵画の愛好家たちであった。たとえば、パチェーコの知己で、豊富な海外体験も生かして豊かな絵画コレクションをつくりあげたアルカラ公爵は、《にんにくを擦り潰す女のいる厨房の小さな絵》と《小さなガラス壺を持つ半身のふたりの男の絵》という二点のベラスケス作品(いずれも現存せず)を所有したことが知られる。[14] また、先の《卵を料理する老婆》の絵は、もとの所有者は判然としないものの、17世紀末には、ムリーリョの有力パトロンで、当時セビーリャの最も活動的な絵画収集家だった、あるフランドル系商人オマスールの手元にあったことがほぼ確認されている。[15] ベラスケスは、その魅力的なボデゴンにより、セビーリャの最も富裕なパトロンを得ようとしたのであろう。先ほど指摘した、現存する作品点数の少なさも、限られた顧客を相手にした彼の活動ぶりをうかがわせる。

こうしてみると、ベラスケスにとってのボデゴンとは、もとより、彼の芸術的資質の表現にふさわしいジャンルであったにせよ、それのみならず、有力な個人顧客の獲得の手段ともなったことが注目に値する。それは、セビーリャ画家の伝統的な職業世界から決別しようとするベラスケスにとって、またとない可能性を秘めたジャンルであった。それゆえにであろう、青年画家ベラスケスは、宮廷入りを目指してマドリードに上った際、ボデゴンの傑作《セビーリャの水売り》(ロンドン、ウェリントン美術館)を携えていった。マドリードにおける彼の最初の後援者の手に渡ったその絵は、宮廷画家への「出世」の踏み台ともなったのである。

このようにセビーリャでのベラスケスは、当時の一般的な職業画家の常識に背を向けただけでなく、人文主義的な絵画観とも一線を画し、ボデゴンという新ジャンルに将来をかけた。そして、見かけにおいては最も卑俗なそのジャンルで、彼は、宮廷にまで連なる最も高貴な顧客たちを手にしたのである。こうした逆説を支えた柔軟な現実主義こそ、おそらくベラスケスがパチェーコの工房で身につけたものであった。ベラスケスはそうして、大がかりな構想画によってではなく、よりくつろいだ風俗的主題によって、また、教会のように多くの観者を想定した場所ではなく、より親密で私的な空間において、見る人を楽しませ、そのまなざしに奉仕する絵画を描くことを学んだのである。そしてベラスケスはこの後、宮廷において、国王のためだけに描き続けることになる。

冒頭にみた《ラス・メニーナス》は、その宮廷での画家ベラスケスの制作の最後を飾る作品のひとつであった。それはあたかも、宮廷の日常に取材したある種の「風俗画」のようでもあり、そこには、先ほどの《マルタとマリアの家のキリスト》の壁の窓（あるいはこれも鏡か？）で試みた、絵画空間の二重化といった趣向さえ繰り返されている。

ベラスケスのセビーリャ時代と、そのボデゴン作品についての理解をふまえ、ふたたび、この晩年の大作についての考察に立ち戻ることにしたい。

《ラス・メニーナス》再考

「絵画の神学」とまで讃えられた傑作《ラス・メニーナス》は、長い称賛の時代を経て、主に戦後、今日的な美術史研究の枠組みのなかで、解釈の試みがなされるようになった。

その転機をなしたのは1949年のシャルル・ド・トルナイの論文である。かつて、「画家が目にした偶然の情景」[16]とも解されたこの絵を、彼はアトリエでの画家の自画像の系譜に属するものと位置づけ、そこに、思索し瞑想する芸術家の自意識の表明をみたのである。[17]これに触発された、ジョージ・クブラーらの研究者は以後、そうした画家の芸術的理念の表明という視点を軸に、主として図像解釈的な立場からの議論を展開した。[18]先に触れたジョナサン・ブラウンの《ラス・メニーナス》論は、こうした研究史のなかに位置づけられるものであり、かつ、この絵の構想の源に具体的なテクストの存在を指摘することによって、従来の議論に、決定的とも思われる結論をあたえることになった。

ブラウンが注目したのは、パチェーコの『絵画芸術』にみられる次のような記述である。

「このように偉大な国王によって、彼（ベラスケス）が受けている寵愛はほとんど信じがたいものである。彼は王宮の一室にアトリエをあたえられ、国王はそこの鍵を持っている。そこには国王のための椅子があり、国王は暇なときにはそこにすわり、彼の仕事を見ていることができる。そして国王はほとんど毎日そうしたのである」。[19]

ブラウンはこの記述を踏まえ、画中の鏡のトリックを、国王夫妻の訪問を間接的に ―「慎み decoro」をもって― 表現するものと断じた。こうして図像化された国王の来臨の場面は、宮廷において画家ベラスケスの得ていた特別の栄誉と、その栄誉に値する絵画芸術の高貴さを示すものであったという。王侯のアト

リエ訪問というモチーフは、アレクサンダー大王と画家アペレスの故事にちなんだ、ルネサンス芸術論のいわば定型的言説のひとつであり、それは自由学芸としての絵画芸術を擁護する際の重要な根拠でもあった。

またベラスケスは、この1650年代、先にもふれた例の「サンティアゴの騎士」叙任のための工作を着々と進めていた。サンティアゴ騎士団は、カラトラバ、アルカンタラ両騎士団と並んで、スペインで最高の格式を誇るもので、その騎士の称号は、すなわち貴族としての公的な認知を意味した。けれども、その彼の野心の最大の障害となったのは、スペインの宮廷社会に根強く存在した、「手仕事」としての絵画制作に対する伝統的な蔑視であった。《ラス・メニーナス》は、そうした状況のもと、個人的な事情からも必要とされた、絵画芸術擁護のイデオロギーの表明であったとブラウンは指摘する。(20)

こうして《ラス・メニーナス》は、人文主義的な芸術理念を図像化した構想画、あるいは広い意味での「物語画 historia」として位置づけられることになる。それはもとより、パチェーコ・アカデミーで育まれた、ベラスケスの人文主義的価値観を前提とするものであった。17世紀スペイン美術に関する図像解釈的な研究の、最も華々しい成果というべきこの《ラス・メニーナス》論は、じつは、ブラウンの、パチェーコ・アカデミー論を軸とする先の著作において、重要な事例研究として一章をなしているのだが、それはいかにも当然のことといってよいだろう。

けれども、すでにみたように、ベラスケスやその師パチェーコの人文主義理解は、必ずしもストレートなものではなかった。大上段に構えたような理念の表明を、この絵に認めるブラウンらの議論には、その点で多少の違和感を感じざるをえない。

じっさい、図像学的な立場からの《ラス・メニーナス》解釈は、絵の構想の源泉、制作の背景をなした事情については明快に説明する一方、その受容の場という点に注目してみると、大きな矛盾をきたすことになる。王宮の財産目録（1666年）の記述によれば、この絵が蔵されたのは「王の夏の政務室」と呼ばれた部屋であり、それはじつは国王の極めて私的な空間であった。(21)《ラス・メニーナス》は本来、不特定の観衆を想定した、理念表明の絵ではありえなかったのである。それは奇しくも、ベラスケスがセビーリャで繰り返し描いたボデゴンの受容のあり方に、通じるものでもある。ならば、この《ラス・メニーナス》の理解には、まさにそうした受容の場のありようという点からの問い直しが求められるだろう。

筆者はかつて、「《ラス・メニーナス》—作品と観者」と題する小論を著した。

そこで強調したのは、画中の鏡が絵のなかのモチーフを何ひとつ映し出さず、ただただ画面の外の国王夫妻の姿のみを映しだしているということ、そしてそれは、この作品の前に現に立つべき観者が本来だれなのかを、絵の側から特定する機能を果たしているのではないか、ということであった。王の私室のために描かれたという事情に加え、この鏡の描写は、《ラス・メニーナス》の受容のあり方に、きわめて特殊な条件づけをなしていると思われる。(22)

じっさい、国王フェリペ4世が、この絵に想定された唯一の観者であったとすれば、《ラス・メニーナス》についての＜読み/記述＞は、本来、王（ないし国王夫妻）自身による「語り」というかたちでしか成立しえない。先の物語的な図像解釈が前提とする、「国王がベラスケスのアトリエを訪問した」といった＜読み/記述＞は、もとより第三者の解釈者の視点に立つものに過ぎない。絵の前に立った王は、その意識のなかで、「私は今、ここベラスケスのアトリエを訪れている」と、自己の視点からこの絵を読んだはずであり、鏡像の主ではないわれわれは、この絵の真の観者たる資格をあたえられていないのである。

ところで、スペインの研究者フェルナンド・マリーアスは近年、やはり《ラス・メニーナス》を「公の作品」として解釈することを批判する立場から、この絵に込められたベラスケスの意図を独自の視点から指摘した。その際、マリーアスが注目したのは、1644年以来、国王がベラスケスにみずからの肖像を描く機会をあたえていなかったという事実である。(23) このことは以前から知られてはいたが、《ラス・メニーナス》の解釈に結びつけられることはなかった。しかもマリーアスは、近年発見された国王フェリペ4世自筆の書簡に注目することで、この肖像の不在をめぐる王と宮廷画家ベラスケスの、微妙な感情の交錯を巧みに浮き彫りにしている。

国王の手紙は、物故した最初の王妃イサベル・デ・ボルボンの元侍女で、シウダー・レアルの修道院に引退していたルイサ・エンリケスに宛てられたものである。侯爵夫人であったルイサは、引退後も頻繁な文通を通して国王と親しい関係を保っていた。その１通、1653年のある書簡には、すでに9年にわたって1点の肖像も描かせていないこと、そしてその理由として、みずからの老いを目にすることへのためらいや、仕事の遅いベラスケスの「粘液質」の性格についてのいささかの不満が率直に語られる。マリーアスによれば、こうして果たされないままになっていた宮廷画家の最大の務めを、国王その人に直接訴えることこそ、《ラス・メニーナス》に託された重要な意図だったのではないかという。

その解釈は、画中の鏡に映る像を、絵のなかのカンヴァスに描かれた肖像の反映と見なすことで、論理的な整合をみる。鏡像を介してのみ示されるその肖像は、

描かれねばならなかった、あるいは画家が描くことを望んだ国王の像だというのである。そしてこのマリーアスの解釈は、実際にフェリペ4世最後の肖像画が、10年あまりの空白の後、年代は確実に特定できないものの、ちょうど《ラス・メニーナス》制作の頃描かれたという事実ともよく符合する。さらに、王の画家としてのみずからの役割の確認をなすべく、王のためだけの絵画を捧げるという趣向は、マリーアスも指摘するとおり、例の騎士叙任の一件をめぐる文脈との関わりにおいても、実に心憎い計算と解される。

このマリーアスの議論は、極めて私的な作品としての《ラス・メニーナス》の受容の場に存在したであろう、国王とベラスケスの間の親密な了解事項を、具体的に想定しようとする点で、実に示唆的である。とはいえ、画中のカンヴァスを、「描くべき肖像画」のイメージをかたどったものとし、鏡像をこれと結びつけるのは、いささか承服できない。そのサイズは等身大の立像にせよ、肖像画というにはあまりに大きすぎる。巧妙な趣向の画家ベラスケスが、そうした不釣り合いな設定を放置するとは思えない。画中の鏡はやはり、絵の前の国王にとって、直感的に自己の像を映すものと解されたと考えるのが自然ではなかろうか。ならば、その鏡の像に導かれてこの《ラス・メニーナス》の前に立った、唯一の観者たる国王は、そこに何を見いだしたのか、あるいは、何を「体験」しえたのか、少し角度を変えて考えてみよう。

ベラスケスの絵画を愛したフェリペ4世のエピソードを語るなかで、パロミーノはまた、いささか紋切り型ながら、示唆深いエピソードを残している。それは、夜半にベラスケスのアトリエを訪れた国王が、肖像画の人物を実物と取り違えるというものである。いうまでもなくこれは、「ゼウクシスの葡萄」以来の芸術家伝説 ---描かれた葡萄を鳥がついばんだという--- の典型的なパタンの、肖像画版である。(24) だが、ここで注目したいのは、こうした芸術称揚のレトリックが、現に宮廷社会のなかで反復して語られていたという事実である。《ラス・メニーナス》のなかに描かれた人物たちの、実にいきいきとした描写は、あるいは、この誰もが知るレトリックを意識したものといえないだろうか。

絵のなかには、9人の人物が等身大のスケールで描かれている。画面の中央にいるのは、今、絵の前の国王に気づいたばかりといった様子の王女マルガリータ。ベラスケスは王のこの最愛の娘の姿を、実にみずみずしいタッチで再現している。その両脇には、いつもの優美さで王女にかしづく女官マリア・アグスティーナ、そして、やはり今、国王に気づき跪こうとする、もうひとりの女官イサベルがあらわされる。さらに絵の右側には、国王一家の側近くに仕えた矮人たち、マリ・

バルボラとニコラ・ベルトゥサートの姿もみえる。またその背後には、ふたりの女官、侍従をはさみ、鏡の脇の扉口から遠いまなざしでこちらを見やる、侍従ホセ・ニエト・ベラスケス（画家とは同姓ながら血縁ではない）が立つ。いずれも実在の人物で、かつ国王の最も近しい人びとであった彼らは、普段のままの役割をこの絵のなかで演じている。画中に描かれた情景の、このあまりのさりげなさこそ、この《ラス・メニーナス》の絵画表現上の魅力の源である　---それゆえかつてこの絵は至上の「写生画」ともみなされたのだった---　と同時に、洗練された趣向の本質をなすように思われる。

もちろん、いかにさりげなく、また卓越した技量で描かれたにせよ、画中に描かれた人物像が実際に、理性ある人間の眼を欺くということはほとんどありえない。ただし、周到に演出された絵画的リアリティーが、それに感動した観者に、誇張された文学的なレトリックと戯れる場を提供することは、珍しいことではない。あるいはそれこそが、古典的な「芸術愛好」とでもいうべきものの本質をなすものかもしれない。じっさい、フランス・ロマン派の詩人テオフィル・ゴーティエは現に、この《ラス・メニーナス》をプラドで実見した際、「絵はどこにある」と芝居がかって叫んでみせた。そして、このゴーティエが、あるいは承知していたかもしれないパロミーノのベラスケス伝の一節は、この作品を、「絵ではない。真実 verdad である」と記述している。

こうした、いわば「文学的」な言説は、客観的な記述を前提とする近代の美術史研究、とりわけ厳密な図像解釈の論理が、いわゆる「作品研究」の世界から放逐したものであった。ゴーティエやパロミーノの雄弁なことばは、今日のベラスケス論において、冷静な研究者が「傑作ラス・メニーナス」に対する称賛をおずおずと表明する際の、便利なエピソードでしかない。

しかしながら、この絵についての「語り」が国王ひとりに委ねられたことを想起するならば、まさにその放逐された主観性、「近代的学術研究」が嫌悪してきた気まぐれな観者のまなざしこそが、ここで本質的な意味をもつことに注目してよいだろう。客観的な「解釈」によるのではなく、むしろ観者の側が、絵の前での主観的な驚きと感動を率直に、そして、ある種の文学的な洗練をもって、朗々と雄弁に語ること、それこそが、この絵本来の受容のあり方として想定されいてたものではなかろうか。この絵は美術史家のために描かれたのではなく、ただただフェリペ4世という、ひとりの王のまなざしだけを意識して描かれたのである。

もちろん、そうであるならば、ゴーティエやパロミーノらにしても、その感動の語り手として十分な資格をもたない。じっさい、彼らは描かれた王女の愛らしさを、わが子への慈しみの情をもって眺めることはできないし、女官や道化たち

の親しみ深い視線も、個人的な人間関係に根ざしたものとして受け取ることはない。ただ国王フェリペのみが、寵愛の画家ベラスケスのアトリエを訪問し、親しみ深い人びとに迎えられる喜びと機知に満ちたひとときを、絵の前に立つ「今、ここ」で、みずからの体をもって体験することができたのである。

国王フェリペにとってこの絵は、眼前の絵であると同時に、あるいはそれ以上に、宮廷生活のなかで、彼が最も愛した時と場を、あたかも魔法のようにいつでも現象させるひとつの「装置」だったといえるだろう。絵の前に立つその国王がその時、王者の芸術家訪問にまつわる、古代以来のかの伝説を思い起こせば（もとより間違いなく想起しただろう）、芸術を愛するアレクサンダーにわが身をなぞらえ、悦に入ったかもしれない。そして、アペレスたるベラスケスからの、騎士叙任への助力や肖像制作の願いといった嘆願に、思いをいたしたのかもしれない。しかも、絵の前でのその楽しみに満ちた体験は、常に王の心のままに揺らぎ、変容し、けっして確定されることはない。だがそれゆえにこそ、絵を見る喜びは、尽きることがないのである。

マリーアスも引用するパロミーノの《ラス・メニーナス》についての記述は、こうしたこの絵の受容の場を想像するうえで実に興味深い。

「この絵は陛下が非常に評価したものである。これが制作されていたとき、陛下はしばしばその描く様を立ち会って見、王妃マリアナ・デ・アウストリア様もまた、同様に何度も（ベラスケスのアトリエに）下りてきたものであった。そして王女方や女官たちは、その喜び deleite と楽しみ entretenimiento のゆえに、この絵を評価したのである」。(25)

先に引用したパチェーコの記述に響き合うこの一節は、もとより王侯のアトリエ訪問という、例のモチーフを踏襲したものでもある。とはいえ、このパロミーノの語るエピソードには、ことさらに絵画芸術の高貴さを主張する理念性よりも、むしろより率直に絵を楽しむくつろいだ気分がみなぎる。そしてその気分を語るのに、パロミーノは、パチェーコがボデゴンの受容の場に認めた価値であり、また、マンチーニが素人絵画愛好家 uomo di diletto の主観的な趣味の表明を正当化した際のキーワードでもあった、あの「喜び」ということばを、奇しくも繰り返している。ただしその「喜び」は、繰り返しいうならば、この《ラス・メニーナス》おいて、本質的に国王フェリペ4世によってのみ独占されたされたものであった。

《ラス・メニーナス》は、そのスケールとみごとな描写のゆえに、偉大な構想

画としての体裁を備えている。けれどもそうした外観から、これを偉大な理念の表現ととるのは誤りである。《ラス・メニーナス》は、けっしてルネサンス的な意味での「物語画」ではなく、むしろ、ごくありふれた日常の事物を描きながら、観者の側がそこに隠された含意や、さまざまの趣向を探り出してゆく、つとめて17世紀的な風俗画に近い。セビーリャ時代のベラスケスのボデゴンがそうであったように、そこでは、しばしばある限られた層の観者が顧客として想定されたが、この宮廷の新たな「風俗画」は、その観者の限定を極限にまで狭めることで、逆に、見る喜びを無限に再生産する希有の絵画体験の場を創造した。

またたほう、そうして観者に奉仕する作品の制作が、若き日のベラスケスにとって、彼の生きた社会の現実のなかでの自己実現、社会的上昇の手段としても機能したのと同様、《ラス・メニーナス》は、画家・廷臣たる彼の最後の飛躍、貴族としての認知を実現するための媒介ともなった。

ベラスケスは、この《ラス・メニーナス》完成後間もなく、その血筋の貴族性に対する根強い疑義を国王の強力な介入によって乗り越えて、ようやく念願の「サンティアゴの騎士」の称号を手にした。パロミーノによれば、画家の没後そう間もない彼の時代の宮廷には、国王フェリペ4世みずから筆を取り、画中のベラスケスの胸に騎士団の紋章である赤い十字を描き込んだとの伝聞も、ささやかれていたという。(26)

その真偽はもとより今や確認のしようもない。しかし、この《ラス・メニーナス》が国王にとって、絵であると同時に「現実　verdad」であったとするならば、確かにベラスケスの胸の十字は、国王によって描き込まれなければならなかっただろう。こうして《ラス・メニーナス》は、その前に立つ国王の心のままに、画中の描写においてもまた更新され、変容したのである。

最後にこの希有の構想の主、画中のベラスケスと今一度向かい合おう。

穏やかな表情でたたずむ画家は、騎士団の赤い十字の紋章を胸に、堂々と半身をそらしている。あたかも彼は、この顛末を最初から承知であったといわんばかりである。じっさい画中の彼は、絵の前に立つ王とともに、「現実」を生きたのである。

註

1. Jonathan Brown, *Images and Ideas in the Seventeenth-Century Spanish Painting*, Princeton, 1978. Ch. 1: A Commutniy of Scholars, Ch. 2: *El Arte de la Pintura* as an Academic Document.
なお、パチェーコの生涯とその背景については、José María Asensio, *Francisco Pacheco*, Sevilla, 1886. および Enrique Valdivieso, Juan Miguel Serrera, *Pintura sevillana del primer tercio del siglo XVII*, Madrid, 1985, pp.16-116.
2. Antonio Palomino, *El Parnaso español pintoresco laureado, El Museo pictórico y Escala Optica*, tomo 3, (Ed. Aguilar) Madrid, 1947, p.206.
3. 近年の主なベラスケスのモノグラフは、基本的にこうした認識に立っている。Enriqueta Harris, *Velázquez*, Oxford, 1982, p.10; Alfonso E. Pérez Sánchez, "Velázquez y su Arte," en Ex.Cat. *Velázquez*, Museo del Prado, 1990, p.24. あるいは、ブラウンの重要な著作 *Velázquez, Painter and Courtier*, New Haven & London, p.2 など。
4. フリアン・ガリェゴは、パチェーコがベラスケス側と結んでいた徒弟契約の内容が、実のところアカデミー的理想とはほど遠いものであったことを冷静に指摘している。Julián Gállego, *Velázquez en Sevilla*, Sevilla, 1974, pp.71-72.
5. Francisco Pacheco, "A los Profesores de Arte," en Francisco Calvo Seraller, *Teoría de la pintura del Siglo de Oro*, Madrid, 1981, pp.185-191.
6. *Ibid.*, p.190.
7. こうしたセビーリャの聖像画家の世界についてのわれわれの知識は、主にフアン・ミゲル・セレーラの一連の仕事に負っている。たとえば、Juan Miguel Serrera, *Hernando de Esturmio*, Sevilla, 1983, pp.31-54; "Vasco Pereira, un pintor portugués en la Sevilla del último tercio del siglo XVI," *Archivo hispalense*, 70 (1987), pp.197-239, etc.
8. *Documentos para la historia de arte en Andalucía*, II, Sevilla, 1928, pp. 5-6.
9. Duncan Kinkead, "Juan de Luzón and the Sevillian Painting Trade with the New World in the Second Half of the Seventeenth Century," *Art Bulletin, 66*, (1984), pp.303-310.
10. Francisco Pacheco, *Arte de la Pintura*, (Ed. de Bonaventura Bassegoda i Hugas), Madrid, 1990, p.519.
11. *Ibid,*, pp518-519.
12. 岡田温司「ディレッタントの形成、試論—ジュリオ・マンチーニを手がかりに」、『美学』174号、17頁より引用。
13. 上掲

14. Jonathan Brown & Richard Kagan, "The Duke of Alcalá: His Collection and Its Evolution," *Art Bulletin*, 69 (1987), p.238.

15. Duncan Kinkead, "The Picture Collection of Don Nicolas Omazur," *Burlington Magazine*, 128 (1986), p.137.

16. Carl Justi, *Diego Velázquez und sein Jahrhundert*, II, Bonn, 1922, p.333.

17. Charles de Tolnay, "Velázquez' Las Hilanderas and Las Meninas. An Interpretation," *Gazette des Beaux-Arts*, 35 (1949), pp.21-38.

18. George Kubler, "Three Remarks on Las Meninas," *Art Bulletin*, 48 (1966), p.213.

19. Francisco Pacheco, *Arte de la Pintura*, p.209

20. Jonathan Brown, "On the meaning of Las Meninas," in *Images and Ideas...*, pp.87-110. 特に pp.92-98, 109-110.

21. Yves Bottineau, "L'Alcázar de Madrid et L'Inventaire de 1686," *Bulletin Hispanique*, 60 (1958), p.297. および拙論「ラス・メニーナス —作品と観者」、『美のパースペクティヴ』所収 鹿島出版会、1989年、190頁。なお、この「王の夏の政務室」の性格については、後述するマリーアスの論文がより詳細な事実を明らかにしている。Fernando Marías, "El género de Las Meninas: Los servicios de la familia," en *Otras Maninas*, 1995, pp.249-252.

22. 前出拙論、187-193頁。

23. Fernando Marías, "El género...," pp.267-271.

24. Antonio Palomino, *El Parnaso...*, p.226. エルンスト・クリス、オットー・クルツ 『芸術家伝説』 ペリカン社 100-101頁。

25. Antonio Palomino, *El Parnaso...*, tomo 3, p.250.

26. *Ibid.*, p.249.

Expresiones populares en *La tierra pródiga* de Agustín Yáñez.

Cecilia Gómez Bobadilla

Introducción.

Agustín Yáñez nació en la ciudad de Guadalajara, México, en el año de 1904. Fue gobernador del Estado de Jalisco de 1953 a 1959, y Secretario de Educación Pública de 1964 a 1970. Fue también socio de número de la Academia Mexicana de la Lengua a partir del año de 1954. Su obra literaria fue publicada entre 1940 y 1970. Algunos críticos establecen dos vertientes en su novela: la rural y la urbana. Su trilogía rural incluye *Al filo del agua,* publicada por primera vez en 1947; *La tierra pródiga*, de 1960, y *Las tierras flacas*, de 1962, siendo especialmente en estas dos últimas donde describe la eliminación del caciquismo en la costa Occidental de México durante la segunda mitad del siglo XX. Sus novelas catalogadas como urbanas son *La creación* (1959), y *Ojerosa y Pintada* (1960). Juan Rulfo lo considero "uno de los fundadores de la Novela mexicana" y Carlos Fuentes ha dicho de Yáñez que él tuvo "la primera visión moderna del pasado inmediato de México".[1]

Yáñez mismo trazó un plan para su obra y la dividió en cuatro secciones: «las edades y los afectos», «el país y la gente», «la historia y los tipos» y «los oficios y las ilusiones»[2]. Richard A.Young, en su análisis crítico sobre los cuentos de Yánez, centra su investigación en la primera etapa, es decir, en «las edades y los afectos». Las secciones de «el país y la gente» y «la historia y los tipos», son las que, por su estilo, pueden interesar al lingüista, pues Yáñez –tal vez intuitivamente o tal vez deliberadamente– ha sabido reflejar los modelos sociolingüísticos de la vida jalisciense, tanto en el ámbito rural como en el urbano, ámbitos que a su vez no están claramente delimitados, sino que se traslapan entre sí; ámbitos donde los modos de expresión se "deslizan" en uno y otro ambiente.

Al comentar su obra, el autor nos refleja esta "intuición" lingüística que hace que sus libros sean sujetos de análisis. Young lo cita en la entrevista con Emmanuel Carballo, donde de su obra *Flor de juegos antiguos*, comenta lo siguiente:

> El problema estilístico de *Flor de juegos* fue el de desechar palabras y giros que no correspondieran a un niño de la Guadalajara del año diez de doce, de catorce años que, se supone, describe el libro, *y que son los años en que yo viví mi infancia.* [3]

Y en *La tierra pródiga,* al hacer hablar a sus personajes los hace decir cosas como:

> ... quisiera saber cómo le hace para pasar con la mayor naturalidad de un asunto de dinero a otro de versos, y hablarle lo mismo a un sabio que a un Sotero Castillo, a una mujer de mundo y a un Ricardo Guerra; digo: en el idioma de cada cual. Es maravilloso.[4]

Igualmente pone en labios de sus personajes las frases: "como luego dicen", "como dicen por acá", "como dicen los pelados", entre otras.

A decir de Young, Yáñez estuvo influenciado por la técnica del fluir de conciencia de James Joyce. Esto es fácilmente reconocible en *La tierra pródiga*, donde en letra cursiva escuchamos el diálogo interno de sus personajes, sobre el presente, el pasado o el futuro, diálogo mismo que refleja el habla popular e incluso íntima de cada cual. "...Una de las técnicas principales consiste en caracterizar a esta gente con el proverbio, y el refrán tradicional, no solamente en el diálogo, sino también usados como base de la narración del fluir de conciencia o del monólogo interior".[5]

El regionalismo es característica constante en la obra de Yáñez; sus descripciones nos evocan sin falta el aire provinciano de México y él, habiendo sido criticado por asumir tales opciones de estilo, supo defenderse vigorosamente argumentando que éstas son "una manifestación no de regionalismo, sino de universalismo".[6] En el arte literario de Yáñez, las descripciones de las facetas de un solo lugar bien podrían repetirse en todo el país. Sus personajes entablan en sus diálogos las conversaciones de cualquier situación, cualquier momento del habla cotidiana. Es esto lo que convierte a su obra en terreno fértil para el análisis del habla coloquial del occidente mexicano.

Expresiones populares (no mexicanismos) en esta obra literaria.

Mi propósito en el presente artículo no es catalogar las expresiones y vocablos aquí referidos por su carácter mexicano. No pretende ser el presente un tratado sobre "mexicanismos", ni mucho menos sobre "modismos o coloquialismos del habla del occidente de México", pues es verdaderamente difícil clasificar una expresión, un giro o una frase hecha, como originaria y exclusiva de una determinada zona geográfica.

> " ... si se admite que nunca – o rara vez – hay coincidencia entre las delimitaciones dialectales lingüísticas y las fronteras geográfico políticas de los diversos países, difícilmente podría postularse la existencia de un español de México".[7]

Sobre una obra tan importante y vasta como lo es el Diccionario de Mexicanismos de Santamaría, José G. Moreno de Alba, actual socio de número de la Academia Mexicana de la lengua, ha dicho que " ... debe reconocerse que ese lexicón es el

más completo y confiable de los recuentos de mexicanismos existentes. Su autor fue un incansable estudioso del español mexicano, uno de los que mejor lo han conocido..."[8] No obstante, hay la plena conciencia de que este mismo prestigioso diccionario no incluye muchas acepciones que debería incluir y al mismo tiempo incluye algunas cuyo origen es dudoso. Reitero, por lo tanto, que no se sostiene que las expresiones aquí contenidas – aún cuando la definición que proporciono la incluya Santamaría–, sean "mexicanismos".

Como hablante nativa de la ciudad de Guadalajara, no expongo en este texto todos los modismos o expresiones populares que aparecen en *La tierra pródiga*, sino sólo aquellos que actualmente se escuchan en el habla informal de mi ciudad, que bien pueden provenir de España o de otras regiones de Latinoamérica, pero que por el hecho de emplearse en Guadalajara, ahí son actuales y están vivos.

Habrá, por principio, que considerar algunas definiciones de diccionario para entender que pretendo decir con el término "expresión popular". Veamos las definiciones proporcionadas por los diccionarios. El Diccionario de la Lengua Española, de la Real Academia de la Lengua, en su edición de 1992, no incluye una definición para **expresión popular**, pero sí define los siguientes términos:

> **Modismo** - m. Expresión fija, privativa de una lengua, cuyo significado no se deduce de las palaras que lo forman. 2. **Idiotismo**, expresión o sintagma privativo de una lengua contrario a las reglas gramaticales.
> **Frase**. del griego *phrasis*, expresión, lat. phrasis. Conjunto de palabras que basta para formar sentido, especialmente cuando no llega a constituir una oración cabal. **Frase hecha. Idiotismo.** Modo particular con que ordena la dicción y expresa sus pensamientos cada escritor.

Otras definiciones del DRAE nos pueden esclarecer un poco más por qué considero apropiado denominar a los ejemplos aquí incluidos como *expresiones populares.*

> **Popular.** Perteneciente o relativo al pueblo.2. Que es peculiar del pueblo o procede de él.3. Propio de las clases sociales menos favorecidas. 4. que está al alcance de los menos dotados económica o culturalmente. 5. que es estimado, o al menos, conocido por el público en general. 6. Dicho de una forma de cultura, que el pueblo considera propia y constitutiva de su tradición.
> **Locución**. Modo de hablar. 2 Grupo de palabras que forman sentido, frase. 3. *Gram*. Combinación estable de dos o más palabras, que funciona como oración o como elemento oracional y cuyo sentido unitario no siempre se justifica, como suma del significado normal de los componentes. **adjetiva, adverbial, conjuntiva, interjectiva, prepositiva.**

Podemos concluir en que una "expresión popular" es aquella que se emplea en el contexto oral informal, de todos los días, el que el pueblo crea y recrea constantemente.

Por último, considero importante citar nuevamente a Santamaría.

> ...el pueblo que es soberano en este atributo de crear el idioma, y de hecho lo vemos y lo oímos dar diariamente, nueva acepción o más preciso o más vago sentido de una expresión; y así quien desee estar al tanto del verdadero alcance de un giro del lenguaje popular, deberá seguir esa marcha en el desarrollo del vocablo vulgar o familiar, sobre todo en el vocablo vulgar, más aún en el plebeyo, el cual por razón de su rebeldía a todo sometimiento jerárquico y por virtud de esa audacia propia de la ignorancia, adquiere y sufre caprichosas modificaciones, transformaciones inauditas, que nadie puede explicar y que es muy difícil, cuando no inútil, investigar. [9]

Metodología.

La presente no es una investigación de campo, para la cual se necesitaría haber realizado encuestas a una muestra de hablantes nativos que demostrara con números y porcentajes la vigencia de las expresiones y términos aquí incluídos. No es éste el caso. Se trata más bien de un catálogo de referencia del español informal del occidente de México, mismo que pretendo completar con otro artículo que aparecerá casi simultáneamente en el Boletín Académico de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto, en su volumen LIV, del año 2000, y que incluirá una encuesta con hablantes nativos de la ciudad de Guadalajara, México.

Las expresiones y palabras aquí contenidas son todas, si no empleadas, por lo menos sí comprendidas en el habla informal de Guadalajara. En la primera lista se ofrecen las expresiones o el vocabulario acompañados del contexto en que aparecen en *La tierra pródiga*, de Agustín Yáñez, con su definición conforme ésta aparece en el *Diccionario de Mexicanismos*, de Santamaría, siempre y cuando esta definición corresponda al uso o giro que actualmente se le da. La segunda sección incluye aquellas expresiones o palabras que no aparecen en el *Diccionario de Mexicanismos*, pero sí en el Diccionario de la Real Academia en su edición de 1992. La tercera sección incluye las expresiones o palabras que no aparecen ni en el *Diccionario de Mexicanismos*, ni en el DRAE, pero que sí aparecen en el *Diccionario de Uso*, de María Moliner (1966). Y una cuarta sección incluye a las expresiones o palabras que definitivamente son de uso actual en el habla informal de Guadalajara, pero que no se incluyen en ninguno de los diccionarios consultados.

Espero que el presente catálogo sea de utilidad al lector de la obra de Agustín Yáñez. Irá éste más allá de mis expectativas si resuelve situaciones concretas de habla a los estudiantes del español como segunda lengua, pero mi objetivo esencial es que el lector se divierta con la gracia, el ingenio y el folclore de la mayoría de las expresiones aquí incluidas.

Voces y expresiones populares en *La tierra pródiga,* de Agustín Yáñez.

I. Expresión y contexto en que aparece	**Definición proporcionada por el Diccionario de Mexicanismos[10]**
- ... para que se sepa quien es el bueno, *ándale...* p. 19	***Ándele.*** Frase familiar que se usa para animar a que se haga alguna cosa.
-... nada de tomar la iniciativa *atrabancados.* p. 20	***Atrabancado, da.*** Atronado; que hace las cosas o se arroja a los peligros sin premeditación.
- ... voy a quitarle la tos como luego dicen *a bajarle los humos...* p. 180... dije le *quitaré los humos, lo abajaré* ... p. 273	***Bajar a uno los humos.*** Quitarle lo pedante, presumido, vanidoso o soberbio. (*Bajar los bríos,* D.R.A.E.)
- Lo bonito es *barajarlos* bien y bonito: al obispo y al Gobierno. p. 45	***Barajar.*** Impedir, estorbar; o confundir, embrollar.
- ... acá también tratan de armar *borlote...* p. 270	***Borlote.*** Mitote, bola, tumulto, desorden, escándalo.
- ... y nos quiera decir cuelen a su *cantón...* p. 16	***Cantón.*** Familiarmente, vecindario, territorio, barrio, y por extensión, casa en que se habita.
- Aquí nos tienes *con el Jesús en la boca* todita la noche sin pegar los ojos y rezando magnificas. p. 78	***Con el Jesús en la boca (estar o vivir).*** Tener miedo a todo, estar lleno de temores y sobresaltos por el más nimio pretexto.
- *Con el tiempo y un ganchito,* dice Castillo; y Parra: – la fruta de madura cae... p. 31	***Con el tiempo y un ganchito.*** Expresión familiar que aconseja paciencia para alcanzar algún fin. A su tiempo maduran las uvas.
-... el jefe sabe bien a quien necesita *conchavar...* p. 28 ... ¿en que momento se *conchavaron?* ... p. 208	***Conchabar.*** (var.) Entenderse con una persona, ponerlo a uno de su parte... por medio del cohecho.
- ... porque te *cuadrará* de lo lindo, pero tú te convencerás... p. 191	***Cuadrar.*** Agradar, gustar, convenir. De aceptación castellana, (ahora vulgar).
- "Me gustan las *cuentas claras y el chocolate espeso"*– era su otro lema. p. 76	***Las cuentas claras y el chocolate espeso.*** Expresión sentenciosa que advierte la inconveniencia de los trabacuentas, comparadas con un mal chocolate. (var., *cuentas claras, amistades largas)*
- sobre los montones de rorras *cueros...* porque no hay comparación... p. 180 ... qué *cuerazos...* p. 201	***Cuero.*** Dícese de la mujer hermosa o de prendas seguras para el amor. (*Es un cuero,* hombre o mujer, sic).
- ... congregaron *chorchitas* de gente al servicio de... p. 194	***Chorcha.*** Grupo, pandilla de gente joven. (*Hacer chorcha*, juntar un grupo de gente, sic).
-... ya *de a tiro* ni la amuelas ni la sabes	***De a tiro, o del tiro, o de altiro, o dialtiro*** (var.)

disimular. p. 48 ... se nos dejaron venir *de a tiro.* p. 228	Completamente, de una vez. Úsase también en España.
Hasta la vida mi quitarías si yo *fuera un dejado.* p. 8	***Dejado.*** Descuidado, abandonado de su propia persona.
- ... mis amigos me *echen de cabeza* con sus muecas... p. 11	***Echar de (o por la) cabeza.*** Descubrir por inadvertencia, o con mala intención .
- "Que usted me *encampanó*"... p. 115	***Encampanar.*** Entusiasmar, empujar a una empresa... comprometer en un fracaso en malos manejos.
- ... tú eres de los míos: *entrón*. p. 90	***Entrón, entrona.*** Animoso, resuelto, acometivo.
- ... puedo ser capaz de pegarte, hasta de matarte; pero *faltarte*, nunca. No, nunca te he *faltado...*	***Faltar.*** En sentido absoluto, insultar a un igual o superior. (*Traicionar, ser infiel*, sic).
- ...y por falta de *fierros* en efectivo se me va a ir un negocio... p. 114	***Fierro.*** Genéricamente, dinero, entre el vulgo. (*clavo, tornillo, ojos*, sic).
- Mulas que no dejan flete, *¡fuchi!*	***Fuchi.*** Interjección de asco. ¡Puf!
- *Este es mi gallo,* perdón: éste es el hombre que necesitábamos... p. 7	*Ser* ***gallo.*** Ser valiente, ser bravo.
- *gasté otra vez la pólvora en infiernitos,* de balde...p. 67	***Gastar la pólvora en infiernitos.*** Gastar la pólvora en salvas. (Desperdiciar, sic)
- ... no trates de *hacerte guaje*...p. 258	*Hacerse* ***guaje.*** Hacerse el bobo, el desentendido.
- *Se me hace que* no es a usted al que tenemos que... p. 26	***Hacérsele a uno que.*** Parecerle a uno como lo más posible, o acaso lo seguro.
- ... como *se le hace la lucha* a una mujer, y se sufre por ella... p. 63	***Hacer la lucha.*** Esforzarse por cualquier medio o procedimiento lícito para obtener el logro de una aspiración
- ... que tanto ha sabido defender y aumentar en tantos años de *jalar parejo*... p. 107 ... el que no quisiera *jalar* que se fuera... p. 154... hay que *jalar parejo,* ayudarle... p. 167	***Jalar parejo.*** Tirar por igual. Distribuir con equidad...
-... cuando de *jijodeún* no me baja... P. 9 ... *jijadiuna,* no más eso me faltaba *jija de tu pelona*... p. 276	***Jijo, jija.*** Equivalente a un ¡hijo... de tal! (*Hijo de su pelona*, sic).
- ... cómo les gusta *jinetear* el dinero... P. 116	***Jinetear.*** En sentido figurado, lucrar, obtener ganancia, sobre todo en forma ventajosa e indebida.

- ... miré, aquí doce mil *lanas* – se las conté... p. 115

Lana. El dinero, la moneda, en estilo festivo. *(No tengo lana,* sic)

- ... así lo siento y *me late* que usted también... p. 162

Latirle a uno. Darle en el corazón (presentir, sic).

- ... pagaría sus deudas... y *lueguito* construiría una fuente... p. 62 ... que *luego luego* corrieron... p. 198

Luego, lueguito. En seguida, luego luego.

- Se complacía en humillarla, en *llevarle la contra* y obtener... p. 72

Llevar (a uno) la contra. Llevar la contraria (opinar lo contrario, sic)

- ... con decirle "no" *a lo macho*...p. 143
-... cuantas veces me has querido *madrugar.* p. 8

Macho, a lo. Grosero y vulgar... a lo hombre.
***Madrugar** a uno.* Herir, matar con ventaja; atacar el primero, sin dar ventaja al contrario.

- ... yo *soy mano* en el negocio...p. 10

*Ser uno **mano.*** Tener el primer turno; tomar primero.

- Para el Gobierno, yo soy *el mero* no más. p. 45 ... el *merito* amo de la costa... p. 290

Mero. Precisa justa, exactamente; verdaderamente; con sentido ponderativo.

- A cada capillita se le llega su día como dicen tus *mochos*... p. 232

Mocho. Religioso en general y por extensión, conservador, retrógrado.

- Yo nunca me disculpo, ni menos contigo, vieja *molona.* p. 78

Molón, molona. Molesto, fastidioso. (De *moler*, en el sentido de fastidiar, cansar, fregar a uno).

- Qué diera porque se tratara de *montoneros*... p. 305

Montonero, ra. Rijoso o pendenciero que acomete en montón, agrupado con otros.

-... con gente comprada o con *mordelones* intratables... p. 25

Mordelón, na. ... empleado subalterno, guardia... que acepta el soborno para disimular la infracción ilegal.

- ¿Por qué no se la roba...? A la *muchachona*, digo. p. 92

Muchachón, na. Todavía no muy lejos de la edad de un muchacho: entre la juventud y la edad madura. "También puede tomarse por muchacho o muchacha hermosos..."

- ... sería bonito pero *no hay de piña* cristiano. p. 17 ... cuando les dijeron "Aquí no hay de piña"... p. 114

No haber de piña. No conseguirse una cosa; malograrse algo.

- "*No le hace que* duerman alto... p. 194

No le hace. No importa (*que le hace*, var.)

- ... y tendrá guardias blancas a disposición de sus propios caprichos... *(para que dar tantos bricos, estando el suelo tan parejito)*... p. 110

Para que son tantos brincos, estando el suelo parejo, censurando a quien echa valentonadas sin necesidad (*Pa' que tanto brinco estando el suelo tan parejo,* sic)

- Ni quieras disculparte. A mí *no me la pegas.* p. 78	***Pegarla.*** Obtener buen éxito, conseguir lo que se desea.
- ya se le apareció su *pelona* y ni las manos metió. p. 189	***Pelona.*** La muerte. (Léxico andaluz, Moreno, op. cit, p. 253)
- muertosdehambre que *no tienen ni un petate donde caerse muertos.* p. 27 ... Ricardo está *petateando*: en el doble sentido de hacer petates y de andarse cayendo de la reata. p. 231	***Petate.*** Aztequismo con el cual se designa una estera tejida de tiras de hoja de palma, en casi todo el continente... se usa para acostarse. *No tener uno ni petate en qué caer muerto.* Estar muy pobre. ***Petatearse.*** Morirse.
- *Pícale* fuerte antes de que se nos meta el sol. p. 251	***Picarle.*** Apresurar el paso, darse prisa.
- *Por si la moscas* y oliéndome la tanteada... p. 17 ... *por si las moscas* hay vigilancia... p. 293	***Por si las moscas.*** Expresión de recelo, temor o desconfianza... también por las dudas o por aquello de las dudas. (*Por si acaso*, sic)
- ... aquí tengo, como quien dice, mis *querencias.* p. 89	***Querencia.*** Lugar donde está la persona o cosa queridas.
-... le prometió quitarle a la *querida* ... p. 24	***Querida.*** Concubina, amasia, amante.
-... cuando empieza el día o sus negocios *quien quite* no hay peor lucha que la que no se hace... p. 149	***Quien quita*** (var.) Quien sabe, puede ser, tal vez...
- ...en un abrir y cerrar de ojos *todo se fue a la porra* se lo llevó el diablo... p. 173	***Porra (a la), irse o mandar a uno.*** Irse al diablo, en Cuba tiene sabor vulgar y grosero.
- ... por tener que confesar que es *tarugo*... p. 116	***Tarugo, ga.*** Sujeto torpe, desmañado, sin malicia ni vivacidad, tonto. Lo mismo en Andalucía.
- ... y gastan *titipuchales* de dinero... p. 231	***Titipuchal.*** Vulgarmente, multitud, muchedumbre de cosas.
- *Nos dieron en la mera torre,* pasaron a desgraciarnos, *en la merita torre.* p. 185	***Torre, darle a uno en.*** Herirle en lo vivo.
- Demonios de *tracaleros*. Cómo les gusta jinetear el dinero... p. 116	***Tracalero, ra.*** Tramposo, embaucador...

II. Expresión y contexto en que aparece	**Definición proporcionada por el Diccionario de la Real Academia de la Lengua Española.** [11]
- ya ... ni la *amuelas* ni la sabes disimular. p. 48 ... ese sí que ya ni la *amuela*... sólo se hace el disimulado... p. 113	***Amolar.*** Fastidiar, molestar con pertinacia.

- gasté la pólvora en infiernitos, *de balde.* p. 67... y el corazón me dice que no será *de balde*... p. 236	***Balde** (de, en).* Gratuitamente, sin coste, sin motivo ni causa.
- ... para que se sepa quien es el bueno, ándele, *collón*, jijo...p. 19 ... si aquí está el *collón* ¿por qué no salió?... p. 276	***Collón, collona.*** Cobarde.
- usted me *dispensará*; pero de otro modo no iríamos a ninguna parte... p. 61	***Dispensar.*** Dar, conceder, otorgar, distribuir. Eximir de alguna obligación. *(usted me perdonará, usted me disculpará,* sic)
- ... él fue el que mando *escabechar* a los dos hermanos... p. 8	***Escabechar.*** Matar a mano airada y ordinariamente con arma blanca.
- Me los *llevo de calle* siempre, que no quieran hacerme una tanteada. p. 49	***Llevar** o llevarse (a alguien) **de calle.*** Superar, arrollar, dominar.
-... con él... *nunca hay pierde* ni miedo... p. 19	***No tener pierde*** (una cosa). Ser fácil de encontrar.
- No quiera *salirse por la tangente.* ¿Cuánto debe usted, amigo... p. 47	***Salirse** (escaparse, irse) **por la tangente.*** Valerse de un subterfugio o evasiva para salir hábilmente de un apuro.
- ... haremos, tornaremos, *no dejaremos títere con cabeza.* p. 178	***Títere, no dejar... con cabeza** (o cara).* Destrozar o deshacer totalmente una cosa.
- *...qué se traerán*... p. 18	***Traérselas.*** Locución familiar que se aplica a aquello que tiene más intención, malicia o dificultades de lo que a primera vista parece. (*qué estarán pensando hacer*, sic)
III. Expresión y contexto en que aparece	**Definición proporcionada por el Diccionario de Uso del Español.[12]**
- .. en busca de publicidad e influencias, *a tontas y a locas*... p. 158	***A tontas y a locas.*** Sin discernimiento ni medida. ("En vano", Moreno. p. 103)
- *Apareció el peine*... p. 243	***Apareció el peine*** (var.) Cuando por fin se descubre cierta cosa o se encuentra la explicación de ella.
- ... y yo *me les despinté*... p. 114	***Despintarse.*** Borrarse, desfigurarse. (*Pintarse de colores,* variante, sic.)
- No *se hacía del rogar*, sino que se ofrecía modosamente... p. 75	***Hacerse (de) rogar.*** Hacer a alguien que le insistan mucho antes de acceder a cierta cosa.

-... uno tiene orgullo para que no digan *se rajó*... p. 16	***Rajarse.*** Desistir de cierta cosa que se tenía intención de hacer, o abandonarla sin llegar al final; por ejemplo, por miedo.
- ¡*Jesús mil veces*!	***Jesús mil veces.*** Exclamación de queja, de sorpresa o de susto.

Expresiones que no aparecen en ningún diccionario consultado.

- debemos ir al grano, o como dicen acá los pelados: *"A lo que te truje, Petra".* p. 41	***A lo que te truje, Petra (Chencha).*** Sin rodeos, vamos al grano. (***trujir***, traer (rústico) (Martín Alonso[13]).
- *bajita la mano* el ingeniero nos amenazó... p. 70.	***Bajita la mano.*** Disimuladamente.
- *A poco* también anda metido... p. 259	***A poco.*** Acaso, a lo mejor. (Moreno, op. cit 284
- A ver, *barájamelas despacio.* p. 48	***Barajar despacio.*** Explicar de nuevo, con detalle. (***Barajar***, en sentido figurado, tomar rápidamente o comprender (Alonso)
- *Cómo de que no*... p. 58	***Cómo de que no.*** ¿Cómo no? Por supuesto.
- ... a propósito, tiene que venir *mi costilla* con unos regalitos... p. 200	***Costilla.*** Esposa, compañera.
- ... abuso en *hacer cuentas alegres*. p. 244	***Cuentas alegres (hacer).*** Plantear buenas ganancias sin fundamento.
-... hay otros más *chichos,* ... p. 231	***Chicho.*** Valiente, envalentonado. (*Salsa,* var.)
- *Date de santos* que mi carácter sacerdotal no me permite... p. 257	***Darse de santos.*** Dar gracias a Dios.
- *Duro con él*...p. 147	***Duro contra él (duro con él***, var.*)*. Todos contra él.
- Vamos acorralándolo... para *darle* allí su *matarile*... p. 132	***Matarile (dar).*** Matar, de la canción de ronda *"Matarilerilerón",* sic)
-... sacar los productos, que las *mordidas* en el camino... p. 126	***Mordida.*** Soborno. (Lo que se paga por cohechar y eludir una multa, Alonso)
- ... es una nube *ni modo*... p. 28	***Ni modo.*** Expresión de conformismo que significa no hay remedio, nada se puede hacer.
- ... de jijodeún *no me baja.* p. 8	***No bajarlo a uno de...*** Pensar algo de una persona y no cambiar de opinión (*de tonto no me bajas, ¿verdad?,* sic)
- ... *no hay que ser*, hay que jalar parejo, ayudarle. p. 167	***No hay que ser.*** Expresión de misericordia que puede sustituirse por *por favor, por compasión.*

- Pues qué, aquí *¿no hay quien invite un taco?...* p. 196	***¿No hay quien invite un taco?*** ¿Me invitas algo de comer?
-... me gusta entrarle *para luego...* p. 28	***Para luego.*** Inmediatamente. *(Para luego es tarde,* sic).
- ¡Hipócrita! *Pareció la pura verdad...* p. 178	***Parecer la pura verdad.*** Fingir bien, saber ser hipócrita.
- Quédate con tu machorro para que lueguito *le pongas los cuernos...* p. 276	***Poner los cuernos.*** Ser infiel.
- Con el Gobierno hay que estar bien... es como *ponerse con Sansón a las patadas...* p. 45	***Ponerse con Sansón a las patadas.*** Pelar contra alguien más fuerte a sabiendas de que se saldrá perdiendo.
- ... no es posible que nos dejen así no más *como a novias de rancho, vestidas y alborotadas...* P. 301	***Quedarse como novia de rancho, vestida y alborotada.*** Quedarse plantado, ser engañado.
- ... mis amigos, se dieran gusta en *tragar al prójimo...* p. 40	***Tragar al prójimo.*** Criticar al vecino o al colega.
- ... y la familia que es dura dejar pero *uno se pica...* y mientras más hay más quiere... p. 16	***Uno se pica.*** Uno se concentra haciendo algo y se olvida de todo lo demás. (En tauromaquia, Aficionarse el toro a la relación sexual con las vacas o a comer determinadas pasturas, Alonso)
-... su fideicomiso *vale sombrilla...* p. 178	***Valer sombrilla.*** No valer nada.
- *Ya está suave,* al cabo todos vamos en el mismo barco... p. 26	***Ya está (estuvo) suave.*** Ya basta.

Por último, quisiera hacer un comentario sobre una expresión muy popular que, sin embargo, se ha ido recortando. Una de las acepciones de ***hacerse,*** es *fingir.* Por lo tanto, ***no te hagas*** quiere decir *no finjas*. Hasta aquí, la frase es comúnmente usada, pero en ocasiones se complementa diciendo: ***No te hagas que la Virgen te habla***. Fue una sorpresa para mí encontrar en la obra de Yáñez todavía un agregado más: ***No te hagas que la virgen te habla cuando ni siquiera te parpadea,*** que el mismo Yáñez define como un dicho alteño (p. 80).

NOTAS

1. Michael S. Werner, editor. Encyclopedia of Mexico. Fizroy Dearborn Publishers. London. 1992.

2.Richard A. Young. Agustín Yáñez y sus cuentos. Tamesis Books Limited. Londres. 1978. p. 13.

3.Emmanuel Carballo, «Agustín Yáñez». *Homenaje a Agustín Yáñez.* México en la cultura Suplemento del periódico *Novedades,* 12 de abril de 1959. Citado en Young, p. 26.

4.Agustín Yáñez, La tierra pródiga. Fondo de Cultura Económica. México. 1960. p. 160.

5.John S. Brushwood, La novela hispanoamericana del siglo XX. Fondo de Cultura Económica, México. 1993. p. 215.

6.Young, op. cit. p. 21.

7.Álvaro Romo de la Rosa. *"Existe un español mexicano?"* , Academic Bulletin, Kyoto University of Foreign Studies. Vol. XXI. Kyoto, 1980, pp. 123-132.

8.José G. Moreno de Alba. Minucias del Lenguaje. Fondo de Cultura Económica. México, 1992. p. 174.

9.Francisco J. Santamaría. Diccionario de Mejicanismos. 2ª. Ed. Editorial Porrúa, Méjico. 1974.

10. Ibid.

11. Diccionario de la Lengua Española. Vigésima primera edición. Real Academia Española. Madrid, 1992.

12. María Moliner. Diccionario de Uso del Español. Ed. Gredos. Madrid, 1966.

13.Martín Alonso, Enciclopedia del Idioma. Aguilar. Madrid, 1968.

迂言法（tener+過去分詞，llevar+過去分詞）について

橋本 和美

1．はじめに

イスパニア語の迂言法の表現は多様性に富んでいる。そのなかでも結果相の範疇に属する tener+過去分詞（以下，tener 構文），llevar+過去分詞（以下，llevar 構文）を用いる構文は意味の違いが微妙で，従来から「ほとんど同じ」と説明されている。しかし，これだけでは十分納得のいく説明とは言い難いので先行研究を３つ挙げて検討を進めていく。

2．先行研究

下記の資料をもとに両構文を検討していくと，それぞれの特徴及び両者間の相違が明らかになってくる。

- 三好準之助(1995)『中級スペイン文法』（山田・監修）第 19 章[5]・助動詞。
- Gómez Torrego (1988), *Perífrasis verbales.*
- Porroche Ballesteros (1990), *Aspectos de la atribución en español.*

2．1．共通する特徴

まず，先行研究が二つの構文について言及している特徴の中でも，三者が共に触れている特徴を見ていく。（但し，Porroche Ballesteros(1990)は llevar 構文のみ説明し，tener 構文を扱っていない。）

(1)-1　Tengo escritos ya cincuenta folios. (Gómez Torrego, 1988 : 192)[1]

(1)-2　Llevo escritos ya cincuenta folios. (Gómez Torrego, 1988 : 193)

tener 構文について三好(1995)は「動作の完了とその結果の状態」，Gómez Torrego(1988)は「蓄積されてきた動作の完了とその到達点の状態」と説明している。これによると，例文(1)-1 は「1 ページずつ書く作業を続け，ついに 50 ページ書き終えた」となり，両者が説明している内容は同じと理解できる。

llevar構文については，三者とも「tener構文とほどんど同じ」，あるいは「非常に近い意味を表している」としている。さらにGómez Torrego(1988)は「蓄積されてきた動作が完了し，それが今後も継続し，さらに発展していく」，Porroche Ballesteros(1990)は「行為が続くものと仮定して，その途中段階の状態」と述べている。この説に基づくと例文(1)-2は「今までに50ページ書いてきたが，今後も書き続ける」と理解でき，両者は同じ特徴を言及していることになる。

2．2．それ以外の特徴

2．2．1．「動作の反復」と相互置換

三好(1995)はtener構文を上記の「動作の完了とその結果の状態」に加え「動作の反復」を意味すると述べ，llevar構文についてはtener構文と「ほどんど同じ」としている。

(2) Ya te tengo dicho que no salgas con ella.（三好，1995：381）
おまえには彼女と付き合うなと何度も言ってある。

Gómez Torrego (1988)は両構文の相互置換に関して，tener構文が「動作の反復」を表す場合，llevar構文に置き換えることはできないと説明している。よって，例文(2)'は成り立たない。この点から，llevar構文の特徴が「tener構文とほとんど同じ」であるためには何らかの制限を加えるべきだろう。

(2)'* Ya te llevo dicho que no salgas con ella.

しかしGómez Torrego(1988)自身，llevar構文の中にも「動作の反復」ととれる例文(3)のような事例があることを指摘しているため，この説の有効性についてさらに検討を加える必要がある。

(3) Llevo sufrido mucho en estos últimos años.(Gómez Torrego, 1988：193)
わたしはここ数年間，とても苦しんできている。

さらに Gómez Torrego(1988)は tener 構文の特徴として「動作に対する固執」を挙げている。この説に基づいて例文(2)を解釈すると，話し手は「聞き手がその彼女と付き合っている状態」に対して反対意見を述べることに「固執」しているとなる。これは一つの状態への複数回の忠告と考えられるので，三好(1995)の説明する「動作の反復」と同意だと考えられる。

2．2．2．「動作の継続，発展」と相互置換

llevar 構文について，共通の特徴として挙げたとおり，Gómez Torrego(1988)は「蓄積されてきた動作が今後も継続し，さらに発展していく」，また Porroche Ballesteros(1990)は Coseriu(1976)の説を援用し，「行為が続くものと仮定してその途中段階の状態」と述べている。つまり，例文(4)で「遊んでいる」という動作は 20 分間で完了するのではなく，「今後も彼らは遊びつづける」というニュアンスを含んだ一過程となる。Gómez Torrego(1988)は，この場合の相互置換について「動作の継続，発展」を意味しない tener 構文との置き換えはできないと述べている。よって例文(4)'は成り立たない。

(4) Se llevan jugados veinte minutos.(Gómez Torrego, 1988 : 193)
彼らは 20 分間遊んでいる。

(4)'* Se tienen jugados veinte minutos.(Gómez Torrego, 1988 : 193)

2．2．3．期間（tiempo）を表す状況補語

Porroche Ballesteros(1990)は上で挙げた共通の特徴に加え，新たな指摘として llevar 構文は必ず期間(tiempo)を表す状況補語をともなうと言及している。

(5) Ya que no tenía yo amigos ni había recibido visita alguna en los cinco años que llevaba confinado en el sanatorio.(Porroche Ballesteros, 1990 : 111)
保養所に隔離されていた 5 年間は一人の友達もなく，また一度として誰の訪問も受けたことがなかった。

この例文(5)で，Porroche Ballesteros(1990)のいう「途中段階」とは，現

在から見れば過去の出来事に属する保養所の生活において，話者は「その隔離生活がいつまで続くか分からなかった，あるいは今後も続くだろうと仮定していた」という状況と理解できる。期間(tiempo)を表す状況補語は，en los cinco años「５年間」という形で組み込まれている。

また，注意すべき点は上記の例文(1)-2 で llevar に続く過去分詞は直接目的語に性数一致していたのに対し，例文(5)では主語に一致しているということである。つまりこの２つの例文は構文の種類が異なっている。

３．研究の見通し

このように三つの先行研究を考察しただけでも，それぞれに独自の説明があった。以下要約する。

・三好(1995)

tener 構文：「動作の完了とその結果の状態」「動作の反復」

llevar 構文：「tener 構文とほとんど同じ」

・Gómez Torrego(1988)

tener 構文：「蓄積されてきた動作の完了とその到達点の状態」「動作の反復」「動作に対する固執」

llevar 構文：「蓄積されてきた動作の完了が今後も継続しさらに発展していく」

・Porroche Ballesteros(1990)

tener 構文：――――

llevar 構文：「行為が続くものと仮定して、その途中段階の状態」「必ず期間(tiempo)を表す状況補語をともなう」

これらの説明は両構文の相違を十全に捉えていただろうか。表す意味の差が微妙なだけに研究者によって指摘する内容もさまざまであり，今後さらに検討すべき課題がいくつか見出されたと言えよう。

例えば三好(1995)，Gómez Torrego(1988)が指摘する tener 構文の特徴「動作の反復」「動作に対する固執」についてであるが，本来の語彙動詞 tener は「反復」「固執」のいずれも意味しないのに，なぜ迂言法では tener 構文の特徴となっているのであろうか。これらの特徴は文脈を読み込んだ結果，二次的に得られたものであって tener 構文の決定的な特徴とは言い難いかも知

れない。

このような点からも迂言法の〈動詞＋不定形〉構文[2]を分析するとき，その第一構成要素である語彙動詞 (tener, llevar) の本来の意味にまで立ち戻ることも必要ではないだろうか。語彙動詞として用いられるときの特徴を根本から捉え直せば tener, llevar が構文に及ぼす影響を新たな角度から検討できるだろう。また，Porroche Ballesteros(1990)の「llevar 構文は期間(tiempo)をあらわす状況補語をともなう」というような副次的な要素をも視野にいれる必要がある。先行研究はそれぞれ例文を挙げていたが，構文の種類は統一されていなかったので，この点も考慮していくべきだろう。

そして先行研究から得られた見通しや疑問点を検証するためにできるだけ多くの具体的事例をさまざまな分野（文学作品，新聞などの情報誌，戯曲，口語表現など）から収集してみたい。また，その他の結果相を表す構文（haber / ser / estar / ir + 過去分詞，venir a + 不定詞，andar / quedar(se) / continuar / seguir / llevar / traer +過去分詞，acabar / terminar +現在分詞など）[3]のうちでも tener 構文，llevar 構文の頻度はかなり少ない方だという予測は立つ。ではどのような条件下で tener 構文，llevar 構文が実際に用いられるか，言い換えれば私たちがこの二つの構文をより適切に使いこなすにはどのような使用条件に着目するとよいかを多角的に分析すれば，新たな仮説を立てることができるかも知れない。

このように機能性に優れた迂言法のなかでも特に tener 構文，llevar 構文という二つの表現方法にさまざまな角度からアプローチし，最終的には迂言法全体を体系立てるためにまずこの局面をクリアにすることを目標とする。

注

1）この段階で主観的な立場から訳してしまうと今後の展開が難しくなるのでここでは訳を省略した。

2）不定形とは不定詞，現在分詞，過去分詞のこと。『中級スペイン語文法』（山田・監修，1995）p.368 から引用。

3）『中級スペイン語文法』（山田・監修,1995）p.373-p.378 から引用。

参考文献

Harre, Catherine E. (1991) *Tener+past participle*, Routledge, London.

Lorenzo, Emilio (1980) *El español de hoy, lengua en ebullición*, Gredos, Madrid.

Coseriu, Eugenio (1996) *El sistema verbal románico*, Siglo veintiuno editores, Madrid.

Gómez Torrego, Leonardo (1988) *Perífrasis verbales*, Arco, Madrid.

Porroche Ballesteros, Margarita (1990) *Aspectos de la atribución en español*, Libros pórtico, Zaragoza.

Real Academia Española (1991) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa Calpe, Madrid.

会田 由, 長南 実 (1993) 『テーブル式スペイン語便覧』評論社。

山田善郎他 (1995) 『中級スペイン語文法』白水社。

「芝居」※

フアン・デ・サバレタ『祝日の午後』より
高橋博幸（訳）

芝居は夢によく似ている。たぶん眠っている間の退屈しのぎにと自然が夢を見させるのである。大抵の夢はとりとめがなく、中には悪夢もあり、楽しいものがあるとすればそれこそ奇跡で、夢は心を不安にさせる。これとそっくりなのが芝居である。アトランティスとかいう所がある。そこに生まれた者は夢を見ない。彼らには夢という移ろいやすい無為の時間はないが、もっと落ち着いた眠りの時間がある。彼らを私は幸福者と思うし、芝居見物をしないで余暇を過ごす人も幸福と思う。

祝日の日、午後を芝居小屋でつぶそうと考えているものは大慌てで食事をとっている。良い場所を取ろうと気がせいて、おちおち食べていられないのである。芝居小屋に着き、まず考えるのは、どうやって木戸銭を払わずに入るかである。役者たちのまず最初の不幸がこれである。一所懸命務めても僅かの者しか木戸銭を払ってくれない。こういう連中二十人を半額で入れてやっても、他の者が同じように只で入ろうとしなければ、さほどの損にはならないであろう。しかし払わぬ者が一人でもいるということは、他にも大勢いるということである。人は皆自分は特権を与えられるに足る人物だと思い、特権階級に見せたがる。その思いたるや大変なもので、ために木戸銭を払え、払わぬの喧嘩が始まる。喧嘩の結果、たいていは只で入ることになる。木戸銭を払わなくて済むようにと喧嘩した者が、以後金を払って入るなんてまずありえない。とんでもないことだ、楽しんで貰おうと一所懸命の人の汗を只で自分のものにしてしまおうだなんて。木戸銭を払わないのだから大人しくしているかと思うとそうではない。役者が粗末な衣裳を着て出ようものなら、悪口雑言、口笛を雨と降らすのだ。木戸銭を払わずにおいて、一体どうやって役者に立派な衣裳を着ろというのか、この者や同じ類の連中に考えて貰いたいものである。この者たちは、役者が貧乏人だとは、そしてお上が決めた木戸銭を払わぬことは神を冒涜することだとは思わないのだろうか。自分の物を与えて貧しき者を救おうとしないのを上が喜ばないとすれば、貧者の物を自分の物にするのを神が喜ばぬのは言うまでもなかろう。

件の無賃入場の男は芝居小屋（コラール）の中に入り、ベンチ席の係の所へ行く。席を求めるが、「もうございません。」と言われる。しかし、続けて「お求めになった方が来ないかもしれない席が一つございますから、どうかギターが出る迄お待ちくださいまし。それで、もしその時になっても空いているようでしたらそこにお掛け下さいまし。」と係の者が言う。そこでそういうことにする。男はじっと待っているのも何だからと楽屋へ向かう。楽屋で女役者たちが衣裳に着替えているのを見つける。中には寝る時の様に下着だけになっている女もいる。その中の一人、椅子篭に乗ってこなかったのか、付き人に靴を履かせて貰っている女役者の真正面に立つ。こんなこと余程面の皮が厚くなければできることではない。女役者も男に気づいているのではあるが、可哀相に、見ないでとも言えない、というもの人気稼業という職業柄、舞台でその男に野次り倒されたくないからなのだ。たった口笛一つでも、たとえそれが根拠のないものであっても、評判が落ちてしまうものなのである。観客は、自分のことならともかく他人のことなら、自分の判断よりも野次る人間のそれの方が正しいと思うものなのだ。男の視線にじっと耐えて、女役者は靴を履き続けている。舞台では一番厚かましい女も、楽屋では幾分なりと羞じらいを持っているのである。なぜなら、そこでは厚かましさは悪徳であるが、舞台では仕事なのだから。男は女役者から目を離さない。こんなことは魂にとって甚だ危険なものである。蛾は無造作に燈火に近づくが、そのため焼けてしまう。人はこうしたものにいとも易々と気を引かれようとも、焼け焦げないようにすることは並大抵のことではない。こんなことで楽しもうと思う者は肝に銘じておくがよい、ひどい目に合う危険が大きいことを。

例の席が空いているかどうか奥の幕から覗くと、空いている。持ち主はもう来ないものと、行って腰掛ける。坐るのも束の間、その席の持ち主が現われ、退くように言う。坐っている方も自分の席だと言い張り、喧嘩が始まる。この男、大いに楽しもうと出掛けて来たのではなかったのか。楽しむのと喧嘩とどういう関係があるというのか。いやはや楽しみを不愉快にしてしまう乱暴な者がいるとは。坐る席がなければ立っておれば良いではないか、ほんの一寸でも喧嘩をするより三時間の間立っているほうが余程不快ではないものを。それに、坐ったといっても、その席の人が来たらやはり立たなくては、坐っているということ自体その権利を取得したということではないのだから。坐っている席から他人に言われて立つのを皆に

見られてばつが悪いと言うのであれば、自分のではないものを自分のものにするのを見られるのはもっとばつが悪いものである。席を明け渡さないのが、喧嘩もできぬ腰抜けと周囲(まわり)の者に思われないためというのであれば、それは了見違いもいいところ、道理を弁えているのを示す者は実にあっぱれなのだから。来ないものと間違って坐ったのであれば、その間違いはやって来た席の主のせいではない。その席を自分のものするのは誤りを賞でるようなもの。非のある者に報いあれ。自分のではない席に坐っている他の者たちに倣ってその席を横取りするというのであれば、それは狂気の沙汰である、誤りは良き模範とはならないからである。世間一般が間違っているとき、特異さは計りしれぬほど価値があるものである。逆さ鱗の魚がいる。流れに逆らって泳ぐ。他の魚は自分たちに相応しい場所ではなく、水の流れのままに行く。先の魚は水の流れには頓着せず、自分の行きたい所へ行く。この魚はとても美味で、大切な食卓にこれが上るのを見て人は喜ぶことこの上なし。良いことをしようと他の皆とは違う行動をとる人は見る目のある人には感興をもたらす。行ないに間違いがあってはならない人は多数のそれとは対立する処世術を身につける必要がある。

もめ事も話がつく。席の本当の主が折れ、仲裁に入った人たちがくれた席に腰掛けることになって一件落着という具合。男はそれでもまだ収まらぬ様子であるが、暫くしてそれも収まると、今度は女たちの席（マドリードでは女性席(カスエラ)と呼ばれる）へと視線を走らせる。女の品定めをし、一番の別嬪に目をつけ、それとなく秋波を送る。ちょっと、あなた、あなたが芝居小屋(コラール)に見に来たのは女性席(カスエラ)じゃなく、芝居でしょ。まだ芝居が始まらぬというのにもう罪を四つも犯している。これは神の日を厳かに過ごす方法ではない。

こうして四方八方きょろきょろ見ていると、誰か背後からマントを引っ張っているのに気づく。何だろうと振り返ると、場内の売り子である。後ろの観客二人の間に割って入って耳打ちするに、扇で膝を叩いている女が、「あんたの喧嘩っ振りすごく気に入ったわ、ついては、ライムを一ダースおねだりしていいかしら。」と言っているとか。男は女性席(カスエラ)に目を遣り、相手が自分が目をつけた女だと分かると、売り子にお金を払い、そして他に何でも好きなものを注文する様ことづける。ああ、このライム、なんと悪魔の臭いがすることか。売り子が離れて行くや否や、芝居小屋(コラール)の出口で女を待ち受けることにしようと男は考える。すると芝居の始まりが何とも

遅く感じられる。なかなか始まらないのを大声でなじる。立ち見の客たちもそれに呼応して早く始めるよう囃し立てる。

ここで一言申し述べたい。なぜ役者に罵詈雑言を浴びせ掛けるのか。それ位なら、どうして役者が出て来た時に芝居小屋を後にしないのか。どうして芝居を見て無駄に時間を潰すのか。待たされる位でどうして腹を立てるのか。芝居では待たされること位誰しも承知のこと。それが分かっていて不平を並べ立てるのは、ひょっとして物覚えが悪いのか、頭が悪いのか。役者が寝ているのならともかく、役者たちは開始の時刻のずっと前から衣裳を着けているのだ。始まりが遅れているのは、平日の疲れを癒す必要のある客の入りが今一か、あるいは誰かお偉い方のおいでが遅れているからで、その人の不興を買うのを恐れて開演を延ばし、そんな人物よりは本当は楽しませてやらなくてはならない下々の者の怒りを買うのである。

芝居小屋で役者に一体どのように悪口雑言を浴びせるのだろうか。人込みに紛れてである。芝居小屋全体が一つの顔をしているのを知っていて、それをいいことに役者にひどいことを言うのだ。芝居小屋では役者に向かって根も葉もないとんでもないことを言う者も、町なかでは役者に向かってそんなこと口にはしないだろう、しようものなら仕返しされるか、司直に捕えられたりする恐れがある。芝居小屋で役者をいじめるのは理不尽なこと、卑怯なことであるばかりか、まったく恩知らずなことである、というのも王国で働く者の中にあって人々を楽しませようと一番思っているのは役者たちなのだから。芝居の稽古の長いことといったらない、何日もの責め苦である。役者なら誰でも興行初日がうまく行くためとあらば、一年分の食べ物とでも喜んで取り替えることだろう。舞台に出て、自分の役をうまく演じるためなら、どんな苦労も、どんな犠牲も厭いはしまい。必要とあれば、本当にこの世を儚み絶望しているかのように、舞台の山から身を投げもしよう。役者も生身の身体、打ちつければ痛いのに。芝居の中に臨終の場面があれば、その役の役者は高価な衣裳がまるでモロッコ革か何かでできているかのように無頓着に、唾まみれの、泥だらけの、至る所に釘が頭を出し、木がささくれだった舞台の上を転げ回る。逃げながら退場する場面があれば、うまく演じようと全速力で逃げるものだから、安くはない大きな襟飾りを釘に引っ掛けて破いたり、高価な衣裳に鉤裂きをこさえたりする。ある高名な（少し前に亡くなった）女役者は、怒りの場面を演じた折、演技に熱を入れ過ぎた余り、手に持っていたハンカチをびりびり

引き裂いた。そのハンカチは女役者の日当の倍はするものだったのに。それどころか、この演技が気に入ったと見えて、興行中毎日ハンカチを破ったのであった。観客をみんな満足させようと役者たちは一所懸命自分たちの務めをする。不入りだからといって気のない演技にならないよう、こんな日こそ気を入れて芝居をしなくてはね、だってお客さんが来ないのは何も来て下さっているお客さんのせいじゃないのだから、と役者たちが話すのを、客の入りが悪い時だったが、丁度私は楽屋にいて耳にしたほどなのだ。そして芝居を打っても儲けがないことは気に掛けず、少ない客を大いに楽しませようと身を粉にする。これに対し客は役者に感謝すべきである、喜ばそうと一所懸命やってくれているのだから。たとえ役者にひどい仕打ちをして罪がないとしても、感謝しないのは大罪である。

ギターが登場、芝居が始まり、おそらく件の男は向けてはいけない所に注意を向ける。意味深長な、節度をなくさせる、余りに艶しい身振りの女役者とか濡れ場とかに。そうしたものからは目を逸らすのが賢明なのであるが、この男、そうはしない。人相学者が言うには、長い目は身持ちの悪さの印ということだ。目の長さに起因する気質からそう推定しているのである。これが本当かどうか私には分からない。分かっているのは、長い目の人、つまり、何でも奔放に見る人は、魂に良い相を持ち合わせていないということである。放縦に見る者は放縦に欲しがるのである。注意を向けるに何の邪魔だてもない者が欲望を抑えるのは実に難しい。

さて、ここで、芝居を観る人に、芝居小屋に入る前以上に罪深くならぬよう、芝居の見方を伝授して差し上げよう。芝居の元となる出来事の発端を良く理解するよう努めること。そうすれば、その芝居が好きになること請け合い。詩人が巧みにレトリックを操っているか、そして見事に使いこなしているかを見ること。レトリックがうまければ、大いなる喜びを与えてくれるものである。韻文が巧みに作られ、純粋で、重々しいかどうか注意すること。そうなっていれば、喜びと知識を与えてくれるというもの。大抵の者は不注意なばかりに、知識と喜びを失うのである。出来事が新しく、真実らしいかどうか良く見ること。もしそうならば、新しさに大いなる楽しみを見いだし、真迫性に本当らしく仕立てられた嘘を見る喜びを味わうことができる。こういったものが見つからぬ場合でも、それがないと非難する喜びが見つかるというもの、それもまた一興である。

自分たちのずっと先を行っている者が滑って自分たちと一緒になるのを

見ると人は喜ぶ。たとえ芝居に何処か貧弱な所があっても、だからといって芝居が悪いわけではないのである。才ある者の一つの作品のすべての箇所が同じように良いとしても、それで作品全体が良いというわけではない。全体が素晴らしくあるためには何処かが弱くなくてはならない。音楽では、低音部は高音部のような優しさはないが、それがなければ音楽は妙なる音とはなり得ぬ。絵画では、暗部は精彩に欠けるが、これがないと絵の明部の表現力がなくなる。才ある者の作品といえども、所詮人間ゆえに、何処か弱い部分がなければ、技巧の点で劣っていることになる。名声を与える作品の何処かを故意に弱くする勇気のある人間がいないのを見て、自然は嫌でも何処かで弱くなるようにさせたのである。天からやってくるレトリックが偉大な才人を偉大な作品で優位に立たせるのである。天の教えを罪と思ってはいけない。弱いものがあれば、強いものは一層引き立つ。緊張を緩和する所がないと、高邁な演説を再び始める気力がうせるのである。

芝居の言葉に関することについては以上である。今度は演技についてみることにしよう。衣裳によくよく注意すること。衣裳によって役者の役柄は見事になるのである。靴のリボンにも目を瞠るものを見いだすことがよくある。演技が台詞とうまく合っているかよく見ること。演技は台詞以上に役立つものである。役者が台詞まわしを目の動きで補っているかどうか、もしそうなら、目は役者に釘付けになるだろう。踊りには目をくれないこと。誤りの元凶だからである。ほかに、観客が馬鹿馬鹿しいことに拍手喝采するのを見て楽しむもよかろう。楽しむことは沢山ある。こうして興行の時間を過ごせば、無為に過ごしたことにはならないというものだ。上演の三時間を平穏で有益に用いてくれるなら、嬉しい限りである。

人のいない礼拝堂が好きな人なら、そこにどれほどの妙なる喜びが隠されているか言えるであろう。他に人がいないので邪魔されずに神と一緒にいられると思う。神と二人きりなので、理解するだけでじゅうぶんと判断する。神はすべての声に耳を傾けてくれる。理解力の無さゆえ私たち人間は聖なるものを俗なるもので計るのであるが、それだから激しい信仰となりがちなのである。自分の苦境だけを神に聞いてもらいたいと思い、良い機会とばかり、何とかしてくれるよう神に頼もうとする。これ以外に関心事がないので、その考えに一心専念する。梟は一人でいる時は心安らかであるが、他の鳥がいる所へいくと、他の鳥たちがそっとしておいてくれない。ある鳥は梟の目を刳り貫こうとし、またある鳥は背中をつっ突き、身

体をぶつけてくる鳥もいれば、羽根を引っ張る鳥もいる。大勢人がいる教会では、女に目を奪われる、後列の無関心な者たちに平静な心を打ち破られる、不意の物音に祈りを挫かれる、足を踏まれて信仰心もどこへやらとなる。人のいない教会ではこうした邪魔は入らない。目を祭壇へ向ければ、多くの聖人像がある。それを見ていれば、その姿とともに聖人の美徳が鮮やかに描き出される。礼拝堂は劇場と、天の劇場となる。芝居小屋を礼拝堂に取り替えぬ者には、劇場が何たるか良くは分からないのである。

女もまた芝居見物に行くが、女も魂を持つのであれば、これに良き助言を与えるのが良かろう。男たちは祝日、昼を食べてから芝居小屋に出かけるが、女たちは昼食前に出かける。祝日に芝居に行くことになっている女には、普通、芝居見物は一日仕事となる。近くの女と誘い合わせ、有り合わせの物で早い昼食を済ませ、昼食はその夜のためにとっておく。二人はミサに出て、そこから良い席を取ろうと女性席に直行するのである。時間が早くて、まだ木戸番もいない。構わず中に入ると、既に自分たち同様芝居に目のない女たちが水疱瘡のようにあちこちに陣取っている。最前列には一人もいない、というのもそこは芝居を観に行って逆に人から見られることになる場所なのだから。中ほどのまあまあの席に着く。とてもゆったりしているので大いに満足気である。でも、じきにそうもして居られなくなるだろうけれど。何か退屈しのぎになるものはないかと探し始めるが、何も見つからぬ。しかし、慌ただしかった午前中の疲れを休めるのがこの女たちの気晴らしになるのである。だんだん女たちが入ってくる。女性席の欄干の上に坐る厚かましい女もいる。中ほどに坐った女たちは前を遮られる格好になってしまう。ゆったりした気分もとうとう怪しくなり始める。

木戸番が入ってくる。例の二人の内の一人は胴着と輪骨の間からハンカチを取り出し、口にくわえて結び目を解き、一レアル銀貨を出し、十マラベディお釣りをくれる様に言う。その間にもう一人の方は十クアルトの入った、身体で温もった紙包みを胸の間から取り出し、料金を払う。木戸番は前の方へ進んでゆく。十マラベディのお釣りを手にした女はハシバミの実を買い求めると、二クアルト（八マラベディ）で、残った一オチャボ（二マラベディ）をどうしたものか、子供の様に悩んでいる。始末に困ったあげく、「可哀相な人のため」と言いつつ胸の谷間に投げ入れる。二人はハシバミの実をつまみ始めるが、カリカリカリカリ、そのうるさいことと言ったらない。ハシバミはというと、何も入ってないものもあれば、胡椒のよ

うな干涸びた粒しか入ってないもの、嫌な油の臭いのするものもあり、美味しいのはほんの僅かばかり。女たちよ、あなたたちがこれから楽しもうという芝居もそのハシバミの実の様なものなのだ。初めは（芝居、芝居、と）大騒ぎ、それで当の芝居はと言えば、まったくつまらないものもあれば、少しはましなものもあるが、大部分は退屈で、多少なりとも面白いものは極く僅かである。

もう大勢の女連中が入ってきている。前の方にいる女が例の二人組の後ろにいる顔見知りに手招きしている。呼ばれた女は「済みません」も言わず、二人のスカートの裾を踏んづけ、ケープを引っ掛け、二人の間を通り抜ける。踏まれた方は腹いせに、女がこんな時よく使う「まあ、失礼ね」と言う。一人は親指で中指を弾いて踏まれたスカートの埃を払い、もう一人はギターをかき鳴らすように爪の平らな部分を使ってスカートを奇麗にしている。前の手摺りに腰掛けている女たちのところにエンパナダが届けられ、女たちは床に坐って食べ始める。それで件の二人の女にも芝居小屋に来ている男たちの姿が見えるようになる。一方が他方に「第一列のベンチの左手に白髪まじりの男が坐ってるでしょ。あの人すごく誠実な人で、とっても良く家を管理しているの。でも奥さんときたらそれを良いことにろくでもない書生と懇ろになってるのよ。」なんて言っている。

二人の会話を耳にして近くの別の女がこう言う。「他人のことは放っておいたらいいじゃない、私たち女なのよ、神様が忘れてくれるものなら、どんな悪いことだってするものなのよ。」

二人は声を潜め、話し続ける。この一件で何が得られるかと言えば、悪いこと多々ある中でも特に、二人を諫めた女が例の男を見かけると、ともに有り難くない名声であるが、自分の体面には無頓着な、あるいは体面というものには余り恵まれない男と見てしまうことである。そしてこの女もそのことをそこら辺で言い触らすかもしれないということである。人は大抵自分のことは棚に上げて他人に厳しくするものなのである。暫くすると、例の二人のうちの一方がすっ頓狂な声を張り上げる。「まあ、見て、誰其よ、この前までは靴紐の先に金具を付けてた人が、階段席に坐ってるわ。」

言われた方は、少し身を乗りだし、不思議なものでも見るようにその男の方を見る。貧乏人が金持ちになっても別におかしくはない。他人を噂する者は二つのもの、聾人と盲人という身体の不自由な者を傷つける。噂されている人が聾人である、噂が聞こえないから。そして噂をしている者た

ちの前にいる人が盲人、噂されている本人を知らないのだから。本人がそれを聞いたら、それが根も葉もないことだと弁明できるかもしれない。あの靴紐の金具職人だって良い血筋ではないと一体誰が断言できようか。本性はその人を守るのであって、高貴さをではない。窮した貴族がまず保とうとするのは人間の部分である。高貴さと言うと、世間では安楽な暮らしのことを思い浮かべる。靴紐に金具をつける以外に生計を立てる道がなければ、それはそれで別に悪いことではない。暮らしが楽になって、その者は高貴さの方に目を向けたのである。生計が立つようになったことは中傷すべきことではないし、高貴さを望むことは称賛すべきことである。書生と懇ろになっているという女房も、非難されているのを聞いたら、「そうじゃないわ」ときっぱり弁明できるやもしれぬ。良いと思われるものがすべて良い、悪いとされるものがすべて悪い、というものでもないのだ。この幸せな男とその女房を女たちは弁明の機会も与えずに裁いているのである。言い分も聞かずに裁くのは良い法廷とは言えない。それに、二人の話しを聞いている何も知らないもう一人の女を悪しき例によってあの女房と同じ悪徳に、あるいは聞き込んだ噂を広めるという罪に誘っているのである。

女性席（カスエラ）はもう満員だが、木戸番が顔を隠して着飾った四人の女を連れて入ってくる。八クアルト握らされて、何とか席を見つけてやろうというのだ。例の二人の所に来て、もっと詰める様に言う。二人は聞く耳をもたない、木戸番は言い張る、四人の女は金色に光るチュニックをちらちらさせながら二人の方へ割って入る。いい場所が欲しければ早く来たら、と二人は言うが、いつ来ようと私たちには早い時間なの、と四人のうちの一人が嘘ぶいている。どんな女たちなのか神のみぞ知る。結局、二人の上に構わず坐っていく。坐っていた女たちはその下から逃れようと、知らず知らず場所を明けてしまう。文句の応酬があって、何とか落ち着く。時刻はもう二時半をまわった。昼を食べていない女たちのお腹が騒ぎ出す。例の二人も、いま家にいられるのなら喜んでもう十クアルト出すと言うだろう。私としては、皆が絶食して芝居に行ったらどんなに嬉しいことか、そうすれば芝居に欲情をそそる様なものがあっても、それをかき消せようから。木戸番が入れた例の女の一人がジェノバ産のプラムとか卵黄と砂糖で作った菓子とかを例の二人に差し出しながら、「ねえ、仲良くしましょうよ、貰ったお菓子だけど食べてちょうだい。」と言う。

二人は喜んで受け取り、ぱくつき始める。仲直りの印に話をしようと思うが、食べるのに忙しい。この時、女性席の入口で数人の若者が自分たちの連れを只で入らせようとして木戸番ともめ、すったもんだ、女性席になだれ込んでくる。ここでまた混乱と一騒動。女たちはうろたえ立ち上がり、喧嘩に巻き込まれまいとお互い押し合い圧し合い、重なり合って倒れる。喧嘩に夢中の男たちは足元に女が倒れていようがまったくお構いなし。騒ぎを治めよう、女を助けようと平土間から女性席に上ってくる男たちは逃げ場を求める女たちとぶつかり、突き倒す。女たちは隅っこが一番の逃げ場と、ある者は四つん這いになって、ある者は走って避難する。喧嘩している連中をやっとのことで警吏が女性席から連れ出すが、女たちはだれ一人として初めに居た場所には坐れず、今居る場所に適当に坐る。件の女の一人は後ろの方に、もう一人は入口の近くに。一方はマントに鍵裂きをこさえ、手袋が見当たらない。もう一方は喧嘩していた連中の一人の肘が当たって鼻血を出している。血を拭き取りたいのであるがハンカチをなくしたので、ペチコートで拭いている。ここでギターが登場、芝居小屋は静まり返る。女性席の入口の方にいる女は、役者の声は聞こえるが、舞台が見えない。最後尾のベンチにいる女は、役者は見えるのだが、声が聞こえない。つまりどちらとも芝居が観られない、というのも芝居は目なしでは聞けないし、耳なしでは見えないからである。演技が大部分を物語るのであるが、台詞が聞こえなければ、それはパントマイムに過ぎない。

二人にはまだ始まっていないも同然のうちに芝居は終わる。二人は出口で合流するが、一人がもう一人に、「ちょっと待って」と言う、スカートの紐が解けているのだ、結ぼうとして、紐に結わえておいた家の鍵がないのに気づく。悲嘆に暮れ、女性席から出てくる女たちに、鍵を見なかったか尋ね始める。笑う者、何も言わない者、見かけなかったわよと答えて落胆させるのはまだしも良いほうである。皆いなくなり、日も暮れて来て、前の店へ蝋燭を買いに行く。蝋燭を手に探すが、見つからない。芝居小屋の係りが小屋を閉めようと二人を急き立て、女たちは焦る。もう見つからないと諦めかけたとき、連れのほうが向こうの隅っこの方に何か光るのを見る。行って見ると、鍵だ、床の板と板の間に挟まっている。拾って二人は外に出る。蝋燭を消す前にそれを包む紙切れを探す。蝋燭を消し、包み、歩き始める。ああ、何という午後、さぞかし楽しんだことだろう。

豹はとても獰猛な動物であるが、匂いは実に芳しい。離れておればそれ

ほど心地良いものはないが、近づく者に危害を加える。芝居も芝居小屋から女たちの家に何と妙なる香を送ることか。この世には他に娯楽がないみたいだ。芝居小屋に行くがよい、そうすれば分かるというもの、その鉤爪に掛かったが最後、無事には出られないのである。例の女たちがこの馨しき猛獣の手にかかってどうなったか見るがよい。そんなことにはならないと言うかもしれないが、それにはこう答えましょう、はるかにそれ以上のことが多くの女に、それほどでもないことがある女たちに、そして多くのことが誰にでも起きるのだと。この女たちがその神聖な時間を神聖なことに使えば、どれほど多くのことができたことだろうか。字が読めるのなら、聖人の生涯でも読めばよいものを、そこからは良き人生を引き出せるのだから。容易く理解出きるものなのだ。物語の部分が楽しませてくれるし、良き模範の部分が落ち着かせてくれる。神が人間にすることを見て、神の本性が分かる、ひどい災難と見られがちな苦難も物ともせぬ気概が学べる。へつらいの衣をまとった罪を退ける意志が学べる。要するに、目下の関心事である気晴らしができるのである。字が読めぬとあらば、施療院のために使い古しの衣服を探したらどうだろう、神も喜んでくれるというものだ。その午後最初に頭に浮かぶ聖人にお祈りを捧げてはどうか、神がその日を選んだのだと思って、新たな帰依は喜ばしく熱烈であるから、その日を楽しい帰依に使ってはどうか。女たちはこうしたことはいっさいしたがらず、芝居見物に出かけ、さんざんな目に会ったのである。

※　本稿はJuan de Zabaleta: *El día de fiesta por la tarde* の抄訳である。翻訳の底本にはC. クエバス・ガルシアの校訂本（Clásico Castalia, 1983）を用いたが、J.M. Díez Borque の校訂本（Cupsa Editorial, 1977）も参考にした。作者フアン・デ・サバレタおよび『祝日の午後』については、拙論「黄金世紀における娯楽としての芝居見物について――フアン・デ・サバレタ『祝日の午後』にみる」（*REHK*, 第5号, 1997）の中で言及したので、ここでは割愛した。

Angel Gómez-Hortigüela Amillo: *El pensamiento filosófico de Juan Luis Vives* Institució Alfons el Magnànim, Valencia, 1998, 316pp.

安藤真次郎

バレンシア出身のフアン・ルイス・ビーベス（1492－1540）は、エラスムス、トマス・モア、ギョーム・ビュデと並ぶ 16 世紀前半のヨーロッパを代表する人文主義者である。長らく単なる一人の正統派カトリック思想家とみなされてきた彼であるが、1960 年代以降、校訂本の作成をはじめとする文献学的方法に基づく実証的な研究が進められ、今日ではルネサンス期のヨーロッパ思想史に欠くことのできない人物の一人とみなされている。1992 年の生誕 500 周年を機に一気に盛り上がりをみせはじめたビーベス研究は、現在スペイン、ベルギー、アメリカ合衆国を中心に盛んに進められている。

さて、本著『フアン・ルイス・ビーベスの哲学思想』の著者アンヘル・ゴメス＝オルティグエラ氏は、こうした最近のビーベス研究活動を担う新進気鋭の学者である。バレンシアを中心に活躍する彼は、これまでにも既にビーベスに関するモノグラフィーを 2 冊〈*Luis Vives, valenciano, o el compromiso del filósofo* (Valencia, 1991), *Luis Vives, entre líneas.* (Valencia, 1993) 〉上梓しており、前者は 1994 年に『ルイス・ビーベス －哲学者の責務－』(木下 登訳、全国書籍出版)として日本でも翻訳出版されている。ゴメス＝オルティグエラ氏にとって 3 作目にあたる本著は、氏の学位論文(1996 年ナバラ大学)に加筆訂正後出版されたものであるが、これまでの 2 作に比べ、ビーベスの哲学思想の分析により重点が置かれているといえよう。

本書は全 5 章からなっており、第 1 章から第 4 章まではビーベスの人格と思想の形成に大きな影響を与えたと考えられる外的要因の考察に充てられている。第 1 章ではビーベスが改宗ユダヤ系の家庭に生まれたことにより被った影響について、第 2 章では少年時代を過したバレンシアという街の文化的社会的環境について、第 3 章では後年ビーベスが批判することになる 16 世紀初頭のパリ大学のスコラ学に支配された保守的な知的雰囲気について、そして第 4 章ではエラスムス、トマス・モアをはじめとする人文主義者たちとの交流についてである。

本書の核心をなしている第 5 章では、著者はビーベスの代表作の一つである『学問論』(1531) の第 3 巻「学芸論」に収められている作品「第一哲学」お

よび「本質解明論」の分析を中心に、ビーベス哲学の本質（それは倫理学であると、著者はみなす）に迫っている。

ビーベス哲学の根本概念とは、「この世に存在するすべてのものは、それが神により創造された本来の目的を知り、その目的を達成することによってはじめて完成される。そしてそれぞれの存在の本質とはその活動の中に現れるものである」ということである。では、我々人間が創造された目的は何であり、その目的を達成するために何を為すべきであるか。ビーベスによれば、人間の最終目的は、「万物の創造主である神を知り愛すること」（ここでいわれる神とはキリスト教の神である）である。そのためには教育を受け無知を克服し、この世と神についての知識を得ていくと同時に、徳をも身につけていかなければならない。なぜなら、無知こそが情念の乱れを引き起こし、人間を戦争などの愚行に向かわせるからである。真の教育とは、知識偏重に陥ることのない徳を備えた人間を育成することである。そして人間の最終目的である「神を知り愛すること」への道とは、徳の実践を通して社会の共通善のために奉仕することである。

このような倫理思想とともに、ゴメス＝オルティグエラ氏がビーベスを高く評価しているもう一つの点は、彼の人間性の中に、そして実生活の行動の中にその思想が実際に体現されているということである。ビーベスによれば、各存在の本質はその行動によって現れるのであるから、真に徳を備えた人間の行動とは社会利益のために尽すことである。著者は本書の中で、ビーベスの生涯の探求と作品が成立した背景の考察に多くのページを充てているが、それは実際にビーベスが、いかに真剣にその時代の抱えていた問題に取り組んでいたかを我々に示すためである。

ビーベスはユダヤ系の出身であったため、両親をはじめとする親族の多くが異端審問により処刑されている。17 歳にして故国バレンシアを後にした彼は、48 歳でその生涯をブリュージュで終えるまで二度と故郷の地を踏むことはなかった。彼の生涯は、病弱な体質と恒久的な貧しさ、そして多くの逆境に常にさいなまれていた。このような境遇にも関わらず、古代の知恵とキリスト教の光に導かれ、人文主義的教養を身につけた彼は、徳の進歩を促す多くの著作を残したのみならず、当時のヨーロッパが戦乱状態であったことを嘆き、戦争の空しさと平和の尊さを説いた書物を、カール 5 世やヘンリー8 世らに直接捧げたのである。ビーベスは哲学者として、そして何よりも一人の人間として社会的責務を果たそうとしたのである。思い返してみれば、ビーベスがパリ大学のスコラ学者たちを痛烈に批判した最大の根拠は、彼らが日常的な出来事から離れ、研究室に閉じこもり抽象的な概念の思索にふけって、哲学者としての社会的責務を怠っていたということであった。

このようにゴメス＝オルティグエラ氏は、倫理学的側面に重きを置いたビーベスの哲学思想を、ルネサンスという激動の時代の社会的文化的コンテクストの中に当てはめながら綿密に分析している。氏のビーベス研究に対する最大の功績は、これまで本格的に扱われることの少なかった哲学者としての側面をクローズアップし、彼の思想と行動の一致をより明らかに示したことではないだろうか。

ソフィー・D・コウ / マイケル・D・コウ著『チョコレートの歴史』

樋口幸子訳　河出書房新社　1999年　395pp.＋図版

立岩　礼子

本書は，食物史家ソフィー・コウとメソアメリカ古代史の著名な人類学者マイケル・コウが1996年にロンドンで上梓した *The True History of Chocolate* の邦訳である。後者の『マヤ』（学生社，1975年）を読んだ人も多いだろう。

原題 *The True History of Chocolate* は，メキシコ征服を綴ったベルナル・ディアス・デル・カスティーリョ著『ヌエバ・エスパーニャ征服の真実の歴史 *La historia verdadera de la conquista de la Nueva España*』にちなんで付けられており（p. 12），新大陸の歴史に精通する著者，コウ夫妻の意図は明らかである。

本書は，紀元前1500年頃にメソアメリカで行われていたカカオ栽培が，今世紀に入ってチョコレート産業として確立するまでの歴史を年代順に考察している。その出発点にあたる第一章「神々食物の木」では，主としてカカオの栄養分や生育環境について植物学的見地から丹念に分析が行われている。第二章「カカオの誕生－オルメカ＝マヤ時代－」及び第三章「アステカ族－五番目の太陽の民－」では，ミヘ＝ソケ語の「カカオ」という言葉，遺跡からの出土品，マヤやアステカの絵文書，スペイン人宣教師が残した年代記などを手がかりに，先スペイン期におけるカカオやそれから作られる飲料としてのチョコレートの重要性が検証されている。カカオは通貨として使用されたほか，儀礼にも用いられた。チョコレートをマヤ人は熱して飲み，アステカ人は冷やして飲んでいたという事実は興味深い。アステカでは，王侯貴族をはじめ，長距離交易人，戦士などの特権階級だけが飲むことを許されていたが，その後も20世紀に入るまで，チョコレートは庶民には手の届かない高級嗜好品として世界に広まっていく。第４章「出会いと変容」及び第５章「チョコレートのヨーロッパ征服」では，スペイン人征服者や入植者によるチョコレートの消費，そしてヨーロッパへの輸出とその需要について論じられている。当時は、チョコレートを沸かし，攪拌棒「モリニーリョ」で泡立て，蔗糖の甘味を加えて専用の陶製茶器セットで味わったことが紹介されている。輸出に都合よいようにチョコレートを板状にすることが考案されたのもこの時期だという。一方，第６章「カカオ産地の変遷」では，スペイン及びポル

トガルの植民地におけるカカオ栽培とアフリカ奴隷の導入過程が述べられ，いわゆる三角貿易の仕組みが説明されている。19世紀に入るとチョコレートの消費はスペイン，イタリア，フランス，イギリスで定着し，コーヒーや紅茶と並ぶ嗜好品として好まれるようになった。当時の様子については第７章「理性と狂気の時代のチョコレート」にまとめられている。第８章「大衆のためのチョコレート」では，オランダにおける粉末チョコレート（いわゆる「ココア」）の生産を契機に，イギリスでは産業革命の波に乗って菓子としてのチョコレートの商品化が進み，スイスではミルク・チョコレートが製造された。そして，アメリカではミルトン・スネイブリー・ハーシーがペンシルバニア州の工場で大量生産を開始し，キューバにまで工場を拡大し，「チョコレート業界のヘンリー・フォード」と呼ばれるほどの成功を収めることになった。チョコレートの真実の歴史は、こうして明らかにされる。

本書の魅力は，単なる食物や料理の文化史としてチョコレートの起源や医学的効能，世界市場における需要と供給及び消費と生産の変遷を捉えるのではなく，旧世界と新世界の文化の融合，そして産業社会への転換という大きな世界史の流れに沿って鮮やかに映し出されている点にある。論じ足りなかったと思われる点を強いて挙げるならば，カカオ栽培によってもたらされた旧植民地のモノカルチャー経済の形成とその結果という20世紀における経済繁栄の陰にあたる歴史であろうか。

もう一つの魅力は，随所にちりばめられた貴重な資料の数々である。本書には注も参考文献リストも付されていないが，引用した資料については本文中にて丁寧に解説されている。マヤ文明におけるカカオの重要性については，聖典『ポポル・ブフ』のほか，ドレスデン絵文書やマドリード絵文書をはじめ，ワシントンＤ．Ｃ．のダンバートン・オウクス・コレクション所蔵のカカオ神の像（p. 59）やプリンストン大学所蔵のチョコレートを泡立てる作業が描かれた壺（p. 66）に言及して説明している。アステカ文明の場合は，フィレンツェ絵文書（p. 105）やメンドサ絵文書（p. 114）のみならず，トゥデラ絵文書（p. 123），ヌッタル絵文書（p. 133），フェイエルヴァーリ＝マイヤ絵文書（p. 141）に加え，テスココの王ナサワルコヨトルの詩（pp. 144-145）も引用されている。また，新世界の情報は，ジローラモ・ベンゾーニ著『新世界の歴史 *La historia del mundo nuovo* 』（15世紀），エルナン・コルテス著『報告書翰 *Cartas de relación*』（1519年～1526年），ベルナル・ディアス・デル・カスティーリョ著『ヌエバ・エスパーニャ征服の真実の歴史 *La*

historia verdadera de la conquista de la Nueva España』(1572年)，フランシスコ・エルナンデス著『ヌエバ・エスパーニャ自然誌 *Historia natural de Nueva España*』(1576年)，ホセ・デ・アコスタ著『新大陸自然文化誌 *Historia natural y moral de las Indias*』(1590年)，トーマス・ゲイジ著『英国領アメリカまたは東インド諸島に関する新情報 *The English-American or a New Survey of the West Indies*』(1648年)，ジェメリ・カレーリ著『世界一周 *Giro del mondo*』(1700年) から抽出されている。さらに，異端審問の記録，貴族の私信，チョコレートを味わう場面が描かれている芸術作品の数々が，ヨーロッパにおいてチョコレートが浸透していった様子を生き生きと伝えている。また，ハーシー社の「キス・チョコ」製造中の写真（p. 359）は，その一枚で20世紀の大量生産化を雄弁に物語っている。本書巻末に付された図版の出典・所蔵一覧は是非参照しておきたい。

最後に，邦訳について触れたい。わずかではあるが，イスパノアメリカ史に少なからずたずさわっている者には納得いかない訳語や表記が見受けられた。まず，先住民インディオを一貫して「インディアン」と訳されている。ヌエバ・エスパーニャ初代副王は，「初代総督」（p. 139）となっている。また，スペインの新大陸進出が舞台であるにもかかわらず，皇帝「カルル五世」（p. 184）とは奇異に映る。ラテンアメリカに関する事典や概説書は日本人研究者によって少なからず充実してきた昨今，おおよそのことは十分に確認できるだけに大変残念である。

しかしながら，本書はややもすれば専門用語やカタカナ表記が多くなりがちな内容であるにもかかわらず，平易な日本語で大変読みやすく仕上げられている。例えば，チョコレートの語源の説明（pp. 161-168）は音の表記などには全く違和感がない。全体を通して整然とした日本語に訳されている点は強調しておきたい。

新大陸から旧大陸にわたり，資本主義経済の世界市場に組み込まれた産品はチョコレートをはじめ，香辛料，コーヒー，砂糖，トウモロコシ，じゃがいも，カボチャ，トマトなど数多くある。本書は，私たちの毎日の食卓を彩る食材の一つ一つに壮大な歴史が秘められていることをあらためて教えてくれる好著と言えよう。

スペイン関係文献目録
（１９９８—１９９９年）

坂東省次

歴史

浅香武和　「ペロ・ディエスの九州見聞記について」イスパニア図書　第２号，１９９９．

浅見雅一　「（書評）岸野久著『ザビエルと日本』史学雑誌１０８（９），１９９９．

足立　孝　「９・１０世紀アラゴン地方の農業構造ー地域的類型化の試みー」史学雑誌　１０７（３），１９８８．

飯塚　深　「ファシズム体制の崩壊と民主化過程ースペイン・ポルトガル両国を事例として」北陸法学　１９９８．

ウェーラン他解説（高田ゆみ子訳）『ロバート・キャパースペイン内戦』岩波書店　２０００．

五十嵐一成　「フェリーペ２世とその時代像の再構築のために一没後４００周年を記念してー」札幌大学「経済と経営」２９（４），１９９９．

五十嵐一成　「諸田　實『フッガー家の時代』有斐閣　１９９８．

池田　実　「スペイン立憲主義の曙ー1808年のバイヨンヌ憲法」社会科学討究　４４（２），１９９９．

石原保徳　『世界史への道ーヨーロッパ的世界史像再考』丸善ライブラリー　１９９９．

市川秋子　「ジュアン・マラガイー世紀末スペインに届いたカタルーニャの声ー」スペイン現代史　１２，１９９９．

島田雅彦　「フランシスコ・X（1）」群像　1月号　２０００．

稲田真　「米西戦争とドイツーカロリン諸島・マリアナ諸島に関連して」法研論集（早大）８６，１９９８．

岩尾龍太郎　「浮遊する食人種記号ーコロンブス『日誌』を読むー」思想　3月号１９９９．

上間　篤　「中世アル・アンダルシアにおけるユダヤ系住民の社会的地位について」名桜大学紀要　4，１９９８．

牛島/ 川成/ 坂東編『スペイン学を学ぶ人のために』世界思想社　１９９

9.
越前喜六　「書評『ザビエル』（尾原悟著）」イスパニア図書　2．1999.
遠藤美純　「スペイン・フランコ体制下におけるカタルーニャ・ナショナリズムの再生ーカタルーニャ社会の変容と民族運動の諸?」創価大・院紀要　20，1999.
逢坂　剛　『イベリアの雷鳥』講談社　1999.
大住広人　『ザビエルとヤジロウの旅』葦書房　1999.
大泉光一　『支倉六右衛門常長ー慶長遣欧使節を巡る学際的研究ー』文眞堂　1998.
大泉光一　『支倉常長ー慶長遣欧使節の悲劇』中公新書　1999.
太田尚樹　『ヨーロッパに消えたサムライたち』角川書店　1999.
奥野良知　「毛から綿へーカタルーニャ農村部への綿業の拡大に関するー考察（1779－1806年）」スペイン史研究　12，1999.
岡住正彦　「アンダルシア主義者ブラス・インファンテ（1885－1936年）の思索ー『民族自決』の原理批判から『文化の原理』の提唱」」北九州大学外国語紀要　91，1998.
岡村　一　「中世地中海世界と馬ー11～12世紀のイベリア半島を中心に」熊本学園大学文学言語学論集　6（2），1999.
荻野　恵　「17世紀スペインにおけるジャーナリズムの萌芽ーカタルーニャ反乱期の『ガセータ』をめぐる一考察」スペイン史研究　12，1998.
狩野美智子　「バスクにおけるスペイン内戦 I」スペイン現代史　12，1999.
梶田純子　「バスクの家名考ー苗字の生成と屋号的「家（カセリオ）の名」についてー」スペイン現代史　12，1999.
川成　洋　「キム・フィルビーのスペイン内戦」イスパニア図書　1，1998.
川成　洋　「スペイン・バスクにおける「エウスカルドゥナク」と「エルダルドゥナク」の固定的な定義について」水之江有一編　『多言語文化のディスクールー民衆文化と社会と芸術』多賀出版　1999.
川成　洋　「スペイン内戦とイギリス人の反応」法政大学教養部紀要109号人文科学編　1999.

川成　洋　「フランシスコ・フランコ伝ーヒトラーを切歯　腕させた男」『シリーズ２０世紀の記憶　第三帝国の野望１９３０－１９３９』毎日新聞社　１９９９.
川成　洋　「フランコ体制下、日本の将校を巻き込んだ英独の諜報戦」中央公論　１９９９.
川成　洋　「スペインを舞台にした日米スパイ戦顛末」『太平洋戦争』毎日新聞社　１９９９.
川成　洋　「スペイン内戦期における日本の外交」イスパニア図書　第２号　１９９９.
岸野　久　『ザビエルと日本』吉川弘文館　１９９８.
北原　仁　「ヘイビアス・コーパスとマニフェスタシオン- スペインの１９７８年憲法における身体の自由」駿河台法学　１１（２），１９９８.
楠　貞義／ラモン・タマメス／戸門一衛／深澤安博　『スペイン現代史』大修館書店　１９９９.
リシュアン・ケーレン（杉山正樹訳）『遙かなるサマルカンド』原書房　１９９８.
小林一宏　「中世イベリアにおける民俗の共存」蟻山道雄／中村雅治編著『新しいヨーロッパ像を求めて』同文館　１９９９.
フィリップ・コンラ　『レコンキスタの歴史』白水社　２０００.
坂本　宏　「トレドのアルンブラード裁判(1524-40年）ー異端審問記録の解読ー」スペイン史研究　１２，１９９８.
サン・フェリーペ号浦戸漂着４００年実行委員会　『運命の船サン・フェリーペ号』南の風社　１９９８.
白石喜宣　『宣教師ザビエルの夢ーユダヤ・キリスト教の伝統と日本』光言社　１９９９.
関　哲行／立石博高編訳者　『大航海の時代ースペインと新大陸ー』同文館　１９９８.
関　哲行　「中世のサンティアゴ巡礼と民衆信仰」歴史学研究会編　『巡礼と民衆信仰』青木書店　１９９９.
関　哲行　「『スペインの歴史』」イスパニア図書　２，１９９９.
高橋陸郎　『日本二十六聖人殉教者への連禱』すえもりブックス　１９９９.

滝澤修身　「コルテスの起源をめぐる研究史観ーカスティーリャ・レオン王国を中心に」立命館文学　５５８，　１９９９．
武田秀司　「日本・スペイン交流史」北海道高等学校教育研究会研究紀要　３２，３３，３４．
立石博高　「近世バルセローナー地中海と疫病」歴史学研究会編『ネットワークのなかの地中海』青木書店　１９９９．
ロバート・Ｓ・デソウィッシ　『コロンブスが持ち帰った病』翔泳社　１９９９．
中塚次郎　「地中海的規範とアンダルシーアの農民運動」歴史学研究会編『社会的結合と民衆運動』青木書店　１９９９．
中川和彦　「カトリック両王の時代とその法」成城法学　５７．１９９８．
中本　香　「18世紀セゴビア市における毛織物業の発展と限界」スペイン史研究　１２，１９９９．
永川玲二　『アンダルシーア風土記』岩波書店　１９９９．
西崎文子　「スペイン内戦とアメリカ」アメリカンスタディーズ（東大）　３，１９９８．
西田耕三　『セバスティアン・ビスカイノ金銀島探検記』耕風社　１９９８．
林　邦夫　「中世スペインのマイノリティ　ムデハル」『世界歴史８』岩波書店　１９９８．
藤田一成　「ユステ修道院におけるカルロス五世（４）」人文研究　１３６，１９９９．
藤田一成　『カルロス皇帝の悲劇』平凡社　１９９９．
松永伍一　「巻頭言　ザビエル城からの視点」イスパニア図書　第２号　１９９９．
三輪公忠　「特別講演　米西戦争（１８９８）－世界史の転換点」イベロアメリカ研究　１９９９．
諸田　實　『フッガー家の時代』有斐閣　１９９９．
山岡三治/ 岸野久/ 木崎さと子/ 尾原悟/ ジョセ・アルバレス　「ザビエルの人となり（ シンポジウム）」ソフィア　１８９，１９９９．
山野貞夫　「書評『天正遣欧使節』（ 松田毅一著）」イスパニア図書　２，１９９９．
横田正顕　「スペイン・ポルトガル」「現代用語の基礎知識」特別編集

『国際情勢ベーシックシリーズ　6　ＥＵ諸国』自由国民社　１９９９.

渡邊千秋　「スペインにおけるカトリック運動（１９２０－１９３０年）」現代史研究　４４，１９９８.

Todd Jay Leonard, "Spain as Friend to Jews Before and during World War II: An Analysis of Documents Involving Memoranda and Case Studies from the Spanish Ministry of Foreign Affairs"弘前学院大学・短期大学紀要　３４，１９９８.

文学

浅香武和　「日本に紹介されたガリシア文学」ＰＩＮＵＳ　３０，１９９８.

アベリャネーダ（岩根圀和訳）『贋作ドン・キホーテ』（上・下）ちくま文庫　１９９９.

伊藤ゆかり　「書評『ブニュエル、ロルカ、ダリ：果てしなき謎』イスパニア図書　1，１９９８.

稲本健二 "La rima en las obras de Cervantes-hacia una clasificación cronológica de sus comedias-" 言語文化　１（２），１９９８.

稲本健二　「ダマソ・アロンソを偲ぶ－９８年をふり返って」ユリイカ　１９９９年１月号

稲本健二 "Dos hojas consideradas como autógrafas de Lope de Vega" 言語文化（同志社大学）２（１），１９９９.

岩根圀和　「アベリャネーダ作『ドン・キホーテ』」イスパニア図書　創刊号　１９９８.

牛島信明　「解釈としての翻訳」イスパニア図書　2，１９９９.

岡田春馬　「ヘミングウエイの「密告」における私の作品解釈－スペイン内乱時における狂気対正気を中心として」帝京大学文学部紀要　英語英文学・外国語外国文学　３０，１９９９.

岡村　一　「『平家物語』と『わがシッドの歌』－戦士の名誉の比較－（上）（下）」熊本学園大学文学・言語学論集　６（１），６（２）；１９９９.

小川英晴　「ガルシーア・ロルカの詩とポエジー」イスパニア図書　2，１９９９.

興津憲作編訳『イスパニア現代詩選』彩流社　１９９９.
荻野雅司　「産業スペイン語における英語の影響」駒澤大学外国語学部論集　１９９８.
片倉充造　「書評　『セルバンテスまたは読みの批判』」イスパニア図書　創刊号　１９９８.
片倉充造　「書評『新訳ドン・キホーテ』イスパニア図書　２，１９９９.
加藤隆浩　「ロルカ作品における「月」」イスパニア図書　２，１９９９.
川成　洋「「セルバンテス文庫」を訪ねて」図書　６月号　１９９９.
木原太源「La Celestinaにまつわる想い出」イスパニア図書　２，１９９９.
桑原真夫　『ロサリア・デ・カストロという詩人』沖積舎　１９９９.
フアン・ゴイティソロ（山道佳子訳）『嵐の中のアルジェリア』みすず書房　１９９９.
米井力也　『キリシタンの文学ー殉教をうながす声』平凡社　１９９８.
ルイス・デ・ゴンゴラ（吉田彩子訳・評釈）『孤独』筑摩書房　１９９８.
近藤　豊　「異界の旅人ガルシア・ロルカ　生誕100 年への鎮魂歌」イスパニア図書　創刊号　１９９８.
ペドロ・シモン(木下登・立岩礼子訳）「ガブリエル・ガルシア= マルケスの小説における< 神父> あるいは< 司教> についての研究」アカデミア　文学・語学編　６４，１９９８.
杉浦　勉　「新世紀の『ラ・セレスティーナ』のために」イスパニア図書　２，１９９９.
鈴木正士　「閉じられたテキスト『ドン・キホーテ』ー『贋作ドン・キホーテ続編』の導入を中心にしてー」ＨＩＳＰＡＮＩＣＡ　４２，１９９８.
カミロ・ホセ・セラ（野々山真輝帆監訳）『アンダルシア紀行』彩流社　１９９９.
セルバンテス(牛島信明訳）『新訳　ドン・キホーテ前・後』岩波書店　１９９９.
世路蛮太郎　「書評　『贋作　ドン・キホーテ』『丸かじりドン・キホーテ』」イスパニア図書　創刊号　１９９８.
世路蛮太郎　「書評『ラ・ガラテア/ パルナソ山への旅』(セルバンテス著）」イスパニア図書　２，１９９９.

武部修子　「ロルカのドゥエンデ論」京都外国語大学研究論叢　５２，１９９８.
中村美子　「寛容と共生に向かって－デリーベスから捉えた内戦－」人文研究　１３７，１９９９.
Makiyama Hironobu, "Mentalidad conversa en Mateo Alemán", HISPANICA ４３，１９９９.
パコ・ビナテア（加納珠美訳）『使者の血統』人間社　１９９９.
Carmen Pavón "El diario como técnica narrativa en la novelística de Delibes"アカデミア　文学・語学編　６４，１９９９.
Carmen Pavón "La realidad de Castilla en las obras de Delibes-¿Una herencia del　９８?"アカデミア　文学・語学編　６６，１９９９.
Carmen Pavón "El último Delibes"アカデミア　文学・語学編　６７，１９９９.
Caferino Puebla Pedrosa ""Tiempo de silencio": realismo dialéctico y crítica histórico-social", HISPANICA　４３，１９９９.
Caferino Puebla Pedrosa "Incertidumbre vital y relativismo de "La Colmena"" HISPANICA　４２，１９９８.
Enrique Balmaseda "Teoría y práctica del comentario de textos en la enseñanza de la lengua y cultura españolas para extranjeros(En torno al tópico<<la malcasada>>" 京都外国語大学研究論叢　５２，１９９８.
日夏　隆　"Lorca: Poet in New York" 阪南論集　３３（３），１９９８.
パコ・ビナテア（加納珠美訳）『使者の血統』人間社　１９９９.
藤野雅子　「西訳　縮編本『Japanese Fairy Tale Series』」HISPANICA ４３，１９９９.
マリア・ヘスス・プラダ＝イ・ヴィセンテ　「西洋文学の誕生－スペインを中心に」福岡大学人文論叢　３１（１），１９９９.
Ｖ・Ｓ・プリチェット（富士川義之訳）「素晴らしいお伽噺－ナボコフドン・キホーテ講義』」みすず　４５３、１９９８.
マリア・ヘスス　「西洋文学史におけるスペイン文学の位置」福岡大学人文論叢　３１（２），１９９９.
本田誠二　「詩人としてのセルバンテス」イスパニア図書　創刊号　１９９８.

牧山裕信 "Postura religiosa de Mateo Alemán" HISPANICA 42, 1998.

宮崎和夫 「フェリペ4世期の宮廷社会の諸問題ーその政治的機能から見た研究動向を中心に」スペイン史研究 13, 1999.

宮田明人 「『ドン・キホーテ』から" セルバンテスの時代" を考える」神奈川大学付属中・高等学校研究紀要 13, 1999.

山崎信三 「『ドン・キホーテ』のことわざ(A-B)」イスパニア図書 創刊号 1998.

山崎信三 「『ドン・キホーテ』のことわざ(C-D)」イスパニア図書 2, 1999.

山崎信三 「ロルカ「哀しみのロマンセ」[対訳]」イスパニア図書 2, 1999.

沼野充義評「書評 「新訳 ドン・キホーテ 前篇・後篇」毎日新聞 11月18日、1999.

語学

浅香武和 「ガリシア語の言語政策」国際関係学研究(津田塾大学) 24, 1998.

阿部三男 「スペイン語における音位転換の諸相」スペイン語学研究 13, 1998.

石崎優子 「現代スペイン語の使役構文Hacer+InfinitivoにおけるAcusativoとDativoについて」スペイン語学研究14, 1999.

石橋優子 「"Se"による無人称構文の解釈」HISPANICA 43, 1999.

上田博人 「スペイン語の与格接語と間接補語(上・下)」スペイン語学研究 13, 1998; 14, 1999.

上田博人 「日本語の授与補助動詞とスペイン語の与格接語 対照研究と資料」『日本語とスペイン語との対照研究ー動詞とその周辺ー中間報告』国立国語研究所日本語教育センター・第二研究室 1998.

太田強正 「Glosas Silenses」人文研究 137, 1999.

大森洋子 「スペイン語総称表現に関する一考察」専修経営学論集 1999.

荻野権司 「産業スペイン語における英語の影響」駒沢大学外国語学部論集 47, 1998.

落合左枝　「不定詞を伴うCREER の用法について－名詞節を伴う用法との比較－」スペイン語学研究　１３，１９９８．
落合左枝　「理由節を導く"COMO"について」スペイン語学研究　１４，１９９９．
落合左枝　「Creer とpensarの意味の違いについて」スペイン語学研究　１２，　１９９８．
川上茂信　「相互再帰を考える」スペイン語学研究　１４，１９９９．
木村琢也　「強勢の付与とその実現－「偽アクセント」から学べること」HISPANICA ４１，１９９８．
栗林ゆき絵　「指示性について－時間表現を中心に－」スペイン語学研究　１３，１９９８．
栗林ゆき絵　「自然言語処理からみたスペイン語における機能語」スペイン語学研究　１４，１９９９．
栗林ゆき絵　「限定詞類と数量詞類の品詞分類について－構文分析システムを利用して－」HISPANICA ４３，１９９９．
小池和良　「前置詞＜ｃｏｍｏ＞の諸機能」語学研究（拓殖大学）８９，１９９８．
佐藤邦彦　「スペイン語の無生物主語文におけるメトニミー」HISPANICA ４３，１９９９．
渋下　賢　「カタルーニャの言語正常化と移民の統合問題」スペイン史研究　１２，１９９８．
寿里順平　『会話で覚えるスペイン語９９９』東洋書店　１９９９．
鈴木恵美子　「スペイン語の現在完了と単純過去の機能分担の歴史」スペイン語学研究　１４，１９９９．
高垣敏博　「自動詞派生の過去分詞について」HISPANICA ４２，１９９８．
高垣敏博　「スペイン語の過去分詞構文」言語研究（東京外国語大学）８，１９９８．
高垣敏博　「結果状態を表す受動文について－テイル受動文とestar 受動文－」『日本語とスペイン語との対照研究－動詞とその周辺－中間報告』国立国語研究所日本語教育センター・第二研究室　１９９８．
高橋覚二　『スペイン語表現ハンドブック』白水社　１９９８．
高松英樹　「空所化及び動詞句削除に関する一考察」スペイン語学研究　１３，１９９８．

高松英樹　「焦点に付加される意味について－その構造とバリエーション」スペイン語学　１４，１９９９．
辻井宗明　「Hube cantadoは迂言形式か時制形式か－中世スペイン散文における分析」関西外国語大学論集　１９９９．
出口厚美　「言語研究におけるスペイン語テキスト処理にウィンドウズ９５の場合」大阪外国語大学論集　１９，１９９９．
寺崎英樹　「ゼロ接美辞か逆成か－スペイン語の動詞派生名詞」東京外国語大学論集　１９９８．
寺崎英樹　『スペイン語学入門』大学書林　１９９８．
寺崎英樹/ 山崎信三/ 近藤豊編　『スペイン語の世界』世界思想社　１９９９．
Nakai Kuniyoshi "Las llamadas "comparativas relativas" y la selección de ～que"HISPANICA ４３，１９９９．
中岡省治　「中世スペイン語の直説法未来と過去未来分析形について」Estudios Hispánicos　１９９９．
新田　増　「スペイン語発祥の地を訪ねて（その１）」イスパニア図書創刊号　１９９８．
原　誠　「スペイン語創出文法によるセミコロンの処理法」HISPANICA ４２，１９９８．
原　誠　「スペイン語創出文法理論の体系化」HISPANICA ４３，１９９９．
福嶌教隆　「スペイン語の叙法に関する最近の研究動向」『日本語とスペイン語との対照研究－動詞とその周辺－中間報告』国立国語研究所日本語教育センター・第二研究室　１９９８．
堀田英夫　「スペインのスペイン語方言について－DIALECTOは「方言」か？」愛知県立大学外国語学部２９言語・文学編１９９９．
E・マルティネル／F．マルティネル／M．J．ヘラベール／M．エレーラ(原誠/ 江藤一郎訳) 『スペイン語会話表現事典』三修社　１９９８．
三木一郎　「スペイン語の"Oración" の機能別分類に関する考察(上) 」京都外国語大学論叢 1999.
峯　博子　「スペイン語使役動詞の用法の歴史的変化－不定詞補文主語の明示について」スペイン語学研究　１３，１９９８．

柳沢　豊　『文法が一目で分かる口語スペイン語辞典』国際語学社　１９９９.
山村ひろみ　「imperfecto de cortesia y modestia について」HISPANICA　４２，１９９８.
山村ひろみ　「スペイン語のimperfectoと時間的限定性」言語文化論究　１９９９.
山村ひろみ　「Smith(1991) のアスペクト理論とスペイン語のpretérito 」独仏文学研究　１９９９.
Antonio Ruiz Tinoco "El correo electrónico y la enseñanza del español"上智大学外国語学部　３２，１９９８.
Bernardo P. Astigueta, "¿Traducción inversa o composición? -En torno a una clase de traducción japonés-español" 上智大学外国語学部　３２，１９９８.
Edelmira Amat, "Los refranes en Tirant lo Blanc desde la perspectiva del análisis del discurso" 上智大学外国語学部　３２，１９９８.

政治・思想

野上和裕　「民主化の政治学とスペインーいわゆる協定主義ををめぐって」法学会雑誌(都立大) ３９（１），１９９８.
黒田清彦　「スペイン憲法２０年」南山法学　２３（１・２），１９９９.
鈴木　暁　「セネカとエジプトの太陽神学」法政大学教養部紀要　１０９号人文科学編　１９９９.
竹下政孝　「イブン・ルシッドと現代」学鐙４月号　１９９９.
長谷川高生　「オルテガ哲学的環境論ー政治学基礎概念研究のための生・環境・現実に関する一考察」日本法政学会法政論叢 35(1), 1998.
長谷川高生　『独裁から民主主義への変遷ースペインと日本の場合ー』ミネルヴァ書房　１９９９.
長谷川高生　「『独裁から民主主義へ　スペインと日本』」イスパニア図書　２，１９９９.
Vicente Arribas, "Elementos filosóficos en la teologia de E.Schillebeeckx"サピエンチア　３２，１９９８.
山村ひろみ　「スペイン語における事態の分類について」HISPANICA ４３，

１９９９．

芸術

浅野ひとみ　「『聖ヤコブ巡礼路』に見られる古代石棺像の再利用」名古屋大学美学美術史研究論集　１５，１９９９．

浅野ひとみ　「サンティアゴ巡礼路のロマネスク美術研究序説(1) サンティアゴ大聖堂『銀細工師の門』（上）」津田塾大学紀要　３１，１９９９．

石井清司　『４分間の第九交響曲ーカザルスの果たされた夢』ＮＨＫ出版　１９９９．

ロベルト・オテロ　「[インタビュー] ピカソを撮った頃」月刊本の窓　２月号　１９９９．

国立西洋美術館　『ゴヤ、版画にみる時代と独創』読売新聞社　１９９９．

近藤光江　「「歌曲」と歌唱法についての一考察: スペイン編（その１）トラリーナの歌曲集＜歌謡形式の詩＞を例として」川村学園女子大学研究紀要　９（１），１９９８．

手塚　尚　「カザルスとピカソースペイン内戦と芸術家」歴史地理教育　５７６，１９９８．

ベルトラン監（大高保二郎他訳）『アルタミラ洞窟壁画』岩波書店　２０００．

ロベルト・オテロ　『フォト・ドキュメント　「ピカソ」』小学館　１９９９．

山梨俊夫　「ピカソという芸術家」月刊本の窓２月号，１９９９．

結城昌子・絵が好きな小学生の皆さん「[座談会] ピカソの絵っておもしろい」月刊本の窓２月号　１９９９．

雪山行二　「スペイン版画はやっぱりゴヤは恰好いい！」芸術新潮３月　１９９９．

文化

Ando, Shinjiro "La Universidad de Salamanca y el origen de las universidades hispanoamericanas, Cuadernos de Investigación del Mundo Latino(Universidad de Nanzan)　１９９９．

井出雄太郎　『スペイン巡礼の路』サンパウロ　１９９９．

岩城久哲　「カタルーニャ＝文化と民族の回廊」田丸徳善／桜井元雄／星川啓慈編『国際化時代のアイデンティティー文化と民族の揺らぎのなかで』春秋社　１９９８.
榎本和以智　『日本人には分からないスペインの生活』南雲堂フェニックス　１９９８.
カタルーニャの熱い夏実行委員会『カタルーニャの熱い夏』１９９８.
小林一宏監訳　瀧本佳代子訳　『図説世界文化地理大百科　スペイン・ポルトガル』朝倉書店　１９９９.
澤口友彌　『羊の王国』人間社　１９９８.
澤口友彌　『続　羊の王国』人間社　１９９８.
杉浦　勉　「場所・女・セクシュアリティーアデライラ・ガルシア・モラーレスについて」HISPANICA ４２，１９９８.
杉浦　勉　『ポストフランコのスペイン文化』水声社　１９９９.
高森敏明　『スペインおいしい紀行』ＮＴＴ出版　１９９８.
竹谷和之　「テニス球戯史研究とペロタ・バスカー１３３１年の文書から一」神戸外大論叢　４８（４），１９９７.
竹谷和之　「大航海時代のスポーツーコバルビアス宝典（１６１１）のペロタ球戯」神戸外大論叢　４９（１），１９９８.
辻本千栄子　「スペインにおける雇用の女性化」千里山経済学　３１，１９９８.
J.イグナチオ・テレチェア・イディゴラス(中島俊枝訳）「イグナチオ・デ・ロヨラ、一人行く道（２）」ノートルダム清心女子大学紀要外国語・外国文学編　２２（１），１９９８.
長田　弘　『私の２０世紀図書館』みすず書房　１９９９.
佐々木爽　『アンダルシアは晴天３２０日』マガジンハウス　１９９９.
竹中克行　「カタルーニャへの人口の流入をめぐる議論にみる民族と社会階層」愛知県立大学外国語学部紀要　３１　地域研究・国際学編　１９９.
辻　邦夫　「バルセロナの堀田善衛」すばる　１１月号，１９９９.
中村康夫　「魚市場の歩き方ー８　バルセロナ」　月刊百科２月号　１９９８.
堀越千秋　『スペイン千夜一夜』福音館　１９９９.
堀越千秋　『スペインうやむや日記』集英社　１９９８.

村上光信著／門田　明　監修『ザビエル巡礼ガイド鹿児島編　日本のキリスト教のルーツを訪ねて』ドン・ボスコ社　１９９９.
ドリュー・ローネイ（小林千枝子訳）『スペイン人のまっかなホント』マクミラン　ランゲージハウス　１９９９.

編 集 後 記

１９９９年１１月発行予定のＲＥＨＫ第７号が大幅に遅れてこの度ようやく刊行の運びとなりました。早々に原稿を戴いておりました執筆者の方々には大変ご迷惑をおかけしたことと思います。この場をかりて深くお詫び申し上げます。

前号から経費の関係もあり、従来おこなっていたフロッピー変換から執筆者の完成原稿をそのまま製本する方式へ改めたため、体裁の面で多少の難があることは否めませんが、投稿規定をできるだけ統一することにより、順次体裁を整えていく所存です。本誌刊行にあたり、会員はもとより多くの方々のお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

本誌には、この度は福井大学助教授の岡田裕成先生よりご多忙にもかかわらず「ボデゴンから＜ラス・メニーナス＞へ」と題する論文をお寄せいただきました。また、本学の協定校のグアダラハラ自治大学から来られ教鞭を取られているセシリア・ゴメス先生からも論文を執筆いただきました。会員からは上間篤氏（名桜大学助教授）、牛島万氏（城西国際大学助手）太田靖子さん（本学非常勤講師）からも論文が寄せられました。このほか、安藤真次郎氏（龍谷大学専任講師）、立岩礼子さん（本年度より本学専任講師）からは書評を、高橋博幸氏（長崎外国語短期大学助教授）からは翻訳を、本年度の大学院新入生の橋本和美さん（天理大学出身）からは語学に関する研究ノートを投稿いただきました。そして資料としましては、坂東省次氏（本学イスパニア語学科主任教授）が長年携わっておられるスペイン語圏に関する分野別の文献目録を掲載させていただきました。

なお、第７回修士会研究会の方は、もう一昨年のことになりますが、１９９８年１１月に本学で開催され、大学院修了予定（当時）の森直香さん、濱上亮氏、長瀬由美さん、そして山本匡史氏（天理大学専任講師）の計４名が研究発表されました。また当日は修士会研究会に引き続き、午後からは同じ会場でガルシア・ロルカ生誕１００周年記念講演会が開かれ、夕刻からは会場を森田記念講堂へ移して「ガルシア・ロルカの夕べ」と題して『ロルカを演じる』、『ロルカを詠む』、『ロルカを歌う』、『ロルカを舞う』の４つのコンセプトに分け、ロルカの芸術世界を楽しむ催しが開かれました。現代スペインが生んだ天才詩人ロルカはその悲劇の死によって伝説の人となりましたが、今なおロルカは詩、演劇、音楽、絵画を通して人々の心に深い感銘を与えていると言えるでしょう。今後も色々な催しなどを通じて日本でのスペイン研究が益々盛んになっていくことを願ってやみません。

本誌は会員の研究成果の発表の場として出発しましたが、今では会員以外の方々の原稿も掲載しております。日本のイスパニスタの数はすでに多数に及んでおりますので、今後も会員以外の研究者にも執筆をご依頼し、論文のみならず、翻訳、書評、研究ノート等の多彩な研究項目を通じて内容がより充実したものになるよう努めたい思っております。今後も何とぞご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。　（三木一郎）

REHK (Revsita de Estudios Hispánicos de Kioto)
1999年11月23日　印刷
1999年11月23日　発行

発行所　京都外国語大学イスパニア語学科修士会
〒615－8558　京都市右京区西院笠目町6

発行責任者　三木一郎
印刷所　都印刷
〒600－8318　京都市下京区北大路新町西入る

REVISTA DE ESTUDIOS HISPANICOS DE KIOTO

No. 7

Artículos:

Tradiciones, Costumbres, Artes e Industrias del Pueblo Musulmán en Al-Andalus ..... Atsushi UEMA (1)

¿Quiénes son mexicanos? ..... Takashi USHIJIMA (13)

Imagen de la naturaleza en José Juan Tablada, introductor del haiku en el mundo hispano, a través de su diario ..... Seiko OTA (25)

De los bodegones a *Las Meninas*. En torno a las miradas hacia la pintura ..... Hiroshige OKADA (39)

Expresiones populares en *La tierra pródiga* de Agustín Yáñez ..... Cecilia Gómez Bobadilla (59)

Cuaderno:

Perífrasis verbales (tener+p.p., llevar+p.p.) ... Kazumi HASHIMOTO (71)

Traducción:

Juan de Zabaleta: El día de fiesta por la tarde .... Hiroyuki TAKAHASHI (77)

Reseñas:

Angel Gómez-Hortigüela Amillo: *El pensamiento filosófico de Juan Luis Vives* Institució Alfons el Magnànim, ... Shinjiro ANDO (89)

Sophie D. Coe y Michael D. Coe, *The True History of Chocolate*. Traducido por Yukiko Higuchi (Kawadesyobo, 1999) ..... Reiko TATEIWA (93)

Datos:

Bibliografías sobre los estudios españoles (1998-1999) ..... Shoji BANDO (97)

1999

Asociación de Licenciados
Departamento de Estudios Hispánicos
Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto